



THIS
ROTARIAN
AGE

by
PAUL P. HARRIS
FOUNDER OF ROTARY

ロータリーの
理想と友愛

米山梅吉 訳



初代事務総長 チェスレー R・ベリー



初代会長 ポール P・ハリス

緒言

訳者が国際ロータリーの運動に参加することすでに十数年におよび、ロータリーの理想を高唱しきたれるの久しきにかかわらず、これに関しいまだ適當なる記述を世に公にするあたわざりしことを遺憾とした。

この精神的国際運動の創始者ポール・ハリスは今なお健在にして、去年は東洋に來遊し日本をも訪問せることなるが、その上途を前に成れるこの書が最近米国において出版を見るに至った。けだしこの大運動の理想と將來の希望を説きもつてロータリーの主義精神をせん明するに、創始者にしてしかも断えずこれを研究しこれが發達を期するに専念せるポール・ハリスその人に若くはない。訳者はこの書の贈与に接するやただちにこれを邦文に致すべきを思い、またこれによりて自己の多年の所懐をみたさんとしたのである。

国際ロータリーの運動が、比較的短かき年所に驚くべき進歩發達をなし、世界の各国にまたがるクラブの數五千、そのようする會員が十六万人に上

り、わが国においても東京・大阪を始めとして三十を算うるクラブと、千数百人に達する会員を有するの盛況にあるはもとより偶然ではない。

ロータリーの最も平明にしてかつ高尚なる主義精神に従える運動はすでに一般に是認せられ、それが単なる社交機関の類にあらざることも明かにされている。おのおのその祖国に忠良なる臣民にして、種々職業を異にせる実業人が広く友愛の主義によりて結合し、まずその道德水準を高めて自己の利益を第一とする態度を改め、もっぱら国家社会の福利に貢献するところあらんがために奉仕の精神を基調として会同し、政治宗教の外に立ち国際の親善、やがては世界の平和を庶幾するロータリー運動の理想と、その組織の真相を周知せしむるためこの事を得たるはまことにさいわいである。

往年記者がポール・ハリスの自叙伝を出版せる際、友人上原好咲君の手をかりたる因縁より、今回のこの企てもまた同君を労したことである。比星根教授が海外行を控えながら多忙の身をもってまたこれを助けられたるの多きを感謝するものである。文体は直訳を主とし難解または渋滞を避くるの程度において意識を施したるも、つとめて原作に忠実ならんことを期

したのであるが、その粗ほん(笨)の誹をまぬがれざるはもちろん、もし誤謬の発見せらるるあらばまたもとより余の責任なり。なお書中に散見する詩歌を原語のままに存したるは、これいたずらに金を化して鉄となすを恐れたゆえである。

原著者ポール・ハリスを称讚する米国の有力なる批評家の一人は、この書の第二章および第三章の記述をかえつて不必要の閑文字となし、第四章の「シカゴより何の着きものか出さずべき」以下を最も重要なものとし読者の注意をうながしている。しかれども訳者をして言わしむれば、そのまづ人頭を説き、黎明を語り、宗教に及べるところに、ロータリー運動の創始者たるポール・ハリスの幻覚が宿り、理想を生じ、宜明となり主張となつた歴史があり哲学があることで、彼は今なおここに思索を続けはたまた導かれていたのである。本書によりてロータリアンはもちろん一般にこの理想的にしてまた實際的なる運動の根本義が、よく諒解されることを望んでやまない。ロータリーに関する過去と現在の事実、ならびに将来に予見せらるる可能性とは、またこれを読んでよく明らかにされるであろう。

本書の原名が ThisRotarianAge と題せられてあるのは、かのジー・ケー・

チエスタートンがかつてロータリーを評論し、これをVictorian Ageに結びつけ諷刺的に用いた言葉をそのまま取ってきたものである。いわゆる糧を敵に借りたもので面白いことであるが、訳者のこれを変えて「ロータリーの理想と友愛」となしたるは、それがかえってこの書名に適當かつ切実なるべきを信じたゆえである。

昭和十一年三月
米 山 梅 吉

原書の序文

われらは今やロータリーの創始者その人ポール・ハリスの手に成る *Rotarian Age* というこの著を手にすることができた。これただに一九〇五年に出現しかつその後幾年間に行われた事実の諳誦のみではなく、一定の基礎理念の上に立って絶えずロータリーの発展を注視しこれを助長しつつ、彼自身も共に発展し続けた著者が、昨日の、今日の、しかして明日のロータリーを説く興味深き講話である。

彼は常に哲学的啓発的指導者であつて、ロータリー運動のこの人に負うところはすでにまことに大であつたが、今や彼は重ねてわれらロータリアンのすべてに対し深き恵沢を施すことである。正確にして平易、峻烈にして公明、まことに称讃すべき態度をもって、ロータリーに関する過去と現在の事実、あわせて将来に予見せらるる可能性とをよく闡(せん)明せる本書を提供された。

もしある人がロータリアンとなつていまだロータリーにより十分なる人

間性を受感し得ざる不満足をいだくとすれば、本書を一読して明快にその不満を一掃するであろう。あるいはロータリー運動をもって参加に値するほど重要ならず偉大ならずと感じ、これに興味を失わんとするロータリアンありとすれば、その誤れる認識は本書によって直ちに是正さるるであろう。

そもそもロータリーは、あたかも多くの楽章より成りそのすべての部分を貫くに一条の主調をもつてせる壮麗なる大円舞曲であること、さらにたとへば複雑なる織物に絢爛なる一本の金糸がこれを貫く綾錦であるということこそ、これがロータリーが名誉会長の尊称をもつて畏敬し、ロータリーのために忠実献身の努力を捧げ続けて今なお汲々として止まないポール・ハリスその人により、われらに書き与えられた興味津津たるこの事読後の感銘でなければならぬ。

チェスレー・アール・ペリー

目次

緒言 (米山梅吉)	3
原文の序文 (チェスレー・アール・ペリー)	7
ロータリーの理想と友愛	
I ロータリー時代 This Rotarian Age	11
II 夜あけ前 Twilight	19
III 宗教自由の括藍	27
The Cradle of Religious Liberty	
IV シカゴより何の着きものか出づべき	41
Can Anything good come out of Chicago	
V ロータリーの創生 Genesis of Rotary	59
VI 復興 The Renaissance	109
VII 卵殻を後に Goodbye Chrysalis	127
VIII 天の佑 The Gods were Propitious	139

IX	伸び行く悩み	Growing Pains	153
X	挑 載	The Challenge	179
XI	奉仕の理想の意味	Meaning of the Service Ideal	195
XII	ロータリーの世界平和観念は空想か	Is Rotary's Concept of a World at Peace, Utopian?	223
XIII	ロータリーに対する評価	How do Members view their Privileges?	269
XIV	宣 伝	Page H. L. Mencken	309
XV	明日のロータリー	Of Tomorrow	325
XVI	陸まじき世界へ	For a Neighborly World	335
	あとがき (昭和四五年六月発行第二版のあとがき)		363
	電子文庫版について		365

I ロータリー時代

Where shall I begin, please your Majesty? he asked

Begin at the beginning, the king said, very gravely.

And go on till you come to the end; then stop.

- *Alice's Adventures in Wonderland* (註1)

ロータリーは今日まで多数の賛成論と少数の反対論との対象となってきた。両者の所論おのいたれりといえども、いまだ著者を首肯せしむるに足るものではなかった。いずれにしてもロータリーが多く、の国ぐにわたり数百万の人びとの注意をかん起するほど光輝ある現象である以上、これに対する理解は一そう進められなければならぬと思う。

現代は「ロータリー時代」であるとかつてジー・ケー・チェスタートン(註2)は言った。チェスタートンの所説はけっしてロータリーに共鳴する側のものでないのみならず、ヴィクトリア時代からロータリー時代への推

移は時世の退えいであるときえ言っているが、しかもロータリー運動はまさしく当今の時代を特徴づけるものであることに彼は首肯せざるを得なかつた。ロータリアンはもつて満足すべきである。

英国および米国の著名なる人士のなかにもロータリー反対論者が少くないのであるが、これに対し一がい偏見呼ばわりをすることは正しくないかも知れぬ。しかし表面的名声においてはあるいは劣るところありとも、本質的思想においては彼らにゆずるところのない各国の多数の識者は、一方においてぜんぜんこれと異なる見解をとっているのである。しかしてこれら多数の識者が進んでロータリーに参加しているという事実は、偏見者のいわゆる偽善とか浅薄とかいうようなものがけつしてロータリー会員たるの資質であり得ないことを現前に証明している。

およそ事の内容に従う者と外面に立つ者とのあいだにはおのずから見解のことなるところがあり、また一定団体に属する者かならずしもつねにその団員として称賛すべき理想的資格者とかざらぬことももちろんである。はたまたロータリーを一箇のなぞのごとくみていまだよくその真諦を得ざる人びとあるべきをもつて、いやしくもロータリーに疑惑をいだくもの

ために、興味あるべしと信ずるいくた事実の記述を試みることは、ながくこの運動に関係せる一ロータリアンの仕事として許さるべきはんいのも
と思う。はたして読者はいかに考えることであらうか。

もしそれ進んで大いにロータリーを研究せんと希望する読者は、シカゴ大学の社会学者七氏の合著になる『ロータリーとは』(Rotary? カリフォルニア大学前教授フランク・ラム著『実業家の見たるロータリー』(Rotary - A Business Man, s Interpretation)、ロンドンの文筆家ヴィヴィアン・カーター著『ロータリー解説書』(The Meaning of Rotary) 等を参照するがよい。

著者は本書を成すにあたっていかに公平なる客観的態度を期すとも、所詮はおのずから物の内側に立つものであることを肯定せざるを得ない。すなわち著者はロータリーに親しみこれを信ずる十五万六千の会員の一人である。外部の非難者はロータリーに対する疑問をあげてこれを力説する。これ極めて自然のことである。著者もまたもつとも当然のこととして多数のロータリアンと共にその裏に発見して敬重する諸点を強調せざるを得ない。

ただしロータリーをえがかんとするロータリアンに必要なことは適正なる配景を把握することである。手近きものを強く点出することは人間の自然性であつて、今日貴重であるものが明日は無価値のものとなるかも知れぬと考えることは容易でない。今日多数人の頭脳に存在するものは必ず明日も存在することであろう。過去の時代の努力の完成が今日においてあり、しかしてその完成を将来の時代は尊敬する。文明はかくしてその永久性を獲得して来たのである。もしその当を得ざる配景においてこれを見るならば、ラファエル（註三）やミケランジェロ（註四）の創作は怪物である。当なる配景においてするならばそれらはまさしく不滅の神技でなければならぬ。

昨日のロータリー国際大会、今日のクラブ集会と、そのつど感銘深き重要な現実を眼前にするロータリアンが、どうしてこの生きた現実よりはなれてこれを考えることができようか、われらはまさしく現在に生きつつあるのである。「二日の苦勞は一日にて足れり」といふ、幸福もまた一日にて足れりといつても不可ではないであらう。

ロータリアンにして事実を適正なる配景において把握せんとするならば、

しばらく一步を退いて後方をかえりみなければならぬ。またロータリーそのものをのみ眺めることを止めほかの同様に重要である諸現象との關係をも考えなければならぬ。そもそもロータリーは宇宙と共に永遠のものであるうか、はたまたロータリーは後世史家に対し、ただわずかに「一九〇五年二月二十三日生、一夜。短しといえども幸福なりし生涯」とその墓銘を残すのみにて、跡形もなく消えはてるものであらうか。

まずわれらはロータリーがその祖先と環境とにいかなる影きようを受けているかを考察すべきである。この運動が三十年という短い年月をもつてかくまで伸展してきたという事實は、これひつきようそれが徐々に集積してきたった幾多の力の綜合的結果であることを示すもので、けつして一人または数人の思付きというようなものをもたらし得る所ではない。地震や噴火がそれらの任意におこる現象にあらざるごとく、この種の運動もまた任意に展開し得る性質のものではない。

この意味においてロータリーの生命は二十年や三十年を以てしては測定し得ないものである。その系図ははるか昔に伝来し、その祖先は言語と風習とを異にした幾多の国民を含むのである。ロータリーの元祖をたずねん

とするならば遠き以前の時代にさかのぼって行かなければならない。

註一 「陛下どこから始めるべきでしょうか」と彼はたずねた。「初めから始め

なさい、そして最後まで行きついたら、止りなさい」と王様はおこ
そかに言った。 — イギリスの作家ルイス・キャロル著「ふしぎの

国のアリス」アリスの証言の一節。

註二 ジー・ケー・チェスタートン Gilbert Keith Chesterton (1874-1936)

イギリスの作家、評論家。探偵小説作家としても有名、評論に「概
して言えば」等がある。

註三 ラファエル Raffaello Sanzio (1483-1520) イタリア・ルネッサンス

期の画家。作品には聖母子像が多い。

註四 ミケランジェロ Michelangelo Buonarroti (1475-1564) イタリア・

ルネッサンス期の彫刻家、建築家、画家、詩人。盛時ルネッサンス
芸術の代表者であり、著名な彫刻に「ダビデ」「モーゼ」等がある。

ロータリーは人をして、その国家に対しては忠実なる国民として充分に各自の能力をあらわし、使用人取引先その他事業上の関係者に対しては適正なる処理を怠らず、かくて個人としてまたロータリーを通じて奉仕の理想に合する実業および専門職業人の世界的交誼により、諒解善意ついで国際平和の促進を感得せしめんことを期す。

ロータリーはひとり心意状態に休止するものにあらず。奉仕は実行に在り。会員たるものはその日常の職務社交ならびに公共的接触より、他人のために計らんとする本分と自己を利せんとする欲望との衝突を調和するがために発奮努力せんことを要す。自己にさきだちて奉仕を念とするはこれそのなすべき正しきことなればなり。よく奉仕すれば自己を益することもまた大なりと信ず。

ロータリーは宗教団体にあらず。ロータリーはいずれの宗教にも干渉しまたはこれに代らんとするがごときことを願わず。その概念はすべての宗教の教義に合するものと仮定す。ロータリーは会員の奉ずる宗教または政治には関与するものにあらず。ロータリーは会員各自の国家に忠にその宗教に真ならんことを期待するのみ。

II 夜 あ け 前

When God sends the dawn, He sends it for all.

—Cervantes (註五・六)

ウェルズ(註七)はその『世界歴史概観』(The Outline of History)に「今より少くとも五万年以前に人類として完全に通用するネアンデルタール人が出現していた」と書いている。文化の夜明け前、冷くおののく薄暗い中に立った人間の最大の感情は恐怖であった。おのが支配の及ばぬ力の前には恐怖にふるえ、そのいやしくも支配し得る程のものは無慈悲にこれを粉砕した。自己保存これその最大の衝動であった。生命は彼らにとり神聖この上なき所有物であり、これを保存するためにはいかなる犠牲をも払うが、他の者の生命に至ってはそれが同じ人間であろうとも禽獣であろうとも問題ではなかった。

利己のみが至上のものであり、他のこれに並び立つものもまた利己のみ

であつた。貧婪はその対象が優勢なる力に庇護されない限り、その欲するものを取りてただちに満足が得られたのであつた。

人間は獅子の強豪、虎の勇猛、類人猿の鋭敏を持たざりしかわりに、卓抜の頭腦を恵まれ、それによつて万生の上に君臨した。

性の引力は人類を増加させたけれども、なお永い間野獸と大差のない境涯に生活せざるを得なかつた。かれらは美しい鳥の唄を聞き子供のたわむれに見入つたが、しかも戦々兢々としてかつて緊張を解くことはなかつた。かれらの世界は実在の恐怖と、時に一層恐ろしい想像の恐怖とに満ちてゐた。懷疑は恐怖を生み恐怖は敵意を生んだことであつた。

かかる時代の経過する間に、いつか宗教というものが祭典と共に出現した。すなわち悪の精霊よりもさらにすぐれた善の精霊の加護を教うる宗教が、しばらくは恐怖の苦悩を緩和する役目をなすに至つたのである。しかし心機の恐怖のみではなく現実の外敵から脅威されていた原始人は、早くも祭司の呪術にばかり頼つてはいられなくなつた。すなわち最初はこん棒、後には弓矢が血と肉との怨敵を防ぐために用いられ、攻撃は今日と同じように最善の防禦と考えられた。恐怖は時をかすことなく、まず相手をたお

ししかる後に考えるのであった。未知の相手の悪意なき者に対しても、自然に湧き上る推量から、それが悪意を内に蔵してもつぱらその表現の機会をうかがうものとされた。

ウエルズの“Somewhere”では、人は実在の敵と想像の敵とに悩まされている。夜は眼を射る電光とどろき渡る雷鳴の下に悪霊のおどる恐怖の時であり、昼は谷の深みに猛獣のひそむ憎悪の場面であつて、夜にも昼にも安息の間はなかつた。

たまたまかかる恐怖時代から脱出するみちを切開こうとした一人が生まれた。いつか彼はおのれの思想を水平線の上に引上げることが学んだ。彼は慣例というものは理性と一致してのみ意味をなすものとさつたのであった。かくて彼の思惟は伝統の偏見から脱出していた。雷鳴も稲妻もまた未知の人間も、最早これがために戦慄恐怖するの要がなくなつた。ここにもし何のさまたげも起らなかつたならば、彼はそのひきいる人々を野蛮の荒野より救出したに相違なかつたが、彼の探険旅行は遠く進み過ぎた。ある朝の事、彼は日頃の習慣に従い一つの高い巖頭に立ってさしのぼる旭光を仰いでいたのであつた。こつ然張り切られた弓絃のひびき、空を裂く矢

叫びに続いて倒れた人の坤吟が聞えたかと思えば、かなたの谷間の岩を貫く奔流のかたわらに、この時代に先行した彼は横たわり、彼を倒した他の人間の姿のみを見たのであった。あわれ彼は実に人類に対する友愛の精神をその胸に秘めた初めの人間だったのである。

その後世に不朽の名を留めた一「教師」が現われた。人類同胞の教義をいだし「靈感の言葉」をもってこれに宗教的教義を与えたことである。彼もまた余りにもはるか時代の先を歩んでいたために、罵詈雑言と嘲笑とごん誣、しかして最後に死をもってむくわれたのであったが、彼の教程は帰依深き弟子達の心の中に生命となって続き、弟子達の数は地球を囲んで広がった。もとより他の宗教いずれも四海兄弟の教理を説き、それを信仰の根本精神となさざるものはなかった。

それより又数世紀を過ぎさらに一個の先哲がスコットランドに生れた。彼は理由なき伝統に盲従することを強く拒否し、彼の魂からは生命の泉がとうとうと湧き出たのであった。スコットランドが生んだこの詩人の作中、左に掲げる章句は永遠に讚美せられるものであろう。

Then let us pray that come what may,

As come it will for a that,

That sense and worth o'er a the earth

May bear the gree, and a that.

For a that and a that.

It's coming yet, for a that,

That man to man the world o'er

Shall brothers be, for a that. (註)

この数語の中に先達の哲学の全部、希望の全部、すべての祈念の根底が発見されるのである。しかしこのあいへだたる遠き大教師と先哲の精神と熱意とが、星移り物かわる間にいかに長く徒勞にぞくしておったことか。原始未開の残存勢力は未だ清算しつくされなかつたのである。しかしてそれはアイルの先哲が死の唇をとぎしてから数年代を経ての今日もなお同じようである。

しかし太陽が四隣の雲を払って現われるが如く、友愛は時代と共に疑い

と憎しみの靄を破っておもむろながら姿を現わして来た。父母兄弟姉妹を愛して来た人間は、続いて隣人を漸次友愛という囲みの中に加えつつあったのである。原始的な表現形式ははなはだ未熟粗野であったが、さりとて教養必ずしも友愛の必須条件ではない。ベン・ジョンソン(註九)はおのれの周囲にとかく同種の人々を集めたが、バーンズ(註一〇)はつとめて野人の間に交遊を求めたということである。

友愛の伸長を妨げて来たものは少くない。言語の不同、宗教の相異の如きはもとよりそのもつともなるものであるが、商業上の競争もまた不和の哺育者であった。与論というとも常に限られたある一部に味方するものには他ならない。現実をあるがままに放置することは公衆に迎えられるゆえんであつて、反対にすぐれた先見を主張することは社会の追放者となることを意味した。今日までの文化の進運を当然の事と考へこれに満足している多くの人々が、将来の事についてとなると容易に懐疑家になりたがる。かくの如き人は歴史より何物をも学ばないものであつて、もし彼らが往時の穴居時代に生をうけていたならば、かのすべての人類に対する友愛の精神を初めて胸に宿した彼に、進んで異端者の烙印をおしたことであろう。

註五 神が夜明を送るとき、それはすべての人々のために送るのである。 —

セルバンテス

註六 セルバンテス Cervantes (1547-1616) スペインの小説家。「ドン・

キホーテ」は最も有名なものである。

註七 ウェルズ Herbert George Wells (1866-1946) イギリスの小説家、文

明批評家。主な作品として「世界文化史大系」がある。

註八 (大意) どんな事が起ろうとも まず祈ろうではないか 善意が実を結

ぶようそして 全世界の一人一人が兄弟のようになるように

註九 ベン・ジョンソン Ben Jonson (1572-1637) イギリスの劇作家、詩人、

批評家。著名な作品として「十人十色」等がある。

註一〇 バーンズ Robert Burns (1759-1796) スコットランドの詩人。イ

ギリス方言詩人中の第一人者であり、「詩集、主としてスコットラン

ド方言にて」がある。

ロータリーは代表的事業および専門職業人の集結にして、奉仕のロータリー哲学を信じ事業の真正なる成功ならびに幸福の基礎として奉仕の理論を考察せんと発起せるものにつき、その地方における明確なる事業または専門職業より一人をとるものなり。各自はその職務および日常生活の上にこの理論を移し、個人として又クラブとして発動的教訓または例証をもつて、ロータリアンはもち論会員外のすべてに理論上実際上共にこれが信奉を奨励するものなり。

III 宗教自由の揺籃

Then gently scan your brother man,

Still gentler sister woman;

Tho' they may gang a kennin wrang.

To step aside is human. ♪

ROBERT BURNS' *Address to the Unco Guild* (註一)

今日の米国に求め得られる最も尊ぶべき時代精神は、その国民一般に適用されている宗教の自由と政治の自由とである。しかしてこれもとより自然発生的に出現したものではない。だれかニュー・イングランドの海岸にはじめて移住せる、かの独断頑冥なりし一群の人々に思いおよばざるものがあるうか。ぼつぼつたる雄心かたきこと鉄の如くなりしこの一群の男女は、信仰の自由のためには旧文明の愉樂は弊履の如く捨てて惜まず、真に筆舌につくしがたき困苦を忍んだのであった。

彼らの信仰は極度に頑強にして、ために彼らの認むる規範に合せざるものはすべて神を瀆すものと考えるのであった。しかるに自己に対してはあくまで宗教の自由を強調するにかかわらず、他人にむかつてはかえつてこれを拒否した。かつては調和を肯定しない反抗者であった彼らは、新秩序に対してはよき遵奉者となり、信仰においては堅固なる教義の墨守者と変つた。しかし自由はこれを彼らのみの意思としたのであったから、他人に対しては往々汚辱とすべき不正義を宗教の名において平然と行つたことがある。

精神上ならびに肉体上に苦痛を与える方法の案出には彼らはきわめて天才的であつた。足枷、笞刑台、火刑柱などは彼らが普通に用いた苛責の具であつて、わずかな罪科を犯したる者にもあえてこの種の恥ずべきことを公衆の面前において課するのであつた。彼らは信仰の擁護者としては、はなはだ暴虐でありその攻撃の態度も強制周到であつて、少しも堪忍するところがなかつた。もし軍隊的宗教なるものがありとすれば、このニュー・イングランド初期のその如きを指すのであろう。ピルグリム・ファーザーズの信仰より来れる苛烈さは、キリスト教本来の美しき面目をかくしてし

まった。彼らの信仰は全く「平和の尊者」なる言葉の曲解であった。

かくの如き非道の刑罰を評してナサニエル・ホーソン(註二二)は次の如くいつている。「これらの場面は皆厳しゆくなものであったに違いないと人は考えるが、しかし生命の布を織るに一本の金糸すらも交え得なかったわれらの祖先達の、そうした厳格な精神そのものが恥ずべきことである」と。

死刑を宣告する検事が昔のポンテオ・ピラト(註二三)の如く、その職務に対する誠実を欠く場合があつた。すなわちピラトが大衆の声に追隨した如く彼らもまたそれに屈從したのである。不幸なる婦人に対しそのかん淫の罪を世間に表明せしめるため、一生涯抹消することを許されぬ真紅のAの大字を胸に縫付けることを命じた裁判官達は、「汝らの中罪なき者まづ石を投じてこれをうて」の一語を思い出して安眠も出来なかつたことであろう。

当時のニュー・イングランド人は慈悲よりも礼節を重じたものと思われ。極刑を宣告された婦人を絞首台に上らしめるかわりに火刑に処した事例がある。それは脚部の露出する蓋恥をまぬがれしめんとする女性の優美性への敬意に出でたるものであるという。

ニュー・イングランド開拓者の子孫達は、北米合衆国に関する限りニュ

ー・イングランドは宗教自由の揺籃であると宣言し祖先を誇っている。反動は緊張を緩める。ニュー・イングランドにおける宗教的迫害の上に表われた反動はとみに顕著であった。極度なる迫害の状態から一転して最も自由なる状態に移ったのである。

しかしニュー・イングランドと「宗教自由の播藍」の名を争うものにメリーランドがある。一六四九年に同州政府が制定した宗教法にいわく

宗教上の諸信条を社会に強制することは往々その社会に危険なる結果をもたらすものと認むるがゆえに爾今宗教は何人をも拘束せざるべきことをここに規定す、ただし聖なる三位一体を否定する者は何人たるを問わず死刑に処するものとす

と。メリーランドの祖先が定めた三位一体の教義の背反者に対する死刑と、ニュー・イングランド開拓者の社会に存した厳格なるピューリタン教義の背反者に課せる足枷、笞刑台、火刑柱などの刑罰との間には、ほとんど等差を認めないのではあるまいか。「宗教自由の括藍」の名に最もふさわしいものはニュー・イングランドか、はたまたメリーランドか、そのいずれであるにしても今日これを見る者よりすれば最も重要な点は、今や両者共

に往時のみにくいひどい状態より全く脱していることをともに喜ばねばならぬという所にある。しかしてニュー・イングランドも政治上の関係においてはわが合衆国中ヴァージニア州を推さざるを得ない。

ニュー・イングランドはエマーソン(註二四)、ホーソン、ロングフェロー(註一五)、ホイッチャー(註一六)、ホルムス、ブライアン(註一七)、ローウエル(註一八)、ソロー(註一九)ら自由主義の文学者または思想家を生み、合衆国文教の中心地となった。宗教方面においてもブルックス(註二〇)、フィリップス(註二一)、ピーチャーらの偉人の名を挙げることができる。

かくきら星の如く輩出した偉人は、ニュー・イングランドをみちびいて頑冥固陋なる宗教的迫害の泥土より救い出したのであった。従来のピュリタンと共にプロテスタントの諸分流が並び立って行つたばかりでなく、ようやく入国の数を増してきたカトリック移民をも宗教自由の大法衣の裏に抱ようした。アイルランドと仏領カナダの移住者は、アングロ・サクソン合体への最初の道を開いた。ぜん次に社会風俗は変化し、彼らの子女はメイフラワーの祖先を語る子女と相伍して遊ぶというようになり、政治宗教の異同を超越して歴史上の共通点に結合した。興味ある人類学的実験はこ

ここに始まり坩堝は沸いたのであつて、もつて十分にとけかつ結晶した新型のアメリカ人ができあがつた。ウエルズの原始人類からすでに五万年の星霜が流れたことである。すべての人間に対する友愛の念を初めて胸に宿した彼を征矢が倒したあの朝以後、人間と人間との相互理解は、緩慢ながら堅実な歩武を進めてきたのである。この行進はつねに華かではなく、その列の中には争いも起つたことであり、無智からまたあるいは悪いと知りつつ多くの血も流した。しかし前進は続いている。

戦争の不可避を絶叫しているえせ政治家の面前において、文明は着々各段階を登はんして来た。最も個人的に生存していた穴居人も、家族への親愛の念をいつか同種の他人の上にもまでふえんせねばならなかつた。ついで氏族制社会は共通の敵に備えるために、その相互間の開争をやめて相提げいせざるを得なかつた。かくて国民的団結は發達したが、今度は国民と国民とは同盟して一層有効に戦争に備えた。しかしてその連盟が大であればあるほど戦争の破壊性は凶暴かつ残酷となつた。しかし善意と常識との動く所、いつまでもかくてあるべきものでないことをわれらは知つている。

「人と人とが皆兄弟となる時」が必ず来らねばならぬ、相互の雑多なる相

違点を調和安定せしむるに先哲の道がある。

ニュー・イングランドその他の諸地方において、宗教自由のための闘争が大規模の流血を見ずして成功をおさめたに対し、政治上の自由のための闘争はそれほど都合よくは終始しなかった。若きアメリカが完全な独立国となるまでには母国と二回の血戦をあえてせわはならなかった。しかし、続いて今一つの戦争も用意されてあつた。

国際間の戦争以上に厭悪すべきものありとすればそれは内乱である。しかして合衆国はこれを最も残酷なる形において経験せざるを得ぬ運命をもつたのである。一八六〇年代初葉、北部と南部とは腥風流血のうちに握手したが、窮乏、困憊、極度の悲惨を不可避の結論として人と人とは恐ろしき四年間を闘い続けたのであつた。かくて文化の時計の針は逆転したが、しかし国民は痛手をふるって憤然と立直り、一層そう明に再び生活の戦いに突き進んだ。

前に述べた如くロータリーがいかに興隆したかを語る事が著者の目的であつたのでロータリー精神の理解を進めんがため、ロータリーの誕生を可能ならしめた二十世紀の当初におけるアメリカの精神状態を洞察するに

必要と思われる歴史的事態を、ここに検討した次第である。

著者は平和心理を戦争心理におきかえんとするヨーロッパ諸国の努力についてはここに論ずる意思を持たないが、要するにそれらの努力はその目的から見て失敗の如く考えられる場合においてすら、決して無効果ではないと借するものである。国際間の諸般の不一致を平和的に調整安定せしめたいとの希望は、疑いもなく各国民の一致した感情であろう。今もって戦争が最後の手段として存在しているという事実に対しては、その立場と経験の如何を問わず万人の慨嘆を禁じ得ない所であるに違いない。

ロータリーは国際間の理解と親善の増進を助け、今後武力使用の機会をでき得る限り少くしたいとこいねがう他はないものである。

人の思考が発表されて国々の門戸を開放する。しかして奇抜な言挙は時代々々の人間の生活を動かしてきた。南北戦争の直後、ニューヨークの、新聞記者が、「行け若人よ西部へ」と書きなぐった数言により、ニュー・イングランドを含む東部の各州に大動揺がきた。平時の言挙でこれほどに世を震かしたものはなかった。田園から工場から家庭から、牛馬車の行列は絡繹として西部にむかって開始された。父母兄弟姉妹伯父伯母従兄弟、

すべての者がこれに加わり、あるかぎりの交通機関はこれがために利用された。低れんにして良好なる土地と更にそれ以上の富を求めて、勇敢な開拓者の群は野を丘を山を越ええんえんとして続いた。彼らは同時に宗教自由の教義をもおしひろめていったのである。その間に人員はイギリス本国、ドイツ、スカンジナヴィアなどの外国からの補充隊によつて増加された。何人も歓迎であつた。希望の旗を高く掲げて約束された土地にむかつて突撃した。

何時かそこに分裂せる小隊は途中に定着して部落を形成した。彼らはその小社会がやがて昔の開拓者達が作った社会の如くに繁栄して行つて、堂々たる都会に成長するであろうという期待を掛けたのであつた。

しかるに大方は期待通りに発達するものでなく、結局彼らは農村その他それぞれの事情に適當した方面に落着くほかはなかつたのである。しかしまた予期になつた都会に成長したものもあり、ある若干のものは真と疑われる夢以上の程度にまで發展した。

かくて数箇の都鄙の中からいずれかの一つが最大の都会、西部第一の首都として立上るべき運命をもつはずであつた。そは果していずこなるべき

か、人々は自由に想像し幸運をぎよう望んでいたのであった。

まずミルオーキーはちよう児であった。ヴィンセンスも多くのファンをもっていた。セントルイスも人気者であった。しかして大河の河口フォード・ディアボンの周囲に發育したシカゴの好将来はもち論人々の期待する所であった。シカゴのよう護者は主張して言った。ミルオーキーは余りに北に偏し、セントルイスは南に寄り過ぎてゐるが、シカゴはミシガン湖の南端近くに位して水運の便に恵まるのみならず、その大陸貫通の直線に接近していることは、将来商業上の重要条件たるべき大陸横断交通の便を良く利用し得るものであると。

他の諸都市もそれぞれ發展を續けて支持者の喝采にむくいたが、シカゴははるかにひいきの期待以上に發達し、遂には他の追隨を許さぬ西部第一の巨大な首都となつた。人種的、政治的、宗教的諸尖端がほう着し、相互に粉碎合流して表面的に統一を形成する人間社会の大渦であつた。かかる雰囲気の中に、しかしてまた次に語る如き条件の下に、明星ロータリーはここに出現したのである。

註一 (大意)おだやかに貴方の兄弟をよく見てみなさいそしてまた貴方の

姉妹をも彼等には いろいろと悪い所があるかも知れない それ
をいちいち とがめないのが人間らしさと言うものだ

—バート・バーンズ

(註一〇)

註二 ナサニエル・ホーンン Nathaniel Hawthorne (1804-1864) アメリ

カの小説家。代表作として「緋文字」が有名である。

註三 ポンテオ・ピラト Pontius Pilate サマリア、イドママ、ユダアの

総督。一世紀前半頃の人物、イエスの死刑を宣告した。

註四 エマーンソン Ralph Waldo Emerson (1803-1882) アメリカの思想家、

著述家。作品に「日記」一〇巻がある。

註五 ロングフェロー Henry Wadsworth Longfellow (1807-1882) アメリ

カの待人。詩集「夜の声」等がある。

註一六 ホイッチャー John Greenleaf Whittier (1807-1892) アメリカの詩

人。クエーカー教徒としての社会主義的詩人で作品には「自由の

声」がある。

註一七 プライアン William Cullen Bryant (1794-1878) アメリカの待人。主な作品として「死観」がある。

註一八 ローウェル James Russel Lowell (1819-1891) アメリカの詩人。奴隷廃止論者で、諷刺詩「Bigelow paper」がある。

註一九 ソロー Henry David Thoreau (1817-1862) アメリカの哲学者、詩人、自然文学者。著名な作品に「森の生活」がある。

註二〇 ブルックス Van Wick Brooks (1886-) アメリカの批評家、アメリカ生活の分析を行い、作品に「清教徒の酒」がある。

註二一 フィリップス Wendell Phillips アメリカの社会改革論者、強硬な奴隷廃止論者として知られている。

ロータリー・クラブが一地方における実業あるいは専門職業の歴然たる各方面の一人を限り会員となすゆえんは、おのおの実業および専門職業中よりロータリー・クラブに有力にして活動的なる代表者を挙げ、ロータリー・クラブはその会員を通じて同地方におけるあらゆる実業および専門職業に従事する人々との交渉に、責任ありかつ直接なる通路を得んとするがためなり。

ロータリー・クラブの集会出席は義務的のものなり。理事会の認むる所となるべき許可なくして四回の継続欠席をなしたるものは会員たる権利をそう失す。しかれどもその欠席の直前後の週間に他のクラブ集会に出席せる会員は、自己のクラブに出席せるものと同一に計算す。

IV シカゴより何の善きものか出さずべき

南北戦争後の四半世紀中に、シカゴは開拓者の部落から将来有望の新都市へと一挙に発達した。

一八七〇年およびこれに続く数年間はダッド・ディアボーン（シカゴの仮称）の最も躍起を試みた時であった。一八七〇年十月九日にはそこに立派な都会を持っていたのに、一八七〇年十月十日にはそこに炎々たる火災が起り、一八七〇年十月十二日そこには漠々たる焼跡の外何物もなかった。すべては一箇のランプとオーレアリー夫人の飼牛のひずめとが隣り合っていた結果であった。例のビュセファラスが善良なる馬の王であったとすれば、オーレアリー夫人の牝牛は不良なる牛の女王だったのである。時も場所も場所、颯然この牝牛が与えた一蹴は多年の集積を旧の平地にくつがえし、ニュー・イングランドの数箇の火災保険会社を破たんせしめたのである。

アメリカ国境地方における無秩序なる生活の特異な情景は、じらいしば

しば措かれた所である。實際それはあらゆる揮発性物質の無差別なる混乱がもたらす自然の結果であつた。祖先と伝統とを異にする勇敢なる人間の
みが一つの共通なる衝動により、利己をほしいままにして蝟集している処
に果して平和を望み得たであらうか。

シカゴは二十世紀の初期に入つてもなお開拓者部落特有の風俗人情を多
分に存していたので、そうした社会に第一につき物の鉄道とも言うべき賭
博は公然であつた。酒場が盛になり密会所がこれにつき、高架鉄道の下は
醜類によりあたかも巢に群がる蜂のようであつた。

いやしくもかかる世態が是認されていたという理由の中には、商業化さ
れた罪悪の隣りに真面目なる実業の存在する機会が少くなかつたという点
もある。何らか異変が起らぬ限り事態はそのままの推移を継続する外はな
かつたのである。これ実業の勢力範囲に属する問題ではなかつた。

酒舗と酒舗の間に混じて無数のサルーンが存在し、そのあるものは犯罪
と政治的腐敗の培養所であつて、しからざるものも、あえて他人の事には
容かいする必要はあるまいという態度をとるていのものであつた。禁酒令
以前のシカゴをしつてゐる飲酒党も禁酒党も、この厄介なる論題に関して

はその見るところを一つにする点があった。それはその当時のサルーンが決してよき資産ではなくて悪しき負債であるということである。

ある人のいえる如く当時のサルーンは貧しい人間の集会所であったが、同時にそれが多くの場合彼らの家庭でもあったのである。サルーンに出掛けることは多数の人々にとって絶好の屋内遊戯であったと同時に、またある者にとつては規則的な勤務先のようなものであった。サルーンの誘惑は交を求める人間のおさえがたい欲求のうちに存在していたのであった。一たびここにおもむけばたちまち肉身同士のような愛情はただよい、アルコールの昂奮が人と人との間のしよ壁を美事に打破る役目を果していた。うらむらくは相互のしよ壁ばかりでなく、各人の自尊心をも撲滅するのであった。堅固なる人はそうした放逸に反抗してしばらくは自分を抑制し得るのであるが、所詮はアルコールの支配に征服されてしまうのが通例であつた。

交りということとはまことに不思議である。人生の行路を照らして愉快な雰囲気を放散する貴きものに相違ない。しかし一度それが人間の本能を麻ひせしめ、その極夫婦親子の愛の焰を消そうとするに至つては、また法外

に高価に過ぎるものといわざるを得ない。

シカゴのサルーン時代は同市がいまだ浄化されていなかった時代であるという特別の意味があるとしても、この悲むべき事實は事實である。当時のシカゴには今日に見る如きよく整備した市街を約束するような面影は、商業区にすら全く見えなかった。下水は極度に不完全で、街路にはその町筋の特質を代表する種々の悪臭が息をついて流れていた。こうした臭気の紛々たる中を歩いてみて新来者はわずかに牛馬に荷付けをする町、膠を煮る町、漬物を製造する町位をかぎわけ得るに過ぎなかったであろうが、シカゴに長い間嗅覚の修練を経た者は、限をとして進んでもその方向をあやまらなかつたことであろう。

シカゴ川は、汚物や家畜置場から流れ出る脂肪を河口にむかつて運搬する役目をおうて物憂く流れていた。このくさい積荷が河口にいたって荷卸しされるミシガン湖は、実に市民の用水の源泉であった。こん濁の河水はそれ自身の臭味をもまじえて複雑極まる悪気を発散しつつ流れ、時にはその油ぎった水面に不用意に投げ捨てられた紙巻煙草のすいがらより火を発することすらあった。しかし不潔物は結局目的点に流れ着いて飲料水を思

うがままに汚毒し、あらゆる伝染病を次から次へと流行させることができた。

事態が余りに悪くなるとそれ以上には悪化し得ない。ただある変化がきてそこから始めてよくなつていくよりほかはない。果してついにぼつ発せる与論は起つてこの醜悪なる河川を正反対の方に転向せしめた。すなわち河水をその有害なる混合物と共に迂余曲折せしめ、これをイリノイとミシシッピの谿谷に落下させ、中途自然の浄化作用を行いつつ、メキシコ湾の清き塩水に注ぐことができたのである。禍を転じて福となしたのである。

この市民衛生の復興は六百万弗の経費を要したが、それだけの価値は十分にあつたばかりでなく、さらに一そう大規模なる新計画をよび起す刺戟となつたといふべきは、インディアナ街からエバンストンへ掛けて市を美化せんとの計画である。ダニエル・バーナムの「都市美化論」の夢は、「シカゴ市美化計画」として実現したのである。現在その工事は除々に、しかし確実にしゅん工に向つてゐる。ある人がシカゴの水に画した一帯の地を評して二十マイルの仙境だといったのは適評であつて、美と醜とがなお錯

然と雑居して不統一ではあるがそれがシカゴである。

十九世紀の終末に近く第一回万国博覧会直後の不況期は、シカゴが零落した最悪の時代であった。貧きゆうの苔ほど苛酷なものはなく、大衆はその最下底にあえいだ。所有する者は失わざらんとしてたたい、失える者はわずかに生活のかてを得んとして争った。借家人は家賃を怠り、借金者は利子を怠り、小売商人はおろし先への、おろし売商人は製造元への支払を怠った。裁判所は不法侵入、監禁顧、貧困保護、抵当処分、失権回復、差押などあらゆる事件で充満した。貸手は天才的弁護士の考

案し得る限りの手段をつくして、無資力の借手から貸金をとりもどそうとした。大吹雪があつて街路のうずもれるのをむしろ歓迎したほどで、人間の浮荷や捨荷を拾いあげて臨時の仕事を与えることができたのである。うえたるものにはいかにしても食を与えざるを得ない。この場合何らか与うべき仕事のあることはせめてものさいわいとされた。怠惰は不幸を助長する。

第一回シカゴ万国博覧会閉鎖後の惨たんたる光景は容易に忘れがたいものがある。これに加えてシカゴは全国を席卷した金融恐慌の第一撃におそ

われたのであった。すでに博覧会にそなえるための過じよう建築の現象が市のあらゆる方面にあらわれており、その結果は当然悲劇でなければならなかった。閉鎖された店、劇場、ホテル、アパート、貸事務所などは、貼り散らされた売家または貸室札と共に悲痛なる圧迫感をそそっていた。

場末の裏町に至っては心のうずくような貧困の光景がずい所に目撃された。職は最少限に減じてしまい、スープ店が到る所にできた。市の公会堂より巡査派出所に至るまで、公共建物は一せいに寒い夜を家なき男女や子供らに提供するため徹夜開放された。獄舎は扉のおさえきれぬまでに充満した。ただそこにつながられるために軽罪を犯すものすら多かったのである。いかにして出獄するかというより、いかにして入獄するかが問題であった。懲罰監禁六カ月が大いに歓迎されたことである。

こうした逆転にであった初期の実業家は、当時としては相当に高い道德水準を維持していたにもかかわらず、たちまちこれを放擲して一般的なるうばいあいに参加していった。「サービス第一、自己第二」の標語の如きは淡き月影ほどにも認められず、「自己保存第一」ということのみが人々の支持を買ったことである。

当時は腐敗せる実業社会と有効に戦うだけの商業会議所などの組織はいまだ見られなかった。わずかに信用業務に従う人々の協会の如きものがあったが、これまたただに消極的自衛を目的とするものに過ぎなかった。しかしこの間にも一つの見すごしてはならぬ勢力があった。市民の胸中にひそむシカゴ伝来の“ I Will ” の精神これである。

その頃英国において出版せられたダブリュー・エッチ・ステッドの著『もしキリストがシカゴに現われたならば』(If Christ came to Chicago)は、シカゴの文化的良心と衿持とに少からざる動揺を与えた。同書はシカゴの欠点を仰々しく描出するに急にしてへその優良なる分子がいかに悪と苦闘していたかの事實はこれを見すごした。実は本文よりも標題が悪かったのである。『もしキリストがシカゴに現れたならば』とはいかにも複雑にして不快なる暗示を与えるものであった。しかし惨火の跡ばくばくたる焦土に再びたったシカゴは、四面楚歌の中からおどり出るだけの闘争力を持っていた。浮沈を極めたシカゴは浮沈のゆえに成功した、鍊えられた抵抗力はあらゆる場合に役立つたのである。

「シカゴより何の善きものか出さすべき」。今日までにシカゴに生まれた幾

多雄けいなる人間力はしばしばこの疑問の言葉を投げかけられたのであるが、ロータリーもその選にもれていない。あるいはロータリー如きものは一そう朗らかな空の下に、一そうおだやかな気候の下に、しかして精神的動揺のない都会に生まれ出ずべきものであると考えることは無理ではなかつたかも知れぬ。しかし他面から見れば、市民生活における文化的正義のための聖戦が熾烈に戦われていたシカゴの如き物情そう然たりし都会こそ、ロータリーのような運動の発祥地として、最適の地であつたとも考え得るのではあるまいか。

現在の南米ウルグワイ第一副大統領ドナト・ガミナラが、国際ロータリー第六十三区のガバナーであつた時、大いに自国にロータリーの拡張を企図した。最初にシカゴの悪評はこの運動に最上級型の人士を誘引する邪魔をなすものと考えた彼は、シカゴが決して世評の如き悪都市ならざることを見明これ努めてそのハンディキャップを取除かんと試みた。しかし間もなくそれが容易にうなずかれがたいことを覚るや、彼は巧妙にも戦術を一変した。すなわち将来の会員として目指す人々がシカゴは世界中最悪の都市の一つであるとひぼうするのに対し、彼は応酬してシカゴは最も悪い都

会に相違ない、そのゆえにこそ、市民中の尊敬すべき人士が敢然たつて悪に抗することの絶対に必要なるゆえんがあつたので、ロータリーがたまたまシカゴの地に生まれた意義も実にそこに存するのであると説いた。この戦法をもつて反対をくじき稀有の成功を経験したのであつた。

二十世紀の初頭にシカゴが悩んでいた病患は同じく他の各地にも流行し、一般的に実業界は邪道に踏み込んでいたと言ひ得る。消費者、競争者、あるいは被傭者の問題に関する実業道德の水準は決して高いものではなかつた。「購買者自衛主義」が消費者に適用され、しかしして競争者の悪意と不誠実とはまさに破かい的な極点にまで達していた。競争相手を傷ける位のこととは奨励はしないまでも正当なこととされていたのである。「購買者自衛主義」の標語に「しかして競争者を地獄に落とせ」と附加してもよいのかも知れなかつた。

鉄道会社は同業競争者を打倒するために、往々運賃を実費をはるかに下まわる値段にまで引下げることがあつた。はなはだしきは競争相手から貨物をうばいさるために無賃輸送すら敢行したことがあつて、ある二つの鉄道が火の出るような競争を行つていた時の話がある。シカゴからニューヨ

一クまでの家畜の運賃が貨車一輛百五十ドルからただの一ドルに引下げられた。ところがその競争の結果は次の如き事情から勝利者（運輸量における）が敗北者となった。すなわち貨物の争奪において敗れた方の鉄道は、敵の知らぬ間に西部における家畜の貨車積何千輛分かを買い占め、その相手の鉄道によって東部に運び普通価格より一輸当り百ドル値引した価格をもって売ったのであった。

また海運会社に対抗しこれを破壊する目的をもって、鉄道運賃が実費に関するところなく切下げられたことがあった。しかしてその目的が達せらるるや否や運賃は速かに旧率に復したのである。州内商業委員会ないしは州際商業委員会の設定されるまでは、右の如き事態に対し公衆は何らの発言権をも有しないのであった。公衆の見地よりする鉄道事業の統制などということが如何に軽視されていたかは、当時の鉄道界の一有力者によって吐かれた次の数語がよく表明している。いわく「公衆は地獄におちよ」と。しかし諸般の商事法令が發布されるに及び、事態は公衆の有利に旋回し、昨日までの迫害者は利益割戻制のために逆に圧迫されるにいたったのである。

次の無謀なるこのつかみあい時代における被傭者の労務は最低極限をもつて売買せられた。もっぱら人道的方面より被傭者についていえば、唯一の人間の要素と考えられていた主人の意志または気紛れによって、被傭者は勝手に使用される補助物にはかならなかつた。

そもそも社会全体の思想が低調であつた。当時の富豪はその富を子孫にのこすはか他になす所を知らなかつたが、また継承者は、自分自身のためのあるいは社会のためにその富を善用し得るだけの用意を欠いていた。いわゆる金持の子息なるものは、親の遺産を酒と女と愚劣な歌でも歌うようなことに浪費する場合が多かつたのである。閑暇の利用には実務の修練より一そう慎重なる用意がある。憐情なる精神は悪魔の作業所である。十九世紀のアメリカ青年は多くの場合進んで自からえらぶところがなくつたのである。しいてえらぶとすれば実務かしからざれば破滅かであつて、その実務もその中に何ら尊重すべきものを存していなかつたのであつた。自殺件数十三というのがある小都市のレコードであつた。また離婚件数一カ年七十五というのがある他の一小都市のレコードであつたが、それらの多数は富裕なる青年に関する事件であつた。

今日の青年訓練というようなことは問題とされなかつたのみならず、実務に没頭していた父は他をかえりみる暇がなく、腕力を加うるを必要とする場合の外、子供の薫陶は一切母にゆだねておくというのが一般観念であった。「母」なる言葉には深い尊い意味が持たされていたが「父」なる言葉は暴君ないし不当なる譴責を暗示するのが通則であつた。

当時の産業支配者らがその子を破滅に向わしめ、あたかもそり遊びのようになりに突進せしめたというが如き余裕は、団体組織その他利益よう護の方法を知らなかつた消費者または被傭者の持たなかつたところである。巨富は原則として禍を意味する場合が多く、幸福を立証する場合ははなはだまれであつたのである。

しかし不ていの実業家、悪徳政治家、ないしは賭博場、魔窟、酒場などの経営者も無障碍のみちを濶歩していたわけではなかつた。反対勢力は各方面から動員されつつあつたのである。動反動の原理は昔のニュー・イングランドにおけると同様に作用していたのである。

東部から一青年がきてシカゴを訪問した。彼の見る所では煤煙、空氣の水の不潔、悪臭、政治上の奸策、その他諸般の社会的欠陥は皆一時的現象

に過ぎなかった。それらは頽廢の証拠にはあらずしてむしろ躍動の証拠であつて、大都會に導く標石の変形に外ならなかつたのである。今や彼の先見を記念する如く、市の南部には「シカゴ大学」がきつ立している。北部には「ノース・ウエスタン大学」とカトリック派の二大学が景勝の位置を占め、西部には「イリノイ大学」系の数個の専門学校が、公立病院附近にこれまた地の利を良く散在している。

テオドラ・トーマスは「シカゴ管絃樂團」を創案し実現した。今一人の幻覺に富んだ不屈のシカゴ人は豪華なる「美術館」を設立した。その他「シカゴ・グラランド・オペラ劇団」、「フィールド博物館」、「プラネタリウム」、「ローゼンワルド産業陳列館」、「大養魚場」、「歴史協会」、世界第一の大步道設備、五千四百エーカーの公園および遊覽地区など、みなこれ堅忍不拔のシカゴ人の所産である。しかるに彼らの名はカポネやデーレンガー程には知られていない。

邪悪なる勢力に対する強烈なる反撃はあらゆる方面において見られた。ドワイト・ムーデー、ビリー・サンデーおよびポール・レイダーなどがかかる危険なる濁流の真只中において福音伝道の生涯を開始したことも、

また「シカゴより何の善きものか出さずべき」という疑問に対する立派な回答を提供するものである。彼ら三名の伝道者が相寄って盛上げた悪へのきつ抗力は実に旺盛なるものであつて、驚くべきはその全合衆国に伝播したはかりでなく、さらに海を越え他国へまでも伸展したことである。

また西部のある一小村で教鞭をとっていた若い婦人があつた。彼女は病弱と貧困のうちに生活苦を続けていたが、善と悪とが猛烈に戦いあつてゐる激動の都市シカゴを傍観して暮すことができなかつた。それが今日「婦人キリスト教禁酒同盟」の名と共にフランセス・ウィラードの名が、アメリカ婦人の脳中に永久に存在している結果となつたのである。

今一人の村嬢ジェーン・アダムスは、アメリカの「ロンドン・トインビー・ハウス」とも見るべき「シカゴ・ハル・ハウス」の生みの母であつた。これその勇氣と自己犠牲の精神とをもつて、シカゴの最悪なる街頭に永遠の別世界を開拓した人間があるという事実の好適例で、醜悪なる巷の中に類似せる他の幾つかの事実を発見するに困難ならざることである。

シカゴの物語は断じて罪悪と腐敗の記録のみではない。かえつてこれ信念に生きた強固なる男女の生活の物語にして、嘔吐を催す如き醜悪なる

事実のみがシカゴ精神の表現ではない。ただ不幸にして悪の事実は劇的にして人目をひくが故に、世人はもつともひろくこれに印象づけられてきたまでのことである。

豪州の一新聞記者の次の記述は、前のステッドの言ったことよりもはるかに深い観察を表明している。いわく「オーストラリアの新聞はなぜ余の見たる如きシドニーの学ぶべきシカゴを報道せざるか。いやしくもわれらのよき都市を得んとこいねがわばよろしくこれをシカゴにならうべきである。同時にシカゴにおいて偉大なる功績をあげた人びとがそこに何物を征服せねばならなかったかを知るを要するのである。未開時代の荒涼たる湖畔にうちたつた部落に、ほうはいとして世界の各地よりする雑多の移住民が流入し、しかして一般の事物がごとごとく粗野を極めた中からこの美しき都会は創造せられたのである。しかもその建設の事業はいまだ終つてはいないのである」と。

シカゴの悪徳はことごとく世界に向つて喧伝されているに反し、これに對抗する無数の善行は想像されてもいない。しかしシカゴの市民生活の上に現われた罪悪と腐敗とは、これを河川とすれば水面の波紋にすぎないの

である。大きな底流はこうこうとしてその勢を続けている。

ロータリーはその発祥の都市についてごうも恥ずべきではない。愛国心と理想主義精神の基礎に立ち、熱情と勇猛心とに支持せられた輝かしい諸運動に続いてロータリーは出現したのである。ロータリーの如き運動の発芽期としては、二十世紀の初頭ほどに絶好なる時期はなかった。同時にそれを育成して確固たる方向を示すべき土地としては、この攻撃的な男性的なしかもエセ理屈の多きシカゴほど適切なる都市はないのであった。

シカゴのいわゆる“ヒュー”精神とはそもそも何か。「第一回シカゴ万国博覧会」の建設者にして「シカゴ市美化計画」の設計者たる不朽の名匠ダニエル・バーナムは答える。

「計画は小なるべからず、小なる計画は人々の血を沸かすに足らず、また恐らく実現をも見ざるべし。計画はよろしく遠大なるべし。宏牡にして論理正しき設計図は一度えがかれんか決して死滅せず。設計者の後に生残りてますますその切実性を加うべきをねがい、よろしく希望と実行の高遠なるを期すべきである。われらの子孫はさらに大いにわれらを驚嘆せしむるにたる何事かをなさんとするものなることを忘るべからず。汝の座右銘

を正せ、汝の警標識を明かにせよ」と。

V ロータリーの創生

From quiet homes and first beginning.

Out to the undiscovered ends,

There's nothing worth the wear of winning.

But laughter and the love of friends.

—Hilaire Belloc (註二二・二三)

もしある者が時代の丘陵より、生々たる人間の思想なり行為なりを、あたかも自然の風景の中に樹木を指呼するごとくに見分け得る無形の眼鏡を掛けて望み見たとすれば、彼はその時代色のうちに必ずや或る種のけんちよなる生存競争を発見し得ることであろう。しかしてこれにはいたい(胚胎)せる健全にして不屈不撓の Will to Be 精神が、今やロータリー、キワニス、ライオンズ・クラブその他この種の運動に表現して来たものである。

白血球が傷口を整えて血液の流出を防ぐごとく、協力、宗教自由、勇氣、友愛は、利己主義、せん望、信仰迫害、憎悪、恐怖などあらゆる破壊的な

る社会秩序の敵を討伐する。

湖畔の一都市を舞台として一場の演劇は開幕した。ただしその劇がいか
に展開して行くか、その効果いかんは何人も予想しなかつた所であろう。
登場人物は世の平凡なる常道を行く実業家及び職業人であつて、彼等は必
ずしも一頭地を抜く程の特質を備えた人々ではなかつたが、しかし一般的
表現における代表的の「優良分子」と言い得べきものには相違なかつた。
皆な時代の自然児にして従つてまたその脆弱性ももっていたが、要するに
旧来のアメリカの伝統を学校において或いは家庭において十分に吸込んで
いた人々である。

相互に同気親愛の士であつて、各人はそれぞれ明確に異にせる職業を代
表し、性質においてはまたはなはだけんかくせるものをも持つていた。彼
らは宗教、種族、政治上の異同を超越して選ばれたものであつて、或はア
メリカ人を祖先とし、或はドイツ人をスエーデン人をアイルランド人を祖
先とした。又新教徒ありカトリック教徒ありユダヤ教徒あり、要するに総
てがアメリカという熔鉱炉の所産であつて、この意味において集団はそれ
が将来運命的に世に実現せんとする世界的秩序のために、まことにふさわ

しい祖先だったのである。

まず集団の一員シルヴェスター(註三四は石炭商で我等の第一次会長であった。ドイツ人を両親とし天性親切で、友に会うや満面歡喜に輝くという風であった。彼はよくインディアナの農家に育った少年時代の思い出を面白く物語った。その中には丸木小屋や炉辺の団欒が情趣深く描かれたが、又その後の貧困時代には吹雪が寝ていた屋根裏の棟の破れ目から流れこんで、そのしたりが床に落ちたことなどがあつたという辛い日の追憶談もあつた。こうした若い頃の記憶を彼は宝玉のごとく大切に保存していたのである。彼のシカゴにおける生活は終始苦戦ではあつたが、年少の家族達に対しての扶養の義務は完全にこれを尽した。アメリカ・スペイン戦争にさいして彼は召集に応じてキューバに出征した。彼は優に国家の選良たるべき人物である。最近選挙の重要性が年と共に顕揚されつつある時、彼の如きは正にその真価を発揮すべき枢要の人間である。実際、彼の生活は今や時勢の推進と共に有用性を増して来た。すでに彼は社会事業および教会事業の中心となり、慈善事業には欠くべからざる人物となっている。過去数年間彼は青年の味方となって来た。彼のそう明なる指導に感謝する青

年がはなはだ多いことである。特に健康の維持と復活とを彼に感謝せねばならぬあわれむべき不具の少年がたくさんある。彼にとつてはいやしくも人間の要求する所のものは命令である。彼の電話は日夜を問わず鳴っているが、彼はたとえさしつかえのある時でもこれに答える事を怠らない。実際時にはさすがのシルヴェスターも応接につかれていたことがある。かくてかつての不況時代からその後シカゴ市の社会事業が組織立つまでは、彼の



シルヴェスター・ジーエル

の事務所は一種の人事相談所の役目をなし、数百の請願者に助力をあたえたのであつた。シルヴェスターが今日までに衆人の福祉に尽して来た最大の貢献は右のごとき社会事業においてであるが、他方その職業上における

貢献、換言すれば彼自身の実業における経営態度もまた前者に劣らぬ称讃に値するものである。彼の事業も今日までには何度か試練の日を切り抜けねばならなかったが、彼はその悲況の最中にも使用人を解雇する様な事はしなかった。

その下に数年来忠勤をはげんでいる一支配人は、機会ある毎に主人を称揚する事を忘れない。もし何等かの事情で主人が事業の経営をやめる様な事があれば、彼も商売を止めるのみで、永年この主人の下に勤めて来た彼は、更に又他人のために働くというようなことは恐らく不可能だと思つて、著者に向つて一再ならず述懐した事がある。

シルヴェスターが残せる道義人として隣人としてまた友人としての、社会上並びに職業上の功績は朽ちることなきものである。言換ればそれはロータリーの主義を実践上に示した輝ける適例である。ロータリー創立の頃彼は会員の職業研究とその銓衡方を提案した。これはロータリーに現在する「職業奉仕」(vocational service activity)の濫觴なるべく、もしかく断定するあたわざる迄も、少くとも後年発達した同委員会とその方向を一にせるものであったことは確実である。

次はガスターヴァス(註三五)にして、彼もドイツ人の両親から生れた創立者の一人である。ガスターヴァスの個性は人目を引くものがあつた。即ちまれに見る綜合的性格の人で、その美点は直ちにその欠点を補うてあまりあるものであつた。一面激越で命令的で威圧的な所があると共に他面には温和で柔順で親しみ易い所があり、滑脱端倪すべからざる人物であつた。

性急の質でその言葉は機関銃の如く速く鋭く、路上の行人も又耳をそばだてるほど特異のものがあつた。教育の造詣は余り深くなかつたが用語は正しきクラシカルなものであつて、實際その猛烈なる思想言表に供する豊富なる語いを何処から修得しきたつたかは一つの謎であつた。惜しむべしガスの会員生活は極めて短かつた。彼の事業に損害を招いた熱病的な景気の波瀾は先ず彼をして会員を辞退せしめ、次いでその数年後死が彼を永遠に奪い去つてしまつたのである。安らかにあれ親愛なるガスよ、君の此の世に在るの何ぞ短かかりしことよ。

今一人のハイラム(註三六)は、メイン州から移住して来た洋反物商でまことに愛敬すべき人物であつた。彼は何としても大都市の生活には完全に満足することができず、心は終始生れ故郷から離れることができなかつたか

ら、暑中休暇にはほとんどかかさず帰省した。恐らく晩年はその嚴寒の地メイン州に送ることであろう。

ハイラムはやむことをえざる事情により永く会員として留まることを得なかつたが、その退会後もこの運動に興味をつないでいることをしばしば如実に示し、創立当時の記憶を今もなお抱ようとして楽しんでいゝことである。

以上の三名と著者とが、そもそもロータリーの会員として集合した最初のグループであつて、いわば大軍の前衛であつたのである。しかしこの四人を列挙して止むことは不公平であらうと思ふから、今少しく紹介を続ける。

第五番目の会員、印刷業者のハリー(註三七)。彼は職業上に必要な素質に関する限り欠くる所のない人物であつて、いかにも正確で直線的で信頼するにたりた。不正直とは彼の理解しえないものであつた。ただ一つわれら同志が最初彼に疑問符を附した点は、「果たして彼に友愛を解し得る素質ありや」であつた。一見水の如く冷やかで、人情の道には無経験のごとき彼であつた。北部ミシガンの農家育ちであつたが、父なる人は余り他人を

信じ過ぎるといふ弱点を持つあくまで実直なる宗教人であったがため、家の勝手向は絶えず窮乏をうったえていたという。こうした窮乏が若いハリリーの胸に、人間というものは常に貧困に対して無慈悲なる戦いをするように創造された動物であるといふ念を深くさせたのであった。

しかし彼の社交性に対する疑問はいくばくもなくして美事に解消して、



ハリー・L・ラッダズ

彼は会員の中でも最も親しむべき一人となつたのである。ロータリーの友人仲間に雑つてゐる時彼はつねに嬉しく晴やかな心持になつてしまふのであった。彼はクラブ歌手の役目を引受けていたが、ロータリーの友愛にあふれる感激を彼はこれに

よつて最もよく表明しうるのであった。我等のハリーもまた得がたきの士である。

ロータリーの著名なる唱歌指導者の一人は、クラブの合唱の理由として次の四点をあげている。第一友愛の宣揚となること、第二気分放出となること、第三音楽への関心をうながすこと、第四歌の選択が会合の目的に合すればよく会員の話題を用意させることが出来るものであると。

著者もまた右の説に同感である。著者自身の経験よりすれば、演説者は演説に先立つて乗せられる音楽から往々靈妙なる好刺戟を受けるものである。その場合曲の選択が適切でなければならぬことは勿論であつて、もしこれが選定よろしきを得ざるときは、それはかえつて演説者の構想を混乱せしめ、そのために演説の効果を減殺する。経験未熟の演説者がかかる場合に全く足をすくわれ、会合の精神に適合せんと懸命にあせつて、遂には折角準備した腹案とは別な即席の演説に自らを陥しこんでしまうことが往々あるようである。故に一つの会合における歌曲指揮者の責任は重大であつて、会合の成功不成功が、かかつてその双肩に在る場合が決して少くない。早き時代のキリスト教徒がプリニーのような学者を当惑せしめたも

のは、一つに彼らの讚美歌合唱であつたという。

プラトール曰く「音楽を通して人の魂は調和と階律と而して正義の觀念をすら学ぶ。調和を得たる人に不正義のあることなし。音楽と調和とは神秘を人間にあたえて、これを美化し魂の深奥に導かれるのではないか。音楽は人格を型作る。しかしてそれは社会及び政治上のあらゆる事項の決定を分担する」と。

ダーモン曰く「音楽の流行曲が変化する時、国風の根本原則もまた変化するものである。音楽の貴重なるゆえんは人間の感情と性格とをじゅん化するのみでなく、人間の健康を回復し保持するものである」と。

アメリカ・プレスビテリアン教会の統率者ウイリアム・シャルマース・コヴァート博士は、ようようたる讚美歌の声はキリスト教会の精神力を回復せしむるに最も適当で切実であると説いている。著者もまた、最も有効にロータリーの精神力を振興してきたものは、その唱歌の感応であると信じている。

ただし現在国によつては歌うことの盛んでないロータリー・クラブもあり、会合のプログラム中に音楽を加えると否とは各クラブの自由にまかさ



ウィリアム・ジェンセン (ビル)

れている。各国民性の相異はこの点に關しても厳として永久に合一せぬものであろうか、或は否か、時節の回答を待つ外はない。ハリーよ、ねがあくは君の友人との団欒を永久に享樂せよ。我ら古き同士は彼の「ステイン・ソング」の最後の

一句が君の指揮棒に従つて歌われた後の、君に対する親しみの記憶は、永く人々の心に残つて清新なるものがあることを知っている。

第六番目の入会者ビル(註ニハは魂在不動産業で、クラブの第一次幹事を勤めた。彼の平静と、いんぎんとは最もけん著なるもので、いかなる角度から見ても粗野な所がなかった。いかなる哀傷に直面してもその特質の沈着を失わなかつたのは彼であった。

オルガン製造業者のアル(註三九)。一度彼のかんじたる笑顔を見そのユーモアにふれたものは、彼がロークリアンであることを直ちに肯定したであろう。彼は第二次の会長にも任じたのであったが、彼の健康は数年前突如として悲しむべき衝撃をこうむった。しかし彼の精神は病臥の為に冒されることなく、今日のアルはなお依然たる昔のアルである。活動の生活からたちまちにして不自由の身に転倒したに拘らず、いささかも困惑の色なく、健康の人に向っておのれの幸福を主張している。

この小さいグループの間には各人に縮名を附することが自然であった。「弁論少年」とはチャリー(註三〇)の緯名であった。ロータリー規約の討議に際して特にこの縛名の適切であったことが証明された。何がロー



A.L. ホワイト (アル)

タリーを構成したかについて彼は独自の概念を把持しその持論を真剣に開陳したのであった。彼は期せずして、クラブ創立時代の事情に関する非公式の記録であったことを表明した。即ち彼の個人的記録はまことによく当時の精神を写し出していたのであって、もしチャーリーのこの用意がなかったならば、祝福すべき一九〇五年当時を追懐するに足るものは、文字の上には殆んど何物もなかったであろう。

ドック(註三)。博士の彼は都会育ちで独身でロータリー初期の通人であつて、地方出の青年達は「ドック」をせん望の的としていた。彼は流行の服装とその種類方式とに寸分の隙なく通曉していた。しかし決してマネキンではなく真の紳士であつた。彼は又有名な乗馬家であつて、そのシカゴの大路を颯爽として愛馬に鞭ちつつ走るスマートな姿は、当時の晴々しかつた情景の一つに数えられていた。二十五年間真冬を除いては、前夜の安眠が如何に不足なものであつても、我が馬上の「ドック」を都大路に見出さない朝は殆んどなかった。シカゴ・クラブは他地方のロータリアンに対する挨拶の鄭重なる点において第一といわれてきたが、これ全く明朗にして情味隘るるわが「ドック」の人となりが代表したところに見られたもの

である。彼は二十六年間を忠実に奉仕して来た後、一夜眠ったまま遂に再び起きたなかつたのである。

銀行家のラッフアス(註三)。その名ラッフアスはロータリーの友人間に於て愉快にも又至極自然の響きをもつて「ラッフ・ハウス」に通じた。角のとれた最も温和な紳士として彼を識っている人々に、この異名の妙味は



ラッフアス F・シャピン

立所に首肯されるであらう。国際ロータリーの会計をあずかること二十五年今なおその地位にあり、おびただしい知人をもっている。もとより彼は種々なる点に勝れた性格をもっているが、なかんづく最も顕著な特質は

その母に対する孝心であろう。彼は都に育ち独身を続けつつ母のこの世に在る間全くその傍を離れずに仕えた。国際大会、歓迎会、晩さん会、茶会等すべて二人で出席した。彼と喃喃の語をかわしている者は必ず彼の母であった。彼は終始母の善い友人であり、また息子としては絶品であった。ある神経病のためラフはこの三年間はどアパートの一室に引こもっているが、今や元気はおもむろに回復し、昔に変らぬ明朗な希望に満ちた人間になっている。最近彼は次のような告白をもらして著者を驚かせた。肉体上の損傷も個人の生涯におけるよい経験の一つであると考え、自分はむしろこの経験に恵まれたことを喜びたい気がする。ラフとしては精神が肉体に勝った一声高い凱歌でなければならぬ。あくまで深い修養の人ならば病魔もこれを悩まし得ないということの生きたる実例を、ラフはわれらに提供したのである。

次は葬儀社を経営したバーネー(註三三)。「キューピッド」、こう呼ぶに何のちゆうちよも感じない程に無邪気な彼であった。キューピッドの矢壺は常に充ち満ちていた。しかして放たれた矢はほとんど誤またずに、人の心の標的に当るのであった。

彼は愛撫すべき子供はもたなかつたとは言え、結婚生活の福音はよく知っていたのである。或る朝彼の生涯の伴侶は短かい病床生活を去つて逝つた。人生最大のこの不幸に彼が如何に堪えて行くであろうかとは、友人ロータリアンの間の大きな懸念であつた。職業柄兎角暗い影をもつていた彼が、この悲しい彼自身の場合を如何に処理していくであろうか。然るにこゝうした疑念から友人達はすべて解かれたのである。葬儀の日、あふれる哀悼の心を以つて集つた人々に対しキューピッドは並々ならぬ心遣いをしていたが、最後の式に立つた悲しい淋しい彼の面上には一種の輝きが浮んでいるのであつた。彼の側近く立つていた著者は柩に向える彼の優しい囁きを聞いた。「左様なら、ガーター」やがて、否多くの人から見れば、それから久しい後になつて事態は明瞭にうなずかれた。キューピッドは六年間、かつてその最愛の妻と住んでいたアパートの大きな一室に一人で住んだのであつた。この長い間その室内の調度一切は彼の妻が残していったそのままの有様に保存されていた。彼女の室は必ず彼の指図をまつて掃除され、彼女のベッドの敷布は在りし日の習慣通りに上げ替えされた。彼のこの居所を訪ねるロータリアンは、いつも心からの温い歓迎を受けるのであつた。



バーナード E・アーンツェン (バーネー)

するガーティーと共にいかに楽しく暮らしていたかということが益々知れわたったのである。その後彼はヨーロッパに旅立ったが、数カ月間の一人旅を続けた後シカゴに戻って再び職業生活を始めた。

フレッド・デー(註三四)は、一見健康にして柔和、能く人を惹きつける驚くべき魅力を持った偉丈夫である。その特殊の明快性は路傍の人の注意をさ

友人の中にひんばんに彼を訪問するものがあるのは、彼のせきりよを慰めるためであったということを知ったキューピッドは、孤独の彼自身はかつてせきりようを感じることなく、むしろ全く幸福なのだということを友人達に知らせた。彼が愛

え引くほどで、知らぬものが見直して快よい微笑を残して通り過ぎるのであった。食堂の給仕や商店の店員、新聞売子までが彼には特別の注意をばらった。無意識のサービスである。こうして彼は行く所で最も良き待遇を受けたのであるが、それは彼の故らにする為めでないことは、彼自身の能く知っていた所である。彼は只飽くまで明朗にして温容の好漢フレツデーであつて、未だかつて如何に紳士たらんかを研究したことはない。その必要がなかつたからである。生れながらにして紳士だったからである。

彼が人を迎える時の挨拶ぶりは鄭重以上のものであつたが、それは情熱の発露である。彼の別れ際の態度もまた同じであつて、辞去せんとする人の帽子を手渡し外套を着せかけ、上着の裾にまで親切なる手を差そえた後、力の籠った握手と共に心からの「左様なら」を交すのであつた。この時人は、仮りにフレツデーが前に何か悪感を与えたことがあつたとしても、決してそれを思い起こさないであろう。

一人人間というものはフレツデーの振舞う如くにして、しかも衷心誠実であり得るものであろうか。彼の如き举措は或る目的を達する為の偽装であつて、その目的を達するや否や振り捨ててしまふものであろうか。否、



フレッド H・ツイード

彼の振舞いは決して偽装ではない。彼はマンネリズムの所蔵家ではない。今日の私への挨拶は明日の諸君への挨拶である、否、それは彼自身の家族への毎日の挨拶である。朝の食卓における子息達への礼儀は、彼においては畏敬する友人への礼儀

と変わらないのであった。

然らば工場の使用人に対しては如何。人は友人に対しては礼儀正しく、家族に対しては情味深く、しかし使用人に向つては粗暴であり得る。チャールズ・エム・シュワツプ(註三五)の使用人達は主人のことをチャーリーと気安く呼んでいたと言うが、会社によっては社長を呼んで「チャーリー」

などと言うならば直ちに不敬罪に問われるであろう。威厳というものは確かにそれだけの存在理由をもつてはいるけれども、またそれが愚かなる迷信の偶像ともなり得るものである。しかしフレツデーが部下を統御するに己の威圧に頼らんとしたとすれば、その努力は或は失敗に終わったであろう。彼は「威厳」をたくあえざりしも、豊富にそれに代わる他の用意があった。即ち兄弟愛である。友愛である。彼の盃はそうした愛の甘酒に満々と溢れていたのである。

彼は時折り自分の工場の仕事場に現われ、沸きかえる鑄物の熱湯を大柄杓に注ぎなどしている真黒く汚れた職工連の間に立交つて、彼等の肩を叩いて愉快に歓談を交えるのであった。しかし威令の方面は確保されたことであろうか。或はかかる不釣合い、無礼講によつて統制は破壊されたのであろうか。俄には答え難き問題である。このフレツデーの專業は未だ漸く四半世紀を経たのみに過ぎぬとは言え、その間一度のストライキらしきものすら勃発したことがない。他面賃金支払名簿における人員は只の二名から実に七百名に膨大して居り、なお急速なる勢をもつて事業が伸展の一途を辿っていることは、工場が数年毎に増築拡張されつつある事実がこれ

を証明している。かつて著者はその工場をフレッデーと肩を並べて巡視してみたことがあったが、その時彼の通る跡には幸福感の漂う雰囲気が追いつがって来るように感ぜられた。誰の顔も皆微笑を含み、迷惑らしい暗示は、いささかも与えられなかったのである。畢竟ボスは大切であるがしかしフレッデーのごときボスは又他に求め得られるであろうか。

著者も時々友人から助力を求められることがある。一青年が職を求めてシカゴに来る。しかししてもしその希望が正しいならば就職の見込みがどこにあるかを私は知っているのであった。私はフレッデーに頼み込む、場面一転、フレッデーの工場に新顔が一人働いて居るのを見るというわけです。数年前一人の不具の少年がフレッデーの手許に託された。所がその少年は不良でニュー・オレアソスへ二回、ワシントンへ一回と、三度も勝手な途に失踪してしまった。しかし彼は常に許されて正道に救い上げられたことである。フレッデーよ、君は一つの驚異である。

利潤分配、株式分与、医療、歯科施設、病院、夜学、講習会、音楽会、遊戯設備、社宅故事その他各種のいわゆる近代的施設(すべて現代の事業家の信用に帰せられるもの)を試みて尚かつ成功して、ない労働の雇傭者に

対して、著者は一言勧告したい。「今一つの実験を試みられよ、それは貴君の事業上の疾患に少しくフレツデー家伝の妙薬を用いんことである」と。その妙薬の原料は人間愛である。友愛である。兄弟愛である。好誼親善である。仮りに即効なしとするも決して有害ではあり得ないの

ではないか。またフレツデーはロータリーをシカゴ外に拡張する事に精神的援助を与えたばかりでなく、實際上それに参画したのであった。殊にニューヨーク・ロータリー・クラブについては彼はその創始者として知られている。

われらが人格と呼ぶものの属性はそもそも何か。それは単に善とか悪とか、或いは人に好かれまたは嫌われるというようなことに止まらず、一層深き意義を有するものでなければならぬ。いわば人格とはその人の心を覗かせている窓の謂に外ならぬのではあるまいか。

人格は生命を育てる力で、圧迫も呪詛呪眼もまた祝福も伴うものであるから、時には殺人犯も敢てするもので、しかしてこれは必ずしも一時的激情からのみ行なわれるものではない。しばしば冷静に熟慮的に漸進的に行なわれる。兇刃は朝食の間にも午さんの時にも晩さんの卓上にも閃めき、

長い夜をかけても振られる。人の頬に咲く花の香が褪せ始める時こそ、人格が兇行を開始する最初の表徴である。兇事を家庭においてのみ行うのは、多くは臆病者の所為で、それは工場において事務所において倉庫において、また教会、学校ないし公けの市場においても行なわれる。人格の兇行は決して場所を選ばないのである。幽愁に続く悲痛なる感傷の如何に荒廢的であることか。

人格の徳はまた日々時々にけん現する。国民生活にも都会にも村落にも、また家庭にも工場にも、いやしくも男女の群れ住む所いずこにもそれが現われる。清くうるわしき人格は生活を豊富にし甘美にするものである。フレッディーよ、君の人格は私にとってしばしば天来の福音であった。ハー・ラウダー(註三六)の名言をかりていう。「貴家の煙突が永久に煙を吐かんとことを祈る」。

Personality is to a man what perfume to aflomen

I Charles M. Schwab,

in "Ten Commandments of Success." (註三七)

ロータリー初年度の会員はいまだ以上をもつてしては尽きていない。列記せねばならぬ人が沢山にある。耳鼻咽喉専門家のドクター・ホーレー(註三八)は教養に富み、親切にして真任感の強い紳士であった。ロータリー草創の頃の或る会合において不具兒童の問題に関する演説をなし、その後の機会を捕らえて最も憐れなる一兒童のために醵金を募つたのは彼であった。次は有名なる内科医のドクター・ハックスター(註三九)である。出でては海外に医学の蘊奥を究め、入りては母校に献金の功を遺した。

それから建築家のポップは図書館のために尽力するといふ道楽を持っていた。それから又当時或る製造工業に従事していた好個の巨大漢ハリイがある。現在は隠退して居るが、毎年数回カリフォルニヤに行つてそのロータリー・クラブに欠かさず出席するのは彼である。装飾業のジョン。家具商のマックス。花の一束々々に優しい心遣りを見せた生花商のチャーリー。彼らは他の会員と共にかくもおのおの異なる職業を代表しつつ大都会の一断面をなすものであつて、皆それぞれの職業を代表する会員として選ばれたる特権の意義と、それに付随する責任の何たるかを能く認識しつつ、

広き視野と寛闊なる襟度とをもつてたがいに友愛信義を重んじていた。

一九〇五年のこの集団の中には雄蜂のように働かぬ人間は一人もいなかった。各人こぞつてロータリーのために尽くし、その実践上の問題として種々なる考案を持寄つたのであった。そのうち今日に実行されているものをあげれば、午餐時の定例会合、会員名簿に写真の挿入、職業奉仕に関する報告書の提出等幾多のものがある。

午餐時の会合がロータリー・クラブの一特質となつた時、あたかも「われらのシカゴを知れ」の運動が開始せられ、数回の会合が一定の連絡の下に全市の主なるホテルにおいて行なわれたのであった。そしてこの社交的教育的巡回事業にはしばしば婦人も参加した。

会員の若干は農家育ちであり、又大多数は地方の町村から志を立てて都に上つて来た青年であつた。彼らは勿論まだ立志伝中の人とはなつていなかったが、何れも確乎たる目的をもつて世に立つたもので、その大部分の人は将来の成功を十分に見越し得るだけの域に達して居たのであつた。こうした人々が多数で、その大学教育を受けていた者は少なかつたのである。彼らの生い立ちはずしも安易でなかつた。多くは少年時代から働くこ

とを教えられてきたのである。彼らは愛情の深いしかし厳格な父母達から二つの相反した観念を授けられたのであって、しかして彼らは賢明にその何れかを選ばねはならなかった。一は無為の成行き任せの悪魔に導かれるがままの人生観で、その到達点は貧困と自尊心の喪失であった。他の一つは希望に満ちた努力の人生観で、その帰結点は有力の地位と社会の尊敬であった。

その子の将来のために、苦慮して自己を犠牲に供した父や母をもった彼らは、こうした両親を限りなく敬慕していたことは当然で、従って両親の教訓は彼等にとつて永久に忘れ得ない深刻な感銘だったのである。

かくて若者達が実社会に身を投じた時、彼らの目標が両親の願望に添うこと、その信任に酬いること、即ち成功とすることに置かれたことはまた自然である。地方から出て来た彼等は時折り抑え難い寂寥感に襲われた。故郷に残してきた緑の野山や楽しい少年時代の回想に心を奪われる。青々とした草原に代わる坦々たる舗道の街が悲しく眺められる。日曜や祭日には町の中を散策して、休みなくひしめき合っている群集に見入りつつ、幼い友と山野を馳け歩いた楽しかった過去を夢のように追懐するのであった。

誰とも知らぬ多くの男女が嬉々として集まり遊んでいる日曜の午後の公園は、却って彼らの哀愁を唆るの所と時であった。緑の森、さらさらと流れる小川のとおり、小鳥の声、薄荷鳳仙花の匂いがあたりの空気に満ち満ちていた自然の中においては、人は決して寂寥を感じる必要がなかったのである。然るに都会の公園は喘ぐ酷熱の午後に僅かに息をつかせ、更に清新の境地あるを知らずして育った人々には無上の愉悦を与える所である。

またもとより都会育ちの人もあった。彼らは過去の生活にも余り苦しい経験はなく、現前の環境にも適応していた。何れも友情には変りなく、またおのおの「成功」という金的を目指していたことも同じであった。

こうした一致した額望が大体において集団を形成せしめた理由であった。集散は彼等の成敗を決するほどに思われ、誠心と情誼の教えるあらゆる方法をもってたがいに助け合ったのである。これ主として職業上の相互援助則ち「成功」に向っての相互援助であるので、互に必要なに応じて力の及ぶ限り相談し後援し合った。殊に同じ職業の人が二人居なかつたということ、相互援助を一層円滑にしたものである。

ロータリー初期の目標は利己であったという人がある。或いは然うであ

ったかも知れぬ。しかし自分の生涯の内最も非利己的にして甘美であった時代は、一九〇五年のシカゴ・クラブ員当時であるといっている人もあるのである。利己的であったか非利己的であったかは、畢竟会員が何を以つて愉樂となしたかによつて定まるのであらう。もし会員が彼自身の利益を計ることをのみ希つたとすれば、そこに存したものは利己だったのである。反対に他人のために尽すことをもつて愉樂としたとすれば彼は非利己的だったのである。この錯綜せる思想がわれらの古きシカゴ・クラブには絶無であったといえぬことは、何処においても免れ難き極めて自然のことであつた。

会員は相互の職業生活を見聞せんとする趣旨から、その何れかの事務所において会合を催すことにした。かくて各人の事務所を循環的に会場に当てたことが、「ロータリー」(巡回)なる会名を採用するに至つた主なる理由であつた。

ロータリーによつて実現された職業上の利益はとも角も、総ての会員が実現し得た利益は友誼であつた。彼等は都会生活の砂漠の中にオアシスを発見し占有したのであつた。神の選民とも言い得べきこの少数の人々は、

ひたすら友愛の法悦に浸らんとして此のオアシスを訪れるのであった。も早や何人も公園などに行つて過ぎし日の事を追懐する必要はない、「幸福の日は再び回つて来た」のであった。

ロータリーは当時の他のクラブの会合と初めより甚だ趣を異にして、会衆相互の親密の程度にはるかなる相異があつたのである。たがいの呼び名にはクリスチャソネームを用い、「何某君」「何某さん」等の敬称は互の心の自由なる流露を妨げるおそれがあるとしてこれを廃していた。いわば人々は再び少年時代に還つたのである。

オーストラリアのロータリアン、サー・ヘンリー・ブラッドンはかつて言つた、「ロータリーが個人を向上せしめる方法の一つは、彼の内に童心を保存せしめることである。およそ善良なる人間の胸底を深くさぐればそこには常に必ず童心がある。少年の人生を眺める目には汚れない、邪悪と僻見がない。有るものは強い熱意と親しみとで、総てはわれらの望み求める資質である。歳月の移り行くと共に童心は影を潜める。我が童心去れりと告白せざるを得ない人は悲しむべきである。しかし年令は見方によつては、戸籍面の数字に関する問題ではなくして精神上の状態に関する問題で

ある。理念鈍り情熱衰うるの時、われらは老の坂にあることを知らざるべからず、背後に積み重ねる歳月の数は別問題で、その頭脳に弾力性を止むる間、他人の友情に反応し得る精神力を維持する間、人は決して老い朽ちぬであろう。人を発展せしめ永く童心に生かさんとするものこれ則ちロータリーである」と。

人間は総て自由かつ平等に生まれて来たものであるとの観念は、自然的に彼ら初代ロークリアンの思想の一部をなし、従つて何等紛議なしにそれを是認して居た。新教徒、旧教各派の信者、ユダヤ人、アメリカ人、ドイツ人、スウェーデン人、アイルランド人、其の何人でも。総てが幸福な一体に融合同化して、燦たる栄光の途上に立ったのであった。

当時一定の民族又は宗教を以つて会員資格としたクラブは幾多存在した。先ず祖先伝来の新教徒の団体あるもユダヤ人やカトリック教徒の要求には合しなかつた。ユダヤ人はユダヤ人、カトリック教徒はカトリック教徒と言う如くに、その集合を欲する彼らの性質上各種の団体を組織していた。又ドイツ人のための「トウルフェライン」(体育クラブ)があつた如く、出身国にもとづく一定人の団体が、シカゴ全市にわたり無数に散在してい

た。その間、実業職業の關係、スポーツの關係、なかんづく学校關係においては、異種要素の融合が相当に行われつつあつたのであるが、一般的な社会生活の方面においてはその傾向は甚だ微々たるものであつた。固有のアメリカ人は実業生活及び政治生活における自由平等主義に甚だ忠実であつたとはいへ、社会的差別を危険に陥れる程の自由組織を是認しようとするものではなかつた。貧困移民の子弟に教育上の便宜を許与したということとは、貧困移民そのものに門戸を開放するということとは自から別間葛であつたが、自然に彼等移民の子女達がその親達よりも遙かに速かに人種上の相互理解を進め得るに至つたという自然の結果を見た。

思想の傾向も同じ、伝統習慣も同じ、長所も同じ短所も同じという人とは、たがいに好んで交際したく思うが、同時に伝統を異にし経験を異にする別人との交際にも、好奇心を唆る書物のようにまた魅力があるではないか。

一九〇五年のシカゴ・ロータリー・クラブの会員は飽くまで友好を尊重した故をもつて、彼等の間には宗教上及び政治上の議論は友好を妨害するおそれありとしてこれを禁じていたことが、後に至つて非常に有意義であつ

たことを証明した。ために爆発性の素因を含む種々なる問題が起るべくして起らなかったのである。その教程は極めて簡単であつた。曰く「共通の仕事に協力せよ、意見同じからざる問題はこれを避けて敢て論議するなかれ、然らばわれらは友愛をもつて報いらるるであらう」。これは集団の一層大なるを致すほど益々採用されねばならぬ教程であつた。

アイルランド人に閃く叡知はユダヤ人の微妙なるユーモアと凶らずも一致した。それは各民妖を代表する祖先をもつこの集団の人々にとつての喜びであつた。よく「知り合う」ということが大切なる中間過程であり、それは迷える人の心を治し、無役なる清疑を解消して、概ね友愛にまで成熟する。

One man is a good as another—and a great dale better,
as the Irish philosopher said.

—Thackeray. (註四〇・四一)

旧来の伝統的敵対観念を今なお抱いて、古臭い憎悪の焰を煽り立てるこ

とをもつて民族的または宗教的義務であるかの如く考える人々が、現在の世界に存在して居るといふことは全く不幸事である。彼らはいやしくも自国以外に属する人々の事件となると、すべて悪態にいう習癖をもつ許りでなく彼らの友人であるべき筈の相手に対してすら、殆んど親切なる言葉を発し得ない。これはほとんど一般に習性を成していると信じられるが故に、ロータリーはその敵対感情に換えるに友好感情をもつてしたいと心掛くるものである。

自分等のみの属する小なる集団以外には、いささかも敬意を払い得ぬという人々の心は、いかに哀れにも小なるものであることか、かかる人々は今なお中世紀の雰囲氣中に徘徊しているものである。彼らは今日の人間ではなく、今日の問題は全然無理解なのである。彼らの崇拜する英雄は過去の人である。彼らは己れを冒されることを恐れてか逃げ隠れるのである。何の寄与もせず何の利得もせず自己だけに固まって進んで施す所なく他人の行為をあれこれと批判するだけである。自己の為には虎の兎の如く抱えている理想を、他人の為には否定する。自身のもつて美德とするものも他人が之を行う時は罪惡と見る。自身の場合においては神聖なる福音である

ものが、他人の場合となると厭うべき邪宗となるのである。無知と知識との叩き合いは概して無知の方が勝つ。暴力をもって己が考えを押し通そうとすることは知識の側には殆んどないことであつて、却つて無知の方にそれがある。人は知ることが少なければ少ない程知っていると考へる。そうして凡ゆる手段を講じて己の見解を他に強いようとする。足枷(かせ)その他幾多の肉体上精神上の折檻方法は皆無知の考案であつた。無知が知識を打倒す物語は誇ることを要しない。

こうした防ぎ難い人間の非行を消滅せしめんためには、相異なる宗派及び相異なる国民の間に理解と親善の關係を増進させなければならぬ。離反は紛争の外何物をももたらすものではない。或る社会に宗教上もしくは民族上の確執ある時、次のような言はその紛争を一段と煽動するに最も有効なものである。曰く、「この死線を劃して向側は君らの領分だ、僕らは僕らの領分を出まい。僕らの社会はアングロ・サクソンの社会だ。そうして僕らは飽くまでこれを守るのだ。供らは永久に往還の東側に住むであらう。君らはまた永久に西側に住め。君らの領分においてならば如何に沢山の教会を建てても勝手だ。何でも君らの好きなことをするがよい。僕らは別

だ」。

一個人一宗派一党派一国民が、他の個人宗派党派国民を憎みさげすむのは、彼または彼らがその相手を知らぬからであるに過ぎぬ。憎悪軽蔑の底に横たわるものは無知であり、無知は平和の脅威である。同条件の下で知識の平均水準が高い程、容喙癖、論難癖、尊大癖の傾向は少ない。個人も国民も自省して然る後世界に臨むことができるのである。

最も頑迷型の狂信者といえども、宗教の相異は法律の力をもつてしては、如何ともなし難いことを覚るに至った。もし更に社会的圧力を加うるとするも、それは同様に取除き難いものであることをも徐々に覚り始めている。

一九〇五年にはなほだ簡単に幸先よく開始されたロータリーの、相異なる民族的集団ないし宗教を異にする人々の間に友愛の関係を鼓吹せんとしたプログラムは、今日まで如何なる外交上の協定商議よりも大なる成功を収めてきた。その間ロータリーの採用してきた方針は、会員の意見が相分かれる問題はこれを避け、その総意が一致し得る事項に焦点を定めてこれを強調するというにあった。かくてロータリーがよく宣揚し得た所は、友

愛は民族的及び宗教的障壁を容易に飛び越え得るという事実であつた。

信仰は個人の所有物で彼はそれに権利をもっている。その国籍はその人の好んで選んだものでなくとも、彼は自国を尊重するの権利がある。総ての国家は世界という巨大なる家族の一として、それぞれ名誉ある位置を占むるものである。

唯我孤立は優越と言うことを複雑にする、そうして複雑した優越は紛糾を生むもので、永久の優越は有史以来如何なる国民もかつて実現し得たこととはない。盛衰興亡は世の常である。或時代の間総ての国民の上に君臨せるものも、次の時代には他の国民のためにその地歩を蚕食されることがある。一国民の長所そのものがしばしばその国民の弱点であることを暴露する。成年の後には老年が来り爛熟の後には凋落である。これ撤回することも変革することも出来ぬ自然の法則である。

彼の驚を叫ばせライオンを吼えさせ熊を哮らせる人、未だ必ずしも国家のために奉公してはいない。否、彼は国家に奉公しようと考えても居ない。只自分自身に奉仕しようとして心掛けるのが極点で、往々国家には反サービスをしているものである。しかるにそれ以上に憐れむべき人がある。いわゆ

るホモサピエンス（似非智者）であつて、彼らは一度国外に出ずれば己のじゅん奉した母国を眼下に見下し、迎合し賞讃する群集の前に自国の弱点を暴露して見せる人々である。

著者はアメリカ人である。そうしてこの事実を自負する者である。著者は何人に向かつても各々その母国に対する忠順を表明する権利を持つことを是認するものである。著者は信ずる、国の何処たるを問わず何人も母国に不信にして能く自己を發揚し得るものではない。何人も母国を飽くまで敬愛せざるべからず、そうして母国を愛せばすべからず母国に対する敵を作らぬことに心し、母国を敬称するため特別なる、或意味において嘲弄的言辞を以て呼ぶがごときことを許さぬという決意を有すべきである。苟くも母国をざん訴する如き態度に出ずる人は畢竟己の無知を表白するものであり、更にざん訴をもつて他人の友愛を買わんとするが如きは心術最も卑しむべきものである。他人の尊敬をかち得べき最善の途は、儀礼の公道を單純にじゅん奉するにしくはない。しかもなお所期の結果をもたらず能わずとせはまたいかんともすべからざることであらう。

各種の民族各種の宗教の人々から成つた一九〇五年のロータリアン・グ

ループが、飽くまで強固なる結合を維持して来た途は完全なる宗教自由の
実践であった。改宗の勧誘は寸分も許されていなかった。しからざらん
はこの運動は早くその発端において挫折したであろう。他人が神を信じて
採っている方式を批難することは、この上ない僭越のことであると、サー・
ウイルフレッド・グレンフェル(註四)は言っている。

この単純なる方針をもつて総てが順調に進んで来たロータリーは、著者
のあずかれる限り難関を知らなかった。著者は保守的なるニュー・イング
ランド人であつて、祖先は「ピリグリム・ファーザーズ」に続いている。
しかしニュー・イングランド気質はメイフラワー時代以後に大なる変化を
見たことは前にも述べた如くである。

著者が少年時代を送つたヴァーモントの片田舎に一人のユダヤ人と一人
のカトリック僧が住んでいた。両者とも著者の父の友人にして、父は彼ら
との交遊をすこぶる尊重していたのであった。ユダヤ人のピンカスは洋服
商であつたが、彼は同種の人々と隔離せる生活にいささかの寂ばくを感じ
ていなかった様子で、常に快活を極めた人であつた。著者はまたその庭続
きの家に住んでいたカトリック僧と父との親密なる会話を今も忘れること

ができない。この三人が交際してそれぞれの生活の背景が当時全く別種のものであったという事実そのものから、人間の不思議な関係を味わい得たことを著者は常に幸としているのである。

その後著者が大学生生活時代のこと、或時甚だしき惨事に出遭ったのであるが、そこに一人の見ず知らずの僧侶がサマリヤ人の役割で現われた。俄然馬車から放り出された著者はカトリックの一寺院の前に失神して運ばれていたのである。やや意識をとり戻した時、著者の頭を抱え唇に葡萄酒の盃をあてがって呉れていた人がその僧侶だったのである。かかる経験が深い記憶となつて今日も残っているのをみれば、宗教自由の精神は自然のものであるといひ得るであらう。

チャールス・ラム註四三がたまたま街路を横切つてくる一人を指し、そばの友人に「僕はどうもあの男を好かない」と育つたのに対し、その友人は君が彼と「知り合い」であるとは知らなかったと答えたところ、ラムは苦笑しながら「僕はある人を知らない、だからあの人を好かないのだ」と告げたということである。「知り合い」の光の前には「嫌い」は影をひそめる。世界平和の最善の保証は親善である。各人種間には根本的なる背反点

はほとんどない筈である。何人も正義、名譽、尊嚴、敬愛を憧憬する。しかして何人も不正、不名譽、不正直、憎悪を輕蔑する。よく知らざるがために疎んずる心理の動くのは人情である。よくこれを知らは反對の結果を見ることもまた人情である。たがいに知って友愛にまで成熟すれば、争いの機會は遠い彼方のものとなりおわるのである。

およそ人間關係において殺人罪は最悪の大事件であるに拘らず、国民間の戦争となると、それが法律の賛成を得ているということはいかにも奇怪である。もしわれらが個人的宿怨の解決に腕力を用いるならば忽ち懲罰をまぬがれない。しかるに国民としてはわれらは大規模なる殺りくを榮譽と理想の殿堂に祭りあげている。個人と個人との關係においてはわれらは、典雅なる紳士たらざれば同胞の尊敬を失なう。国民と国民との關係においてはわれらは梟雄で戦士でなければ則ち同胞の尊敬を失うことになる。かかる事態は文明の一大汚辱でなくて何であらう。待望の親善、永く希求されて来た隣人愛は何時かは実現せざるを得ないだろう。

われらのロータリーは独得の甘美な人間の道を歩んできた。外には風が吹き荒み嵐が暴れ狂ったが内には総べてが静寂で平穩であった。もし「ア

イルの聖者」がわれらの集団を訪れたならば、かくの如き幸福と歓喜が酒盃をかりずしてよくここに到ったゆえんを怪しむことであろう。われらはそれに答えて、酒はわが合衆国においては最はや悪の手に捨て与えられてあることを説明せざるを得なかつたであろう。ただしロータリーは禁酒問題に参加したのではない。ただ現実において何れの国にあつてもロータリーの集会には酒を用いざる事が特徴となつてゐることで、従つてロータリー・クラブには酔態というものを見ないのである。ロータリーの国際大会或いは地方大会には各地から多数のロークリアンが集合するも、その宴席を他の団体の同様の会合と比較すると、そこに著しい対照が現われる。即ち他の団体の会員がこうした宴会に出席した場合は、日頃自分らの土地においては名声の手前嫌でも守らなければならぬ禁令から、ようやく釈放される絶好の機会を見出したかのように、これを祝福するという気分が表われるのである。

ジョン・サリヴァンとジャック・マーフィーとはカトリック・ロータリアンの先駆者であつた。マックス・ウォルフとマックス・ゴルドンベルグとはユダヤ人ロークリアンの先陣であつた。その後ロータリーが発展し

拡大するにつれてキリスト教の学者、モルモン教徒、モハメッド教師、仏教徒、その他各種宗教の信奉者が陸続として参加した。これ則ち宗教上及び人種上の単一が友愛成立の必要条件でないという事実の生きたる証言である。カトリックの神父、ユダヤ教の僧正、新教の宣教師、みな打揃つてロータリーに会し、共にクラブ歌を合唱し共に幸福なる友愛を享樂する。

『クリスチャン・サイエンス・モニター』にはロータリーに関する優良な論文がしばしば掲載される。ソルト・レーク・シティーのロータリー・クラブはモルモン教の最高幹部の許可によってその教会堂を集會に用いている。その他宗教団体の事業がロータリーと完全に調子を合わせており、又小地域にして附近にホテル又はレストラン等の便宜に乏しい地方にある多数のロータリー・クラブは、その土地の教会の食堂を借りて大小の宴會を開いている。この場合にあつては食事は教会の婦人連の手によって結構なもの供されるのであるが、婦人連もまた教会の事業資金の中に献納すべき淨財を稼ぐのにふさわしい機会として、この様なサービスを至極歡迎しているのである。

かつて著者夫妻は南部のある小都會においてロータリー・クラブを訪問

した際、図らずもそのクラブの会長と副会長とが代表委員となって特に催された歓迎会に招待を受けたのであった。会長はプレスビテリアン（註四四）の牧師で副会長はカトリックの神父であったが、恐らくかく特殊の友人と一処になることはしばしば出来ないことであろう。両者の談話は多くはチャリーまたはジェネと呼んで、たがいに個人名をもって親しげに交わされるのであった。

この愉快なりし日の終りに著者は会長に向って言った。「余の訪問せる地には到る所に山岳がありその頂を見ぬということはないが、今日ここで望んだ絶頂はカトリック神父に対するプレスビテリアン教師の友愛であった」と。会長は答えて「その言を聞くは最も満足とする所で、吾々の愛情は何時も純真なつもりでいる」と。そして次のように続けた。「丁度私はジェネと話合っていたことであるが、私の小さい娘は明朝九時に病院で切開手術を受けなければならぬ。簡単な手術ですむということではあるが、可愛い子供のこととなると中々容易には考えられないので、その時刻に私の幼い者のために祈りを捧げてくれないかと彼に依頼したことである。勿論喜んで承知してくれた」と。この美しい関係のうちには多年の反目は痕

跡もなく消滅して、残っているものは唯優しい同情と温い信愛とのみであった。ロータリーは完成に向かつて進みつつある大なる動力となつてゐる。ニュー・イングランドの祖先は地下にあつていかにこれを眺めてゐるであらうか。恐らくわれらと共にかかる事態の推移を喜悅のうちに見守つてきたことであろう。

驚くべき速度をもつて地球の全面を週航し、あらゆる文明国民に親しみをもつて迎えられる宿命をもつたロータリー運動の生涯は、以上督見してきた。幾多の表面に表われざる精神と行爲とをもつて開始せられたのである。当時の事を知れる古き会員の中には、顕著なる成果に恵まれる現在と洋々たる望みに輝く将来とを目前にしながらも、なお古き過去を友愛の黄金時代の如くに追慕する人々すらある。それ程に一九〇五年のグループは堅く契り合つていたのであつて、この結合を断ち得るものは唯死あるのみであつた。

彼らは自己のみの天地に満足してゐたのではない。世間をただその動くに任せて、自己のみの満足を微笑み交わしてゐたのではない。彼らはその信ずる所に従つて工夫を盡らし、そうしてこれをあらゆる基礎の中で最も

根本的なる友愛親善の上に築いたのである。

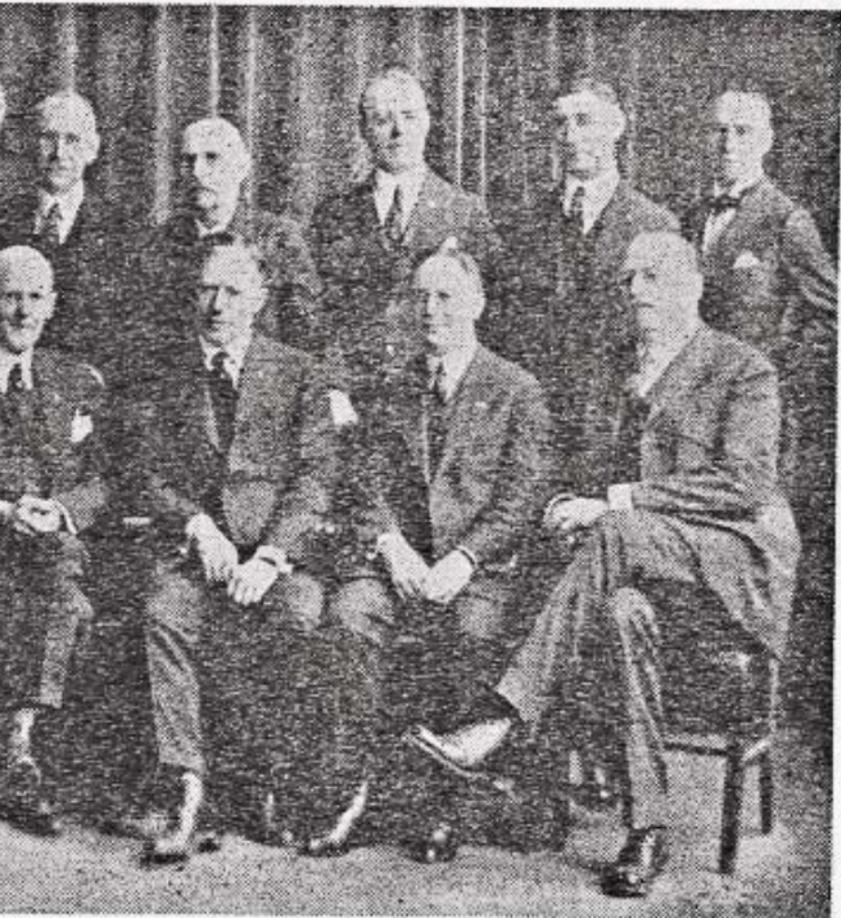
初めロータリーの萌芽は一介の殻の中に籠もっていたのかも知れぬが、もとより何時までも其処に止まるべき運命のものでなかったのである。しかしその本来の活力と性質とをいぜん存続しつつ規模を拡大し、在来のものより遙かに広汎なる使命に立つロータリーを作りあげようという空想には、多少不安の点も見え、到底多数の同情を引き得ないユートピアの夢のようでもあった。実業社会の実際家に対して、その貴重と認め来つた所のものを夢想の実験のために投下せんことを期待するのは、時には無理な注文のようにも見えた。しかれども理想と観念とはおのおのその正當なる価値を持つかぎり連立して行くべきものである。

シヨールペンハウエルはその『恋愛倫理学』において、恋愛の位置を種の繁殖という生物学的目的観念にまで引下げてしまった。この学説がロマンチックな恋愛者にとつての侮辱であるとしても、まだ生まれ出でざる赤子の“Will to Be”がその両親にもたらされることは明らかである。

恐らくロータリーの出生と以来今日の健康体に発育するようになった過程は、畢竟個性の括抗し得ざる、そして総てが服従してきた、また服従し

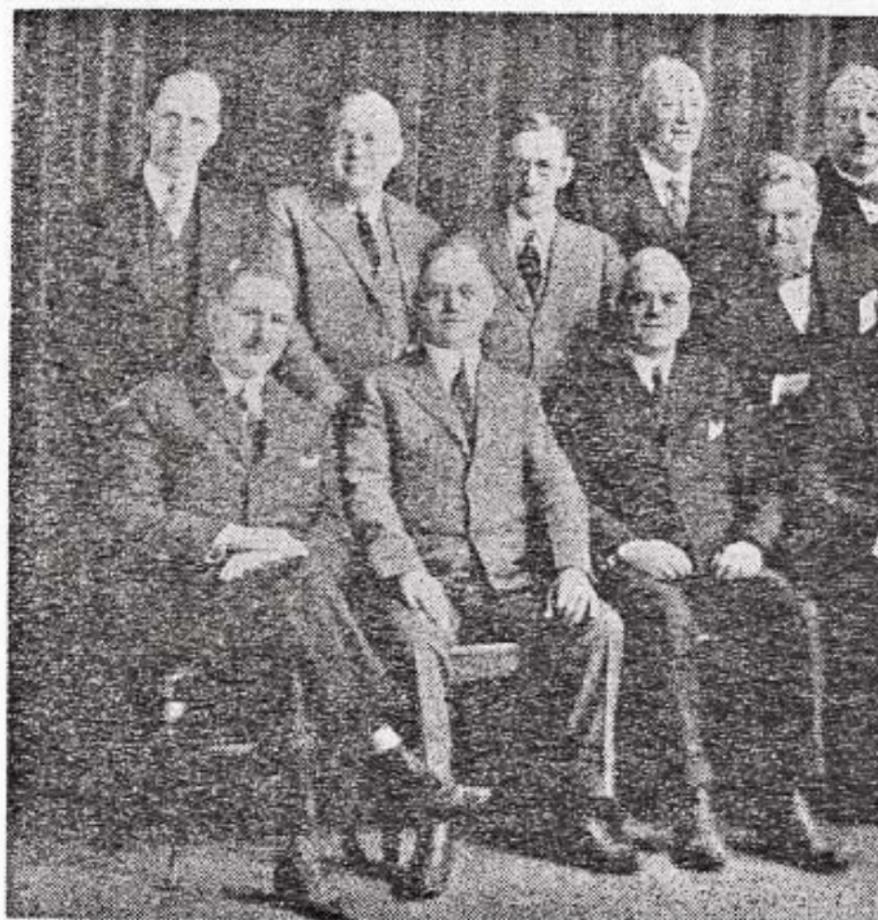
つつある、常住不易の強い潜勢力が支配してここに到ったものである。ロータリーは幸運なる星の下に生れたか否か。その必然は否定し得べからざるものであつたか否か。この初代クラブの會員の間に存在した理想観念が競合淘汰の結果は、ロータリーの復興となつて顕現した。

(1905年) のグループ



員。後列，ジェンソン，サリバン，ローレンス，
ホーレイ，シュナイダー，ゴールドンベルグ，
リス，ラッグルス，ニュートン，クロフツ。

シカゴRC創立年当時



創立当時のメンバーで1930年当時生存していた会
ツィード，アーンツェン，ウォルフ，フレッチャー
ネッフ。前列，シャピン，ホワイト，シーエル，ハ

註二 (大意この世の中で笑いと友人の愛ほど価値のあるものはない。一

ヒレーレ・ペロック

註三 HilaireBelloc ヒレーレ・ペロック (1870-1953)イギリスの作家。

著書に「海山帳」がある。

註四 シルベスター Silvester Schiel 創立会員。石炭商。

註五 ガスターヴァス Gustavus Loehr 創立会員。プロモーター。

註六 ハイラム Hiram Shorey 創立会員のち退会。洋服生地商。

註七 ハリー Harry L. Ruggles 創立会員。印刷業。

註八 ビル William Jensen 6番目の会員。不動産業。

註九 アル A. L. White 初期会員。第二代会長。

註一〇 チャーリー Charles A. Newton 初期会員。保険業。

註一一 ドック Dr. Will R. Neff 初期会員。歯科医。

註一二 ラッファス Rufus Chapin 初期会員。銀行家。

註一三 バーネー Bernard E. Arntzen 初期会員。葬儀社。

註一四 フレックデイ Fred H. Tweed 初期会員。鋳物業。

註一五 チャールズ M. シュワップ Charles M. Schwab (1862-1939) J. U. S. スチール初代社長。シカゴRC創立会員。

註一六 ハリー・ラウダー Harry Lauder (1870-1950) スコットランドの著

名な歌手。コメディイアン。

註三七 人格の人におけるは花における匂いの如し — チャールズ M. シ

ユワツプ 「成功の十戒」より

註三八 ドクター・ホーレイ Doc. Hawley 初期会員。耳鼻咽喉科医。

註三九 ドクター・バックスター Doc. Baxter 初期会員。内科医。

註四〇 アイルランドの哲学者が育つたように、一人の人間は他の人間と同じように尊い所をもっている。あるいはもつとはるかに尊い所をもっているかも知れない。 — サッカレー

註四一 Thackeray サッカレー (1811-1863) デイクエンズと並ぶ英国の代表的作家。代襲的作品には「虚栄の市」がある。

註四二 サー・ウィルフレッド・グレンフェル Sir Wilfred Grenfell (1865-1940) 英国の医療宣教師

註四三 チャールズ・ラム Charles Lamb (1775-1834) 英国の随筆家、詩人。著名な作品としては「古なじみの顔」がある。

註四四 プレズビテリアン Presbyterian 長老教会派の意。

VI 復興

ロータリー生誕の日二月二十三日は、この運動の全幅員、全延長を通じて祝福せられるロータリーの暦に最も重要な祝日である。誕生日の祝福ということが必ずしも特殊の事項ではないとしても、およそ個人も団体運動もその出誕の日を祝することは人間社会の通習である。まして僅かに三十年間の短日月を以て、微弱なる出現より雄大なる勢力へと発展したロータリーの如きにおいては、特にこれが祝福は当然のことに帰するのであつて、それが会員のロータリーに対してその真性を發揮し、その信念を更新鼓舞する最良の手段となるからである。地球が一回転する時、全世界に群がる同気の大衆に対して、ロータリーの誕辰を知らしめるのであるを思う毎に、そこに言い知れぬ靈感の湧き上るものがある。ロータリーの上に太陽は没することなしと考うる時、そこに底知れぬ感激が生ずるのではあるまいか。

敬虔の念を抱くことは人間自然の徳性である。それが暗黒なるもう昧時

代においては人間を野獣の荒野より王国に救い上げ、次いで理想の希望に向つての前進を刺戟誘導し來つたものである。人の理想は唯その人の觀念標準のみがこれを制限する。原始的なる敬けん觀念は多少粗暴にして無き絆であつたろうが、近代のロータリー誕生の祝賀に發露する理智的なる敬けん觀念は、恭謙にしてその所を得たものである。

進化は自然的、秩序的、經濟的、建設的ならざるべからざるに革命はこれに反す。しかれども両者は共に文明の進歩に与つて力あるものであつた。中世期の終幕を劃し歐洲諸国民の道德的ならびに知的水準は完全に變化をきたした。文芸復興または復活と稱せられるその時代における變化は殆んど革命であつた。

ロータリーの進歩は概して漸進的であり、よく秩序正しい連絡を保つて次第に行なわれたのであつた。然れどもまたその癖著なる發展の歴史には、ロータリーの復興とも稱すべき大變革、即ちロータリーの目的と理想との上に一大拡張が行なわれた時期が含まれている。他の革命の場合と同様に幻滅、覺醒、焦慮、希望、杞憂、自暴自棄、亂闘、傷心の時代を経過した。

もしロータリーにこの忘るべからざる緩急の時期がなく、したがつてそ

の結果たる復興ということがなかったならば、生誕日の祝賀は全く無意味のものとなってしまったことであろう。希望を更新し目的を充実し視野を拡大したロータリーの再生は、ロータリー運動の歴史上に最も大きな波瀾だったのである。

ルネッサンスの足音は一九〇六年の後半頃から聞こえ始め、一九〇六年に入つてその響ようやく高く、一九一三年まで騒擾は継続した。この動揺の裏にシカゴ市を劃して寄合つたロータリアンの相互利益と友愛とを目的とした地方的集団から、これを国際的範囲にまで拡大し鴻烈なる団体に発展したのである。

ロータリー復興の初期の形勢においては、多くの期待の卑近なると希望の遠大なるとを問わず、これが達成は容易に期し難い所であったが、唯人間努力のあらゆる分野を通じて常に基礎的必須条件たる要因がそこに存在していたのを見た。即ち信念がそれであった。信念なくしてはコロンブス（註四五）も西半球発見の雄図に逆巻く風浪と闘いおおせなかつたであろうし、栄光のガリレオ（註四六）も忍辱のパスツール（註四七）もこれなくしては空しく凡庸の列に帰したのであろう。そしてロータリーもまたこれなくしてはは

かなき烏合の衆に終ったことであろう。

しばしばこういう言葉を聞く、「ロータリーが今日見る如き偉大なる世界的勢力たらんことはその当初において待ち設けざりしところなるべく、予期せぬ好結果に恵まれたのであらう」と。現在のロータリー運動の特殊性及び規模は全く予想外の偶然事なるべしとする解釈が行なわれつつあることはこの種の言説より推して察せられるけれども、実はこれ程事実を誤った観察はない。そもそも計画は深思熟慮、一たび発念せることの決して挫折せざるべき、確然たる意思を以て遂行されてきたのである。

右とやや同様の事情についてフーヴァー大統領は次の如くいつている。

「物事の完成には或る種の不可思議なる作用が存する。何人かが完全なる考案を提供したる後、唯それを複製して実行に移せば足るのであらうと言ふようにも考えるのであるが、物事は決してそんな容易に成就するものではない。必ずそこに大いに加わってくるものがあるのである。多少の過誤はあつても油断なくその事に従わねばならない。一日の仕事は一日の仕事である」と。

小価値のものは或いは努力なくして出現することあるべし。しかれども

かくの如きは多くは尊重に値せざるものである。特に創意と認むべきものの存在は徴に過ぎなかつたとしても、ロータリーは決して天才の一発露の結果ではなかつた。叡智の言ありて曰く「天下新らたなるものなし」と。

ロータリーの最も独創的なる特徴はいわゆる職業別会員制度、即ち相異なる業務より各一名に限る代表者を選び以て会員とする制度である。一般世人は考えているようである。しかるにこの制度も決して独りロータリーの創意にかかるものではない。ロータリーが未だ出現せざりし遙か以前において、この職業別会員制度を採っていたクラブがすでにロンドンにあったのである。

ロータリーがこのイギリスの同種クラブと異なる点は、その理想を希求する熱意の熾烈にして確固なる性質において存するので、この点がロータリーの特色をなしてきたものである。またこのロータリーの性質とほぼ近似したものを持った二つの団体があった。一はベンジャミン・フランクリンがフィラデルフィアに創立したクラブであつて、これまた職業別会員制度によつていたのである。他は最初ストラスブルグに本部を置き今はナンシーに移つてゐる *La Société des Philantropes* であつて、いずれも

その所期の目的と理想主義とにおいてほぼロータリーと同一線上に立つものである。ただしこれらの団体の存在がロータリアンに知られたのは、ロータリーが生れてから余程後のことであつた。

ロータリーの第一回のシカゴ総会の議事録を一読する時は、一九一〇年当時のロータリアンがその希望を如何なる程度にまで推し進めていったかということが明かにわかる。これを一言にしていえば、当時の議事録には今日実現している所と殆んど同様の進歩を予想した言動が、豊富に散見する。

復興の要求は、専らロータリーの際限なき地理的拡張にのみあつたのではなく、他に何事かが企てられねばならなかつた。即ち形体的生長と比例して目的と理想とを發育せしめねばならなかつたのである。要するに内觀のロータリーは同時にそれに適應する外觀のロータリーたらねばならなかつた。広漠たる視野を備えて始めて遠大なる希望は実現せられるのである。主張を新たにせんと欲すれば先ず古き主張の大拡充を必要とする。然るに大多数の人々がすでに満足している旧来の主張を、立ち所に更改するということとは至難であつた。同一の土地において二度予言者となることは困

難である。もし或る運動の創立者が同志の人々に向つてその不明を謝せざるを得ざるものとせば、該運動の過去はそもそも何のためであつたらうか。

何れにもせよロータリーの復興がやむべからざる以上、先見の足らざる所のあつたことも告白せざるを得ないであろう。幸なるかな会員一般がロータリーの主張を拡大すべき同感をもち、進んでそれを表明するに至つた。困惑は同情ある理解に救われるものである。ために困惑者はその所信を固め、遲疑する希望を支えることができる。精神界においても物質界においても卒先者は常に孤独の旅をなさざるべからざるがゆえ、憐われ同情者の奨励を要求するのである。我が希望を解せざる友の冷淡なる表情ほど世に淋しきものはあらざるべし。さん然として理解の熱情に映ゆる面影ほど人生を朗かにするものはあらず、宿願の理想が傍の人に漫然気紛れの如くに見られる時ほど薄倖なるはあらず。友は無言にして時に輝きなき眼をもつて語る。「私は君に同意したいのだが、それが出来ないのは遺憾だ。私は君に対しても自分自身に対しても正直であらねばならぬ。君は夢の様な事を考えてきたのだ。私にはそこに何物も認められない」と。

今や卒先者のために必要な鞭撻の言葉は聞えたのであつた。力強き雄

弁の流れが薄暗い道を明るく照らしてきた。しかし言説が人の頭脳を新時代に向って準備せしめるにいか程の効果をもったかは俄かに断定し得ない。かつ言説のみをもってしてはロータリー復興の完成を期し得なかった。そこにはこれを行動に現わす必要があったのであるが、その行動すらも無力の場合なしとシなかつたのである。

かかる状勢の下においてロータリーは最初の公益事業に手を染めたのであった。シカゴ市内に公衆慰安所を創設普及したことこれである。右はロータリーの諸事業の中でも最も功名的なるものであったことを著者は記憶する。このロータリーの最初の事業はシカゴ市内のあらゆる重要な文化事業団体をこれに参加せしめ、また市及び各町の支持をも得たのであった。ただし第一の慰安所をワシントン街とラザール街との交叉点の西北隅に建設するまでには、無関心のものや種々なる既成の利害関係と二年以上も闘い続けねばならなかつた。かくの如くにしてロータリー・クラブは始めてシカゴにおける文化事業団体に列せられ、市の資産として数えられるに至つたが、この新事業に係る功績はむしろ小なるものというべく、それが大なる意義をなすは、これにならって世界各地のロータリアンが同種のサ

ービスを無数に提供するに至ったという点にある Y. M. C. A 会員が「シカゴロータリー・クラブは今やその存在の理由を明らかにした」といったのは、当時の世人の感想をよく代表するものである。

ロータリーが文化事業の畑に足を踏み入れたことは、その内に潜在する目的即ち利益の欲求をカムフラージュする為めの方便であるという人があった。著者は今当時の他の会員が抱いていた考えが如何にあったかについては責任ある応酬は出来ないが、著者自身の脳裡にあったことは明らかにいうことが出来る。著者は可能なる限りの最善なるクラブを建設せんとする考案に専念していたのである。大拡張の可能性について一箇の管見を有し、明瞭に約束されていると見たロータリーの将来性に鑑みて、よくこれに適合すべきものを組織しようとして望んでいたのである。はるかに後に入会した或る人々は、ロータリーが最初は甚だ不備のものであったことを知って驚いたと述懐している。しかり最初は不備のものであったにちがいない。もし始より完全なものであったとすれば、それはむしろ不自然なことである。深き思慮ある観察者から見れば、ロータリーは今日においてもなお未完成である。著者は反って彼の生涯の間にその完成に達せざることを望

んでいるものである。

同時にそこには一層好い或物があつた。即ち不満足が蓄積する恩恵がそれであつた。これ敢て遠隔の他都市或いは他国より輸入するまでもなく、その手許において十分に自給自足し得た所のものである。ヘンリー・フォード(註四)は彼の最初製造の自動車に不満足であつた。然らずして彼の自動車工業は繁盛を見ることは無かつたであらう。彼は只管自動車の製作を続けた。しかして時代の歩みと共に益々斬新なる益々好適なる型の自動車を製作し続けたのであつた。

最初のロータリー・クラブの不備は、誰よりも最もよくその創始者の意識せる所である。然り彼はそれを余りによく知っていたがゆゑに、その手にせる工具を放棄することが出来なかつたのである。彼は只管製作を続けたのであつた。

ロータリーに公共事業団体的の色彩が加味されたのは、シカゴ以外の地においてされたものと考えている人があればそれは誤解で、この端緒は紛れもなくロータリー発祥の都市から出てきたのであつた。

枝を撓むれば幹は動かざるを得ざる如く、その一端が解け始めてロータ

リーは旧態を離脱したのである。然れども復興の途を有効に展開するためには、為さざるべからざる多くの事業があつて、その中には、伝統なき新たな原野、侵害さるべき既成物の少なき地において、これを遂行するの一層適切なるを思わし埒たものであつた。ここにおいて明敏なるロータリーアンはこれをシカゴ以外の新地域に携行したのである。

一九〇八年の初めシカゴ・クラブの一員マニエル・モツツは、クラブの要望に基づきサンフランシスコに向つてメッセージを運ぶこととなつた。彼はサンフランシスコの市民の中に適當なる人士を求めてここに必ずロータリーの新設を見ん事を誓つたのであつた。果せるかな同地に選ばれたるその人は若き法律家ホーム・ウッドであつた。彼は遂によく自己の都市に世界における第二番目のロータリー・クラブを組織し得たばかりでなく、更に友人と提携して第三番目のオークランドに、又進んで第四のクラブをロス・アンゼルスに設立するに至つた。

サンフランシスコ・クラブが如何に慎重にかつ有力なるものとして設立されたかは、その第一回の集會に有名なるチャールズ・エム・シュワツプが出席して演説者となつている点に徹しても明かである。幾ばくもなく福

音は飛んでシアトルに伝えらるるに至った。

サンフランシスコの会員は、サンフランシスコ・クラブがロータリー第二番目の出現であることを少なからず誇りとしている。いかにも三千七百のロータリー・クラブ中に、第二の順位を占めているということは決して小なる名誉ではない。当時ホーマー始め発起人諸氏の著しい努力の点においても、サンフランシスコ・クラブは真に自ら誇るに足るものがある。由来カリフォルニア人を説得するということは容易の業ではないとされ、これを共同事業に誘わんとする場合において特にしかりであった。彼等は旋風の如く何事をも最初から叩き潰してしまふのである。アメリカの開拓者中においても最も勇猛剛胆をもつて知られる、鉦山開拓四十人組の直系の後裔であるからであろう。

ホーマーはこの偉業を完成した上に、更にシカゴの希望と待ちて、ニューヨークその他の東部諸都市におけるロータリーの建設事業に協力した。そもそも当年太平洋沿岸における奮闘は、烈々として火を吐く概があり、神意の動くが如くでありまた信仰の復活でもあった。思うに第一次クラブの設立はむしろ容易であつたらう。いわば仕事は手近かく出来たのである

が、第二次クラブの生みの悩みはこれとは全く異なるものであった。シカゴ・クラブを設立した当時の記録は、シカゴ・クラブ員すら余り重きを措かない程である。かつそれ一たび出来上ったものを観察することは容易であつても、これと同一の事業を他においても成し得ると確信するには、常識を以つてしては、量り知れない強き信念を必要としたのであつた。シカゴの場合に於ては相手はいわば我が陣営中の人々であつた。しかし広き世界に出でてはどこにシカゴの場合の如き都合の好い相手が得られようか。

世人も会員も一様にロータリーの成行を見守っていたが、太平洋岸の熱は如何にも盛んなものであつた。ニューヨーク、ボストン、セントルイス、カンサス・シテイ、ニューオールレアンス、セントジョセフ、リンカーン、ミネアポリス、セントポール、タコマ、デトロイトその他東西の諸都市何れにおいても、この運動には必ずや有益なる意義が存するのである。しからずして單純なる個人的クラブの特性がか程の成功をもたらし得る筈がないと考え始めた。その播種されたるところは、一都市より一都市と次ぎから次ぎへ蓄炭器の中に続々と落下して行くようであつた。遂に一九一〇年の第一回全国ロータリー大会に参集したるもの堂々十六クラブに達した

のである。

本部出版の文献中には、マニエルをサンフランシスコ・クラブの創立者として挙げているものがあるが、熱心なるサンフランシスコのロータリアンはこれに承服していない。マニエルはサンフランシスコ・クラブの導火线ではあつたらうがホーマーは開発そのものであつたと言つてゐる。そのいづれにしてもホーマーもマニエルも共に異論のない所であろう。要するにサンフランシスコ進出は長途の旅の愉快なる一つの安着地であつて、ロータリーの復興はなお未だしであつた。とに角ロータリーの前途に懷疑が持たれた事実のあつたという如きは、今日より見れば不思議な位に思われるのである。

もしロータリーに他市及び他国に向つて進出すべしという主張が発生しなかつたならば、シカゴ・ロータリー・クラブは如何なるものとなつて止んだのであろうか。これはにわかには想像し得ない所であるが、或いはロータリーの靈感的なる性質の喪失に終つたかも知れない。今日においては個々のロータリー・クラブは、世界的運動の波に乗つて交通し得る。これ過去に支払われたる時と金とが高率なる配当を豊富に提供せるものである。

言語を異にし習慣を異にし歴史的背景を異にする八十有余国の十五万人、そしてその総てが一致点を有する職業人、そしてまた人生のあらゆる部に適合する共通の理想、即ち世界に広く知らるる奉仕の理想の上に固く撮手しているこれらの人々、それが行動を共にしていることの如何に貴き特権であることか。

火曜日、やがて正午である。仕事を一時廢めてシカゴ・クラブの例会に出席する。六、七百名の実業家や専門職業の人々が一切の関心事を傍えに放擲して、和氣靄々のうちに談笑して居る。昔のドイツ実業家がビールに求めた慰安、イギリス人が午後の茶に求めた休息、スペイン人が午睡に求めた休養とその趣きを同じくせる完全なる安息である。近代生活の緊張を破る必要のあることは、神経系統の病気の激増しつつある候向がこれを明らかに教えている。

友誼に満ちた挨拶の交換、音楽、講演が次々に行なわれる。プログラムは教養の向上に役立つものばかりである。実生活上の要約された卒業科目のみである。実務家は自身を教育する便宜に余り恵まれていない。ロータリーはその欠陥を補うべき機会を提供する。

座長の右側に主題講演者が着席している、今日の講演者は誰ぞ。彼は或る大会社を支配する有名なる人事専門家である。彼はその会社に働く多数労働者の福利増進を企てて如何にそれに成功したかの経験について語るのである。しかし彼より先きに短かい話をする人がある。座長の左側に居るロンドン人がそれで、イギリスにおけるロータリーの一指導者である。その説く所は必ずイギリス・ロータリアンの国際親善運動に関するものである。今この人を親しく面識し得ることは会員一同の喜びである。外にチェコ・スロヴァキア人、近隣メキシコの親愛なる友人、日本人、オーストラリアの肩書あるロータリアンも居る。彼らは皆な自国におけるロータリーの最高峰に立つ人々である。

ああわれらは実に輝かしい世界に進み来つたものというべきである。国境線は従来の鮮明を失つて居る。われら祖先の訪問者名簿には一つの外国人名もなかったが、今日のわれらは広く各国民の間に知己を有つ特権を与えられているのである。万華鏡の如き今日のわれらの世界である。明日については何を語るべき。

註四五 コロンブス Christopher Columbus (1446頃-1506) スペインの航海者。一四九二年イザベラ女王の援助にて西インド諸島を発見した。

註四六 ガリレオ Galileo Galilei (1564-1642) イタリアの天文学者、物理学者。コペルニクスの地動説を根拠つけた。

註四七 パスツール Louis Pasteur (1822-1895) フランスの化学者、細菌学者。一八八一年、狂犬病菌の発見。

註四八 ヘンリー・フォード Henry Ford (1863-1947) アメリカの自動車王。コンベア式流れ作業を取り入れ自動車の大量生産を行った。

ロータリーの目的は貴ぶべき事業の根底に奉仕の理想を養成奨励するに在る。

- 一、交を広くして奉仕の機会を得ること
 - 二、実業及び専門職業の道德水準を高め有用なる職業の価値を認めて、各其職務の尊厳を保ち以て社会に奉仕するの機会を得ること
 - 三、個人として、職業関係において、また社会生活の上に常に奉仕理想の実現を期すること
 - 四、奉仕の理想を以て結合し実業及び職業人として世界的和合親善延て国際平和の促進を期すること
-

VII 卵殻を後に

獲得したる成功の凱歌をあげ、かつ将来に向つての運動を一層強化する為め、ロータリーは一九一〇年の盛夏シカゴにおいて大会を開いたのである。これに大なる努力を捧げたる一人としてチェスレー・ペリー(註四九)の名を挙げなければならない。当時この大会に参集したる人々は米国重要都市十六の代表者であつて、供重なる討議の結果、全米ロータリー・クラブ連合会 (The National Association of Rotary Clubs.) 設立の案と共にその定款及び附則を決定した。この連合会の本部のシカゴに設置せられたものが今日に及んでいるのである。

この成功は更に進んで一大希望を呼び起すに至つた。即ち全国的統一勢力の集結に成功せる以上は、たとえ全世界に及ばざるまでも、これを多数の諸外国を含む国際的組織にまで発展せしめんとする空想を抱くに至つたことである。空想は場合によつては無価値となることがあつても必ずしも損失のこれに伴うものではない。さりとしてまた是非ともこれを持続せざるべ

からざる明確なる理由もないのであった。しかしこうした空想が自由に野望を駆使することとなり、只管膨脹の興味からするロータリー宣伝勸説の火蓋が八方に向つて切られた。望むらくはかくの如き乱撃の間に価値ある目標を射止めんとしたのであった。

形勢がここまで進展して来ると、も早運動の成功不成功は独り一地方人の力をもつてよく左右し得る所ではなかつた。勸説のために身を投じた委員は全国に向つて飛躍し、そして新なる都市は時と共に逐次ロータリーの表中に加わつてきた。熱心なる当時の人々の努力はただに地域的拡張のみ注がれたるにあらずして、思想上の視野においてもまた有益なる拡張が行なわれたことである。その中の最も重要な貢献はシアトル・クラブによつて発表された主張であつて、これ即ち第二回全国大会に際し全米連合会の綱領として採択されたものである。あたかもこの機会において彼のシエルドン(註五〇)の提唱にかかる、*“He profits most who serves best”*の標語が採用されたことである。

この綱領はロータリーの主張を整頓し、特にロータリー運動の方向を一層的確に明示せんとした点において重要な功績をなした。これにより定

款ないし付則の規定せざりし部分を充実し、そして実業職業上の正当なる取引及び高尚なる道徳水準の肝要性を強調したのである。

合衆国外にして最も合理的なる膨脹地域を提供したるものがカナダであったことは極めて自然で、それにはウイニペッグが第一の目標都市として選ばれた。ウイニペッグ城砦の包囲は一九〇九年に始まり、一九一〇年十月遂にその占領を見るまで運動は猛烈に続けられたのである。この結果として全米ロータリー・クラブ連合会なる名称を捨て、ここに国際ロータリー・クラブ連合会と誇称して大なる咎めのないものと成つたのである。

夏季が到来する為めには一羽の燕では足りないが、ロータリーの国際化には一個のカナダ・ロータリー・クラブで十分であった。実はウイニペッグ獲得の必要はともあれ国際化の機運は既に高潮となつていたので、「ロータリーは最早国際的組織とならなかつたのである。」カナダを友愛の法衣の内に抱き込んでみると、今度はイギリスが手を差し延べて待つてゐる如く思われた。しかしそれは樂觀者の観測であつて、他面に非観論の主張もあつたのである。イギリス人をこの運動に引き入れんとするが如き希望はナンセンスである。彼らは階級の觀念が余りに強くまた余りに冷たい精神の

持主である。

「サー・ジョン(註五二)」が小商売人と友達になることを想像してみよと
いうのであった。然るに今やイギリス人は想像された程の階級人ではな
かったことを時節が証明した。「サー・ジョン」も人間として、地位の高下を
問わず周囲の人々の直面している問題に深い興味をもつ者だったのである。
ロータリーは決して会員の社会的、宗教的ないし民族的統一を期待する
ものではない。かかる企図は奉仕でなくして反つて非奉仕のことである。

社会的、宗教的、民族的相異の抹消を計ることは、文明からその最も有効
なる進歩の一方途を奪わんとするものである。現在の文明社会における各
個の社会的、宗教的、民族的集団は、おのおのその所有する理論を適用し
て以て銘々が正否を検証すべき地盤をなしているものであつて、この結果
文明はますます内容を豊富にし、思想はいよいよ水準を高めて行くのであ
る。

仮りにヨーロッパ各国民の多彩多様な生活状態が、同一色に塗りつぶ
されたものとせば如何にも悲惨であり、そこに旅行する興味もないこと
であろう。ただ一つの種類、ただ一と色の花ばかりなる庭園に誰が心を引か

れるであろうか。変化は人生の香味であるとは真実のことである。同一とは単調の異名で憂うつなものでもある。

ロータリーは社会上の地位や宗教上の信仰や、種族または国籍等を異にする人々を一堂に糾合して相互理解の機縁を作り、そこにますます深い親善と友愛の関係を育成せんと企図するものに外ならないのである。

ロータリーの職能はこの国においても同一というものではない。氣候の相違は往々人情の相違となる。晴朗な天気には人の心は軽く時には狂乱浮動する。陰うつなる空の下では沈黙考総て控え目となる。クリスマスチャン・ネームの使用が友情の前提となる国もあれば、また苗字をもって呼ぶことが親密を意味する国もある。かかる事柄はロータリーの真髓に触れた問題ではない。ロータリーの真髓に属するものは友愛そのものであつて、要はその友愛の伸長に最も便宜なる習慣は何かと云うにある。

さてロータリーをイギリスに移植する機会は余り長い時を待たずして到来した。ロンドンとマンチェスターに事務所を有したポーストンの或るロータリアンが、シカゴ・クラブの一員と共にロンドンに一クラブを組織することを委嘱されたのであつた。彼らの努力の成功が報告された時、はるか

に情況の推移を注視し待望していた熱意のシカゴ・ロータリアンは無限の歡喜に浸った。空想はまさに現実の域に転化せんとするのであった。

シカゴ・ロータリアンは、イギリスに第一の偉大なる足跡を印した者は彼らの代表者であると考えたのであったが、また彼らは事の意外に驚かねはならぬものがあつた。彼らは次の如き事實を風説のうちに聞いたのである。極めて短い間サンフランシスコ・クラブの会員になつていた一人のダブリン生れのロータリアンが帰国して、その墳墓の地に一クラブを組織し、更にベルファストにも設立の計画を進めているというのであつて、疑わしい程よい消息でしかもそれが真実であつた。サンフランシスコに焚かれた大きなかがり火が大海原を越えて対岸に燃え移つたのである。

この不思議な手腕家であつたアイルランド人は、その後いよいよ大活動を開始してグラスゴー、エディンバラ、リヴァープール及びバーミンガムに働きかけたのである。かくて以上の数箇の都市がロータリーの傘下に集まつた頃、始めてこのイギリスの情況がエディンバラの一知識人に依つてシカゴに明瞭に紹介されたのであつた。

一度空想を追い始めた人間は容易に止まる所を知らない。アングロ・サ

クソンの王国における飛躍は、いよいよロータリー世界化の夢想に拍車を掛けたのである。先ずドイツ及びフランスにあるアメリカ商社の代表者とオーストラリアの法律家とに宛てて勧誘状が送られた。しかしそれは直ちに具体的効果をもたらさなかつた。

次いでシカゴ・クラブの一員が商用でキューバに赴いた時、その機会を利用してハヴァナの開拓を計画した。しかしこれも彼の最善の努力にも拘らず失敗に帰した。希望に燃えて立ちながら不結果をもつて帰ってきた彼の感想はこうであつた。ロータリーはアングロ・サクソンだけに限られた観念であつて、他の民族には所詮理解も認識も得られないものであると。しかしこの見解の誤謬であつたことは、今や多くの優秀なるラテン・アメリカン・ロータリアンを有することを光榮とする人々のよく知る所である。その後フロリダ、タンパのクラブ員はキューバにおける運動に美事成功し、その余勢をかつて更にスペインにおいても勝利の栄冠を得たのであつた。

かくてアングロ・サクソン神話の退散した後は総てが可能であつた。南米にヨーロッパ大陸に、アジアに、アフリカに、オーストラリアに、ニュ

ロータリーランドに、その他東方海洋上の諸島国に、ロータリーは駁々として
拡張の勢を進めた。

ロータリーを勧説する人々は概ね自ら進んでその使命に当たたる信念の強
き特志家である。即ち自ら時と金とを費し主義の宣揚に奔走したのであつ
て、彼らの中には生活標準の甚だ高い人が多くある。

試みに今日までロータリー運動の為に犠牲的に尽力された世界特志の
人々の中殊にその名の顕著なるものを挙げれば、ドイツの前総理大臣ウイ
ルヘルム・クノー博士、オーストラリアのヘンリー・ブラッドン卿、ニュ
ージーランドのジョージ・フォウルズ卿、ペルーの駐米大使フエデリコ・
ペツェット、日本の米山梅吉及びかのカルガリーのジェームス・デヴィド
ソン等である。彼らは皆なロータリーの精神を信奉し、その国際親善の増
進に資すべきを確信したがために動いた人々であつて、彼らのこうした行
動の背後には、各々祖国への奉仕を思う忠愛の精神の外何物もないのであ
つた。クノー博士の如きはドイツの宰相たらんよりは、むしろドイツにロ
ータリーを盛大ならしめんがために任ぜんと言つたことを聞くのである。

かくてロータリー拡張運動の進展と共に当初の粗放性を放棄し、漸く秩

序正しき資質を調うるに至った。先ず視野の普遍化に対する疑問が解決して、次ぎに問われた点は、およそ一クラブを設置するに適當なる都市の大きさ如何の問題であつた。これに対し最初の主張は、苟くも一クラブの開設は人口五万以上の都市に制限せねばならぬというにあつた。その後僅かの経験によつてかかる窮屈なる制限の不必要であることが知られ、標準人口は次第に低下されて二万五千から一万、五千、二千となり、遂にその地域住民の数は重要視するに足らず、要はロータリーに参加を希望する人々の資格の問題であるという結論に達したのであつた。以来人口一千もしくはそれ以下の小地方においても優秀なるロータリー・クラブが組織を見るに至つたのである。

以上の如くロータリーの地理的拡張の記録は、ロータリー史上の最も顕著なる平面をおおうているが、これと同時に思想及びその実践の方面に於ても發展は同様に著しいものであつた。先ず行為があつて次いで称名が伴うことで、多種多様な形においてあらわれた行為のサービスが、含蓄ある文字の「サービス」を生んだのである。

綱領に次いで貢献せられたものは先進ロータリアンの協同力作の結果に

成つた倫理準則であつた。

He profits most who serves best の標語が綱領の頂点であつた如く、己の欲する所を他人に施せの黄金則が倫理規準の第一に置かれていた。

右の黄金則をロータリーの主張の綜合的表現として採用せることに對しては、近来種々なる方面から尠からぬ物議を呼んでいる。しかしこれはこの黄金則を人生の規準とすることに好意を持たぬ会員が多数であるという理由に基くものではない。反対説は概してかく言うのである——従来ロータリーはと角宗教運動と混同され易いに拘らず、この黄金則を標榜する事は、ロータリーを解せざるものをして反つてますますロータリーを疑わしめ、これを宗教視せしむるの根拠を与うることなきかと。しかり、我々がすでにロータリーを宗教と考えていない以上、ロータリーの文書中にこの黄金則を登載することは中止さるべきであらう。

従来ロータリーの起源或いは設立の動機に関する誤解は決して少くないが、なかならずく広くかつ深く世人を支配している誤解の一つはロータリーをメイソンの派生物または補助物の如くに見ようとする事である。勿論メイソンのロータリアンもいる。しかしカトリックのロータリアンもいる

のである。ロータリーの外においては人おのおのその欲する所に自由なるべく、ロータリーの内においては唯親しき友人たるべきのみである。

一九一五年にフィラデルフィアのガイ・ガンデーカー（註五）は彼の『ロータリー通解』（A Talking Knowledge of Rotary）なる書冊を刊行した。ガンデーカーは従来のこの種文献と同様に、新なる解釈ないし理想をたてるということよりも、ロータリーを現実のままに記述することを目的とした。同書はその限定した範囲において使命を十分に果しているもので、新旧クラブの為にすこぶる有益なものであった。

この『ロータリー通解』は多年の間最も便宜なる参考書として利用され、今日においても決して不必要のものとなっていないが、唯最近個々の問題を詳細に取扱っている出版物が盛んに殖えたため、それ等に替えられた部分が相当に多い。

相互援助の観念は一般的奉仕の観念に世を譲った。一般的奉仕即ち約言して「サービス」と呼ぶようになったのである。しかし現在なお茫洋として、巨大なる姿において蜃気楼の如く現われている国際サービスは、当初は却って副産物の如く考えられていたのであった。各国のロータリアンが

共通の任務に相提携して行くならば、国際間の理解親善は自然の結果たるであろうと予期せられたのであった。

註四九 チェスレー・ペリー Chesley R. Perry RI初代事務総長。

註五〇 シェルドン Arthur F. Sheldon シカゴRC初期会員、図書販売。

註五一 サー・ジョン Sir John イギリス人全体を表現する呼び名。

註五二 ガイ・ガンデーカー Guy Gundaker フィラデルフィアRC会員、

一九二三〜二四年、RI会長。

Ⅷ 天の佑

ロータリーが復興して間もない頃の一夜、天の佑を得たという事実を駢証したのである。それはこの運動に不滅の足跡を残す宿命を有した二人の人間が、シカゴ・クラブに入会して来たことであつた。シカゴに土着のチェスレー・ペリーと、ミシガン生れのアーサー・フレデリック・シエルドンで、後者はミシガン大学卒業後、或る商社の予約図書販売係に就職する為めにシカゴに出てきた人であつた。

シエルドンがシカゴに出て来た時は、丁度前に記したシカゴの最悪時代であつて、その混沌たる実業界の状態は、若きシエルドンの心に深刻なる感銘を与えずにはいなかった。美德には何等の報酬がなく、成功の機会は無慈悲な奪取、必要とあらば詐欺もあえて辞せざる如き印象に満ちていた当時であつた。しかし物質的利得よりも名誉を貴重と見たシエルドンは、傭主の期待する販売係の態度には飽くまで反対せざるを得なかつた。遂にこうした地位に対する嫌悪の情に堪えかねた彼は、奮然として仕事着を手

近かの小溝に投げ捨て辞職してしまった。

あたかも消費者のためには「消費者は自ら守れ」の原則が適用され、悪意と不信用とが実業上の競争を特質付けていた当時であり、被傭者の福祉の如きは全然顧みられなかった当時であったが、シエルドンはかかる一般の通弊のうちに或る注目すべき異例があることを発見したのである。それは寛容を以て適正公明に経営された商店または会社の中に、最も成功しているものがあるという事実であった。ここにおいて彼はその成功の秘訣が何処にあるかを考究した結果、従来の印象を次第に打消して新なる断定を下した。曰く永続的成功を保証する唯一の信頼すべき方途がある。よく他人の為に尽すこと即ちサービスがそれであると。

他人が漠然と考えていたことをシエルドンは明確に把握したのである。即ち成功は無慈悲なる貧らんや我利の根性に依存するのではなく、サービスの法則が適用さるる所から生れる不可避の結果だと信じたのである。彼の見た所ではサービスの法則は引力のその如く、蔽として誤りのない自然の法則であった。彼はムーデーの宗教界における如く実業界における伝道師であった。彼とペリーの両者は実によく似合ったものがあり、二人

には火の如き十字軍の情熱が百折不撓の目的と意思とに燃えていた。二人ともに身を挺して邪惡に抗し、特異のシカゴ的反撥力を代表して決然呼び掛けようとしたのである。

シエルドンの希望には際限なく、その確信は止まる所を知らなかった。その思想の或るものは電光の如き閃きを以て来たり、また或るものは緩慢なる進化の過程を辿って現われた。一九〇八年の或る夕ミネアポリスの理髪店の椅子から、その組んでいた長脚を解いてひよう然と戸外に現われたシエルドンの頭脳は、まさに「最もよくサービスをなす者は最も多くを利益す」の思想を鍛錬しておえていた。この他にも幾多の標語が時を重ね日を積んで製作され再製作され、その発表は突如として靈感に成ったようでもあったが、事實は長き思弁の帰結であつた。

「最も善くサービスを為す者は最も多くを利益す」の標語は世俗に過ぎはせぬかという非難もある。またシエルドンがこの思想の中に觀念した報酬とは物質的なるものかそれとも精神的なるものかと問う人がある。

著者の信ずる所によれば、シエルドンは彼自身に関するかぎりいわゆる精神的報酬に主眼をおくものである。ただし彼の目的は最大多数の人々に

最大限の幸福をもたらすにあって、その最大多数の人々は物質的利益に多くの関心をもつという事実を彼はよく認識していた。故に彼の目標とした人々はこの物質的利益を追求する人々であるということになる。

彼はいたずらに他の利己心を破壊しようとは考えなかった。彼のはるか實際的に考えたことは、その求利の念を純化し規律して、社会一般及び行為者自身のために幸福をもたらそうとするにであった。世の一般の通念が利潤の目的と何処までも手を握っていくものとするも、利潤の作出を正しきものとすることに努力したいと考えたのである。彼は熱狂といわん程の熾烈なる意気をもって、利得はサービスの必然の結果であることがあたかも熟の火におけるが如きものであり、火力が強ければ強い程熟度は高い、サービスが大なれば大なるほど利得は多いのであると主張した。

かつてニューヨーク・ローチエスターの或る教会の聴衆に向つてシエルドンを紹介した牧師の言葉は、善意に出でてしかも誤っていた。それはシエルドンの教義を遵奉することはもとより金銭上の利益を欠くも、ただ正しき事をなしたという実感の経験する満足によつて、一層大きく償われるのであると言ったからである。かくの如きはシエルドンの本旨ではなかつ

た。不幸にして足らざるこの紹介の言葉が聴衆に悪い印象を残すことを慮ったシエルドンは、その日の講演に与えられていた時間の大部分をその打消しのために費さねばならなかった。

しかしシエルドンはサービスに報われる精神上の利益を無視したのではない。むしろ衷心に深くこれを意識しつつも、ただ人間社会の自然的通習である求利の觀念を最高限のサービスの理想と調和せしめることを以て、自己の特殊使命と考えたものに外ならない。彼の言説はシカゴ・クラブ員の間次第に深い感銘を印していった。そして彼のスローガン「最も善くサービスをなす者は最も多くを利得す」は遂にロータリーのスローガンとなったのである。

爾来このスローガンは更に他の一つのスローガンと共に、ロータリーの指導理念の表現としてロータリアンの無限の尊敬を博してきたものである。その榮譽を分つ他の一つとは、ミネアポリス・ロータリアンの貢献に成る一層博愛的なる觀念の表現「サービス第一、自[己]第[一]」(Service above Self)と云ふ。

一九二二年のエディンバラ大会の際、そのプログラム委員はアメリカ人

の理解する「サービス」の理想をイギリス人に説明する最適者としてシエルドンを招待し、彼は快くこれを承知した。この時の使徒シエルドンの言を聞いた人々は今にその絶妙を讃えていることである。

英語の通用する国にしてシエルドン私淑者のいない所はない。殊に外国のロータリー指導者中に彼を師表と仰ぐ人々の多いことは驚くべきで、シエルドンに私淑する程の会員は皆な推称すべきロータリアンとなっている。シエルドンが今日においてもなお自己の理想追求に傾倒していることは、四半世紀前の彼といささかも変っていない。彼は今や合衆国その他同情者のある土地の小学校または中学校において、彼の倫理観がその教科の中に取入れられることを只管希望している。これ柔軟なる若者の頸脳が彼の理想を扶植するに最も適当なる素地であることを考うるが故である。シエルドンは永久に勇退せぬであらう。否な彼はついに安心に達することすらないかも知れぬ。理想の追求は彼にあつては生活そのものである。

次にこの記憶すべき夕に入会したなお一人の戦士チェスレー・ペリーは、ロータリーの唯一人の国内的及び国際的書記長である。多くの人々はチェス・ペリーといえは直ちに国際ロータリー(The Rotary International) を

連想する。チェスレーはシカゴに生まれて文字通りシカゴと共に成長した生粋のシカゴ人であつて、彼ほどにこの都会の伝統に通暁している人は滅多にない。彼は元來教養に恵まれていたとはいへ、能く自らの運命を開拓せることの多き人である。文学の愛好は彼の今日までの生涯に多大の影響を与えており、その博覧は驚くべきものであるが、現在最も読みふけてゐるものは必ずやその内容がロータリーの目的に関連性をもつ文献であるう。

ハイ・スクール時代のチェスは、文学会の会長や学校新聞の編輯幹事に挙げられていたが、彼が名誉ある役目はまた全く別の方面にもあり、例えば学内野球部及び蹴球部のマネージャー、軍教部の指揮官、クック・カウンチー野球連盟及び蹴球連盟のマネージャー等も勤めたのであつた。

彼はその文学愛好からシカゴ市立図書館や夜学校に奉職したこともあつた。またアメリカ・スペイン戦争に出征し少尉となつて帰り後ち大尉に昇進したが、従軍中の彼は有力なる新聞雑誌三、四の通信員としても活動したのであつた。かかる多方面なる経験は、後に彼がたまたま生涯の職務と定めたロータリーへの奉仕に従事する場合に、実に絶大なる効用を示した

のである。

かくてチエスの広き限界は遠く将来の可能性を見透し得たのであって、彼の年来の献身がよくロータリーを現在の如きものに育てあげてきた。終始一貫目的を二つにせざる人があるとすれば彼こそ正にその人である。朝来り夕去る星霜移り変れども、かつて変らざるものは彼の金石の心である。彼は八時間労働の原則を支持しているが、しかも彼自身はそれを倍加し働くのであった。彼は休日に賛成である。しかし——人は土曜日の午後や日曜に、またはクリスマスや新年の休暇に多くの用件を処理し得るものである——平生周囲には同僚あり、外部よりは訪問者と電話が引きも切らない事務所においては果し得ない幾多の雑用を控えるものである。

「最後の小事にも忠実に」とは真に彼についての事である。ロータリーの枢機にはかくの如き人が常にあらずかって来たということは実に天助である。この天助がなかったならば結果は如何なるものであつたらうか。彼にターレランの外交あり、ヂスレリーの円熟があつたとしても、もし彼を信任する人々に対し彼の示せる如き誠実がなかったならば、何の役をなしたことであろうか。

一事業年度から次の事業年度へと彼の精励は続く。役員の椅子に如何なる変化があつても唯一つの椅子のみは変わらない。常にかつ永久に出席している唯一人として彼はしばしば提案はするも固執はしない。そして命令とならば、事の如何を問わざる用意がある。彼の信任に委する者十五万人と言うに至つては、莊重なる男子の職責これに過ぐるはなく、そしてこれを意識すること深きまた彼にしくものはない。仮りに彼の貢献せる事蹟の総量より、その既に償われたといひ得べき部分を控除するとも、なお剰余をもつて彼をロータリーの先頭に立たしむるに足るであろう。

彼が初めてロータリーの事務を担当した時、そのスタッフは唯一人、しかも兼職の事務局員を有するに過ぎなかつた——チェスその人である。しかるに今日彼の麾下に勤務するものは百人を越え、彼らがこの上司に対する忠勤と事務に対する精励とは一見真に快心の情景である。かつての不況時代には俸給の引き下げは当然の事として何等の異議も生ずることなく、事務局の精神は実にロータリー精神の典型というべきであつた。全部の局員は教えられたる事柄を喜んで実践の上に試みんと欲しているのである。米国において一事務所に各種の外国人を使用することは稀ではないが、国

際ロータリー本部は此の点において特に著しい光景を呈している。チューン系の髪の毛の美しい事務員に立ち交つてラテン人の同僚が幸福に働いているというように、本部事務局の国際性は年と共にますます濃化する傾向にある。

事務局員の若干数は大学の学位受領者である。運動の伸展と共に局員に要求せらるる教育の程度はますます高くなり、なかならず文化科学方面の教養が第一に要求せらるることは当然である。また局員中には三カ国、四カ国、多きは六カ国の言語を解する者あり、少くとも二カ国語には大多数の者が通じている。そして外国生まれ或るいは外国育ちの同僚が、各自の国語の正しい熟語成語の用法を教え合っているのである。

「スタッフ・ソサイティー」なる有益にして興味ある互助団体が組織されており、懇親融和の助長、教養及び慰安の向上、事務局の秩序維持等に役立っている。

以下は最近本部事務局を訪問した或る人の感想談である。「私は国際ロータリー事務局の活動状態を目の当り見た。潑刺たる局員百名は人間界に蜜蜂の社会を形造っている。ここにロータリーの心臓は躍動しているのであ

る。これぞ世界の八十有余国に向かつてロータリーの成果と理想との血液を、間断なき脈搏をもつて送り出す偉大なる中枢機関である。またそれは一度出た所の生の血液が還流して方向を正し、靈感を新らたにして循環再び送り出る大渦である。山と積まるる出入発着の郵便物、その中には外国語のものが多し。電信機が小鳥の囀りにも似て鳴り続ける。かかる高度の圧力にも拘らず、そこにあるものは誠実和気の漲るチーム・ワークと職務の矜持とである。処理せねばならぬと思う事務のためには、土曜も日曜も休日もない。かくの如きは国際ロータリー事務局負にとつては例外でなくして通常の勤務にすぎない。彼らはサービスを説き、これを実践躬行しているのである。かく局員百名からの同勢が打揃った忠勤は認めつつも、この驚くべき業績の荣誉をになう第一の功労者は、国際ロータリー書記長ペリーその人であると讃うことの穩当なるを思うのである。

ロータリーは世界の一大実力である。それは国際的一事実であると共に一動力でありそして国際事務局は正にこのロータリーに相応しき存在である。その経費は一九二四—二五年の予算において一般事務費六五〇、〇〇〇ドル、機関誌(The Rotarian)経費一〇〇、〇〇〇ドルである。この他人

件費一八八、〇〇〇ドルは、会長及びヨーロッパ、アジア両事務局の分を含み、一般事務費総額の約三割に当る。この割合は通例公共団体の標準より二割方低く、少くとも決して高額とはいわれぬものである」と。

ロータリー運動の成功について著者に嫁せられている功績の多くの部分は、チェスに帰せらるべきものであると信ずるのである。著者自身のなしたる多少の寄与も、もしこの協力者の不撓の熱意に助けられることがなかつたならば、その少なからざる部分が必ず無駄となつたであらうと思う。著者はあくまで、チェスはただに公正の人たるのみならず、終始かわらざる寛容の人であると確信しまた断言する。彼は常によく自己の個人的考量から離れて、あらゆる問題をロータリーの最高なる利害関係に照らして判断するのである。長い間かくの如き人物の協力を恵まれてきたことは真に光誉とすべきである。

もしチェスを誤解して淡々として感情の燃焼なき人間とするロータリアンがあるとすれば、著者は過去四半世紀にわたる交際から得た断定をもつて、彼が全くそれとは反対の人間であることを保証するに躊躇せぬ。最も深き最も永続的なる友誼は、裏面に現出すること少くしてしかも強く底流

を続ける。

一九〇五年二月二十三日シカゴにおいて弁護士ポール・ハリスの首唱により僅かに三人の同意者を集め創設せられたるものを世界最初のロータリー・クラブとなす。それより伝わりて三年の後サンフランシスコに第二のロータリー・クラブの組織を見、以来発展今日に至れるものなり。

一九一〇年八月シカゴにおいて連合会を開き定款を設け本局役員を選挙したり、当時ロータリー・クラブの数十六という。

一九一一年八月ポートランド市に第二回連合会を開催し機関雜誌の発行を決定せり。

一九二二年八月ミネソタ州ズルスに開ける連合会は一変して国際連合会となりイギリスのロンドン、カナダのウイニペッグ両地の加盟を可決せり。

一九二二年ロスアンゼルスに催されたる国際連合会においては

定款を改め、ここに「国際ロータリー」の名を採用するに至れり。その後一九三三年に至りボストンにおいて国際大会開かれ以来引続き欧米各地に跨りて催されたるが一九三四年にはデトロイト、一九三五年にはメキシコ・シテイーにおいてし、今年はアトランチック・シテイーに開かれんとす。

年々の国際大会において次期の会長以下の役員を選挙す。前会長を含む十五人の理事中五人はアメリカより、一人はカナダおよびニューファウンドランドの中より、一人はイギリスおよびアイerlandより、五人をその他の各地より出すとすること定款定むるところの如し。

IX 伸び行く悩み

さる程に星霜の推移とともに漸く拾頭して来たものは、ロータリー内部における思想の対立であった。ロータリーへの適応性において、最も重要にして最も優秀なる機能の一つと考えられた職業奉仕 (Vocational Service) の支持者は、社会奉仕 (Community Service) が多くのクラブ、殊に比故的小なる土地におけるクラブの関心を容易に独占したという事実を、或る種の羨望を以って眺めるようになった。

苟くも文化的良心に醒むる大小数百の都市は、新時代に適合して国内一流の進歩的優良都市たらんと努力した。少年音楽団はその根の発見される限り到る処に培育され、少年キャンプ団また各都市において発会式をあげ始めた。衰たいにひんした旧商業会議所は復活し、その存在なき地には新なるものの設立を見た。この間ロータリアンは単なるしようよう勸説の役割に止まらず、しばしば事の全過程に参与し、資金上の寄与をなし得なかつた人は労役を以てそれに替えた。小町村におけるロータリアンは、露営

を作す場合の「器用者」でなければならなかった。釘を抜き得る者は大工の資格を与えられたと同時に、薬種または化粧品の商品の商売人が、必要の前には鍊瓦師とも鉛管工ともならねばならなかった。婦人達は美味なる食事を提供し、時にロータリーの友愛圏に入り込んだことであつた。

丸木小屋の昔からかつてかかる事態は経験されなかつた所であつて、市民の心境には既に重大なる変化がきていた。積み重ねた年月を振り落して再び少年時代に立戻つたかの如くであつた。昔の渋面は微笑に変わり、旧きしんしの焰は燃え続けんにも憎悪の焚木足らずして漸く火の衰えんとせし時、いわゆる社会奉仕は自から所を得たのであつた。

一般社会事業が比故的好く組織せられた大都市においては、このロータリーの社会愛表現の形式は、おおむね既成機関との協力の仕方をとつた。またイギリスその他北米大陸以外の諸国に於ては、この社会奉仕は既成の制度の不足を補うに適當なる方法を以て提供された。

合衆国及びカナダにおいては、ロータリーの模範にならつて類似の目的を標榜する幾多の団体が出現した。なかんずくキワニス(Kiwanis)とライオンズ(Lions)については會員数においてロータリーの次に位するものとなつた。ロ

ロータリーはこれらの団体の出現を悉く歓迎し、これに助力を与うることを以て喜ぶべき特権であると考えた。これら姉妹団体の達成したる著しき効果は、ロータリーの右の如き思想態度に対する十分なる報償となつてゐる。

少年問題に関する事業は数年の間舞台の中心を占領していたが、やがて一つの競争者は現われた。即ちオハイオ州エリリア市の優秀なる一市民が、秘蔵の或る案件を携えてロータリーに入り込んできたのであつた。彼はその懐抱する計画に配するにロータリアンの背景を以てせんとする特殊の目的をもって、同地のロータリー・クラブに入会を申し込んだのである。その計画とは即ち不具児童の保護、施療、教育であつた。彼エドガー・アレックソンにつき物語ることは、古今を通ずる最大なる人道主義的貢献の一つを記録することである。彼が不幸なる児童の為にその自然の権利であるべき生活権を確保せんとするに當つて、その運動の本拠にロータリーを選んだことは、ロータリーにとり多大なる名誉であつたといわざるを得ない。かくて国際不具児童協会は、主としてロータリアンの努力を通じ、不具児童の福祉増進を目的とする四十有余の州機関及び地方機関を樹立して居る。もしロータリーはレーゾンデートルに不足してはいないかとの疑念をも

つ読者があるならば、ロータリーの前般の社会奉仕が幾百万の不具児童に独立性を付与し、幸福にして有用なる生活を営み得るに至らしめたという事実に見てもせんことを望む。この功績はあげてエドガー・アレンとその協力者に帰すべきものである。

他面職業奉仕、即ち各実業界及び職業界に向つて高尚なる倫理水準と理想との醸成設定を期する奉仕こそ、ロータリー本来の機能の中に最も重大視すべきものであると主張したロータリアンは、またその方面の寄与に怠りはなかつた。即ち彼らの尽力によつて合衆国内に設立せられた実業家、職業人の全国的団体は少なからぬ数に上り、ロータリーの倫理規準は多くそれら団体の採用する所となつたのであつた。仮りに一步を譲つてそれら団体における倫理規準の採用が、これにより必ずしも団員個々の向上を保証したものであらざりしとするも、少くともそれが正しき方向をとる重大なる心機転換となつたことは否定し得ないであらう。

ロータリーの最も有力なる指導者にして、この方面の運動に深く傾倒している人々は論じて曰く、ロータリーは実業家職業人の組織する団体なるが故に、実業及び職業上の問題にのみ力を注ぐべきものである。クラブ

員を一業一員と限定する制度は職業奉仕に関してこそ意義あれども、社会奉仕に關しては何等の意義をもなさない、けだし後者は広くこれに關心を有するものを包容するに足ればなりと。

また或いは主張して、職業奉仕は国内及び国際実業団体を通じてロータリーの勢力を非ロータリアンの間に伝播し得るといふ点において、この方針を拵ぶの切実なることを力説した。もしロータリアンにして精進一番実業界の伝道師をもって自ら任ずるならば、一般の実業道德は速かに高尚なる水準に向上するであろうと言うのであった。

総ての考慮を職業奉仕に集中せんとする思想は、理論的帰結に於て一つの事態を想定するものであった。実業道德の向上を唯一の目的とする世界的大同団結なるものは、単にそれ自体において大なる価値を有するのみならず、更に各国間の親善増進の上に寄与する所があるといふ点において、間接に發揮し得る価値の驚くべきものがある。しかしロータリーは創立以来その若干の目的の中に特に或る優位を許与したことはかつてなかつたのである。そして第二の復興を思ふのには既に時が遅かつた。

比較的小なる都市においては、社会奉仕は各方面から要求された。それ

には特に深き理由の存せるにはあらずして、理論或いは研究よりも直ちに実行を必要としたからであった。少数の人を使用するに過ぎざる事業家にとつては、傭主对被傭者の問題の如きに至つては切実性がなかつたのである。

また指導者中の或る者は、社会奉仕に敢えて反対ではないが、クラブはクラブとして直接にその方面に参与すべきものではなく、他の団体の主導するこの種運動にクラブ員が個々に参加することを奨励するの程度に止むべきである、但し他に適當なる団体の存在せざる場合が稀にこれありとせば、その出現をみるまでロータリー・クラブが運動を主導するもまたやむを得ぬであらうとの意見であった。

結局ロータリーが一業一代表負の會員制度を持続する限り、言論的唱道機関たるに止まるべきであつて、要望の存する所を世に訴え、これに対応する運動の誘発に助力を与うるを最善の途とすべしと言うのが理論派の見解であつた。甚だしきは彼らの中に、少年問題運動及び不具児童救済運動の支持者は不誠実であるとすら非難するに至つた若干があつた。即ち社会福祉派ロータリアンは、ロータリーの限定會員制度が利己主義と解せられ

ることに極力反対するに拘らず、それだけの熱意をその奉仕には傾注せぬではないかと非難するのであった。

これに対して少年問題運動及び不具児童運動に熱中する人々は、一片の理論或いは不誠実の名をもってする非難を黙受するものではなかった。彼らにとつては理論は第二の問題で、奉仕の実行を理想とするところから、言論的唱道機関に止まらんとする如きは責任回避に外ならなかつた。行過ぎは恐るる所ではなく、恐るる所は奉仕のための絶好なる機会が失なわれることで、ロータリーが一つの会食をなしシガーをくゆらし、歌を歌い演説を試み肩を叩きあう会合に終るなからんことであつた。彼らの高唱する正統主義は、奉仕の正統主義以外の何物でもなかつた。説教は説教者に一任すべし、我らには今ここに実行あるのみ。よろしく共に奮起すべしと要望したのであつた。

かくて名実共に奉仕の集合体となつた各ロータリー・クラブが、苟くも奉仕を要求する社会事業という社会事業の総てに対し、きゆう然として援助の手を差し延ぶるに至つた時、会見中の思想的分子は、また彼等の執着せる理論の跡方もなく抹消し去られんことを警告して起つたのであつた。

一九二三年セントルイス大会の会期中にクライマックスは来た。その時決議第三十四号なる彼の記念すべき一大決議は、席捲するが如くにあらゆる分裂の危険性を解消しきつたのであった。この決議は、一方において個々のクラブに対し事業上の完全なる自治を認めると共に、他方において一つの行動が他の行動を無視すべからざることを厳に戒告したのであった。まことにこれ相括抗する諸勢力を協調せしめたる最も聡明にして機宜を得たる決議であつて、これにより始めて当時うつ結せる空気を清掃し得たのである。この決議は主としてテネシー州ナツシュビル・ロータリアンの輝々たる威勲に帰せらるべきものであつた。

一つの小都市に五十名ないし百名の会員よりなるロータリー・クラブが存在する時、その勢力はよくその小都市の品位を左右し得るものであるかどうか。けだしロータリー・クラブがその存在する都市の品性に影響を及ぼしたことは、既に明瞭に実証せられている所であつて、ことにその影響が小なる土地ほど顕著であることは当然であろう。往時華かなりし小都市の類廃無気力になつていたものが、ロータリーが出現したために生氣を恢復したる例もはなはだ少なくない。実際ちまたに公共的精神なく、家に饒

舌とゴシップとがび漫する都会の生活は往々娼婦的とならざるを得ない。小都市における生活状態は、精神が先ずみちて始めて物質的表面が整うのである。

ロータリーの出現以来大変化を采たして、紛々たる鬭争や末梢的嫉視は、高尚なる文化的意識と真しなる協同精神とに代つたとは、小都市のロータリアンが今日までにしばしば深い感銘をもって報告して居る所である。

合衆国内の幾多小都市の蕪雑性は、ロータリー及びそのあとを追う同種団体の出現によつて旧態を一変したとは、タフト大統領時代の医務局長であつたチャールズ・イー・バーカーの裏書きしたる報告であつた。一千に近い小都市を实地見聞したバーカー博士は、その言うべきことを知つていた、曰く幸福なる社会生活の鍵は共愛和衷であると。

ロータリーのこの効果は、ロータリー・クラブ都市連合会(Intercity Meeting)を通じ、各都市間の關係に実現された。即ち各都市の代表的実業家が相会することにより、そこに平生の痛烈なる競争は緩和せられ、共同提携の精神の発揚せらるる機会が多分に生じたことは当然である。この種の連合会は数年来大小都市のロータリー・クラブに共通なる事業となつ

ている。かつて著者は競争都市であるサンフランシスコとロスアンゼルスとのロータリー・クラブ連合会に出席するの機会を得たが、この競争のはなはだしかった両市の代表者間に表明せられた友愛の情景には、誠に深い感激に打たれざるを得なかった。その後両クラブは年々歳々訪問し訪問され、会員はこの最も称揚すべき目的完成の為に一千哩の道を遠しとせず往復し合っている。

都市連合会はしばしは二十五ないし三十都市のクラブ代表者をもつて開催せられるが、地区大会(District Conference)となると一層広く百をも数える都市より集合し、更に国際大会は実に五十有余国の代表者が参加する。ロータリアンは国内を旅行する時は勿論、国外においても事情の許す限り行先きのロータリー・クラブの会合に出席する。国際事務局によつて、何時何処にクラブの定例会合が開かれるかを知ることが出来るのである。比較的大なる都会におけるクラブの会合には、常に外来の訪問者が多く出席するのであつて、その賓客たるロータリアンは特別の待遇を受ける。今日までに記録的最多数の賓客に恵まれたるクラブは、全米教育者大会の際におけるシカゴ・クラブであつた。右協会の会員の過半数はロータリアンで

あつたが為め、その時のシカゴ・クラブの来賓数は無慮八百名におよんだのであつた。またアイルランドのベルファストとダブリンのロータリー・クラブは、南北アイルランドの軋轢時代にしばしば共同の会合を催したのであつた。

かくてロータリーは相反する利害関係を如何に調整融和すべきかにつき特別の考慮を払ってきたが、そは他なし、相拮抗する双方の人々を一に友愛の雰囲気のうちに集めて驚くべき成果を収め得ることを実験したのである。反目の焰が燃え上り或いは内燃するところ、ロータリーが真価を發揮すべき機会は正にそこにある。農業階級が実業人に対する信頼を失つたというか、然らば実業人は速かに農業者を招じて集會を催すべし。唱歌、歓待、ねんごろに語り合う間に、主客は自から知識を交換し、そこに必ずや相互の諒解親善は期して待つべきものがある。

ロータリーは大都市においても看過すべからざる勢力となつてゐる。即ち大都市の常住者に在つては、教会、商業会議所、各種の社交機関、旅館、ゴルフ・クラブ、商工業者の組合、学校関係の団体等々、およそ人の集合する所ロータリーの勢力を認めざるを得ないであらう。

たとえ小地方といえども、僅かに五十人を以てよくその地の品性を一変せしめ得るであろうか。然り、よし一人の力を以てしても改良は可能でありまた改悪もなし得る。もし一人の社会指導者にしてその家庭生活の不純なるものあらば、直ちに多数人の見習う悪の模範たるべく、もし彼の生活が社会奉仕をむねとするものならば、彼の都邑は住むに著き楽土と化すべきであらう。

ロータリーの活動は公私の両面にわたる広汎なる奉仕の全野をおおうものであつて、個々クラブ員は各自独特なる嗜好と傾向とに従つて適宜なる奉仕を選択し得るものである。是認せられたる諸種の活動の全体に向つてその身を捧げると言うようなロータリアンは、或は多く見ることは出来ないかも知れぬ。しかし完全円満なるロータリアンは必ずや最良の市民にして、その郷土としてゐる社会の至宝たるを失わない。そしてロータリーの指導者といわれる程の人は大抵この種の人材である。

完全円満なるロータリアンの関心は常に次の諸項にあるのである。

第一、クラブ奉仕——所属クラブの会務に関する事項

第二、職業奉仕——所属業界の倫理的向上に関する事項

第三、社会奉仕——所属社会の福祉増進に関する事項

第四、国際奉仕——国際的親尊理解の助長増進

エディンバラのステフェンソン博士(Dr. Stephenson)は曰く、其個の目的は唯一つである。それは人生を支配する最も適切なる原動力として奉仕の概念を発揚することであると。現在われらが目的と呼んでいる若干のものを、彼は唯一の目的を達成するための手段方法と考えているのである。国際ロータリー書記長ペリーは、奉仕を以てロータリーの基本大道となし、四個の主要機能はその基本大道を構成する通路であるとなしている。

世界大戦の惨禍ほど国際親善の切実性を強調したものはない。国土と国土とは舷々相摩し、しかも将来再戦の危惧が常に念頭を被うヨーロッパ諸国のロータリアンにとっては、その活動の緊要性はいよいよ益々大であるといわねはならぬ。

ここにロータリーは一大難事の解決に向う新らたなる接近の道を提供する。即ち奉仕の大理想の上に堅く結合したる実業家職業人の全世界的友誼である。靄々たる友愛の世界にのみ幸福は存在する。共通一致の理想即ち奉仕の理想に基いて結び交わしたる世界的なる人の和は、これ実に靈感的

なる威力にはあらざるか。かかる親和の前には如何に大なる事柄も可能でなければならぬ。即ち国際的理解親善も、世界の平和もそれである。

ロータリアンがロータリーによつてあたえられ、今やその掌中にある国際親善増進の努力に参加し得るの機会は、いかに貴重なるものであることか。この努力の中にはおよそ偉大なる運動の本質的な要素の総べてが含まれて居る。曰く理想を追う希望、曰く該博なる認識、曰く広大無辺なる自由精神であつて、これ皆なロータリーの精神的內容に符節を合するものならずや。仮りに著者がイギリス、フランス、ドイツ、ベルギー等のロータリアンと全く同じ経験を以てロータリーの人となつたとすれば、著者は恐らく親善の一目標を視野の全面に拡大して、他の一切の目標には盲目同様となつたかもしれぬ。

これに反しもし著者が産業生活において惨たんたる経験を有する者であつたならば、当然その思想と関心の総てを挙げて、この嚴肅なる業界向上の問題に集中せざるを得なかつたであらう。そしてロータリーは実業家および職業人の団体としてこの間清を取りあげるに最もふさわしきものなりとの意見が著者を支配したであらう。

また不幸なる人々に対する同情に溢れる慈悲心を持ち、エリコへの路上における善きサマリヤ人の如く、行きて倒れんとする人々を起して救助の手を下す数千のロータリアンがある。また或いはロータリーの最大なる効用は、来らんとする次の時代の責任を背負う若人のために、その生活方針を教導する所にあると信ずるロータリアンがある。著者の立場はその何れをも考えず、またこれを批判しようとするものでもない。

各種類の奉仕の支持者は齊しく誠実であることを著者は衷心より信じている。同時に進歩の大敵である無関心という罪惡に陥らざらんことを怖るる著者は、ロータリーがその高く掲揚する「奉仕第一、自己第二」主義を能く実行するか否かの問題に対する程に、奉仕は何れの種類のものを選ぶべきかの問題には余り関心をもっていない。いやしくも有用なる奉仕である限り、それが如何なる種類のものなりともこれに反対せざるものである。けだし会員の個人的傾向とその土地の事情とに最も適合したる行動を慎重に選択せんとすることが、現在のロータリーの大方針であつて、この方針に順応して行くことが、最良の結果をあげ得るゆえんであると著者は信ずるものである。

全体的一致ということは余り広汎にして予期し難いところで、もしロータリーが自らを最も善く活用し得べき途は如何と問わば、恐らく十五万ロートルアン中の唯二人の間においてすら答案の全面的一致は望まれないであろう。人の心の異なることその面の異なる如くである。思惟の影は色の影よりもはるかに多種多様であり、これを變化せしめることもまた至難である。人の確信はその氣質、遺伝性、環境、経験等幾多要因の影響が相寄つてこれを形成するものなるが故に、指導者たる者はあくまでも寛容に、大度忍耐を以て事の判断に従う用意がなければならぬ。独断的なるロータリーの主張は所詮無益である。

各種各態の奉仕行動に関する比較計量の問題は、長くがくがくと議論されて来た。ロータリーの牧犬が群羊を所定の牧場に導こうとして、或いは誘い或いは追つたりして大童の奮闘を続けている間に、羊の多くは彼ら自身の好む草原の選択を事として止まなかつた。かかる状態を眺めて、彼等をその好む所に解放したらんには、果して何処に駆去るであらうかという懸念が発生してきた。アメリカの大都市においては、再び一九〇五年の発足点に立戻つて同氣相よる友愛の空氣に浸り、ただそのみに満足せんこ

とを願うロータリアンも少くない様である。類をもつて集まらんとする本能は原始的なるだけに、往々他の一切の考慮を遮断する。そしてそれはセメントの如くロータリーの内にも凝結しているのである。ロータリーも他の運動と同じく指導者なくして行き得るものではない。

商業会議所においてもその他いづれの団体を問わず、目的達成のためには常に時と努力とあらゆる手段とを尽すの決意を要する。比敬的少数の意志強固なる献身的指導者の努力によつてその成績は挙げられるのであつて、それは一つの時代相である。思慮ある指導者は多数者のために最善のものを完成せんとする着眼より、各員の傾向と要求とを具さに研究する。

ロータリーに参加することは無益ではないと知るならば、そこにロータリーから受ける少なくとも或る利益はあるのであつて、またこの運動の爲めに働くことの満足が生まれるのである。ロータリアンがクラブの例会に毎回規則的に出席するのは、そこに交友和親がよく彼の生活に豊かなる潤沢を与え、提供せらるる教養上のプログラムが能く彼の知的並びに道徳的向上に役立つことを認むるがためである。一定団体の目的を認識することは、その団体を支持し讃仰するに至る前提条件である。商業会議所或いは

慈善事業団体等の尺度を以って量る時は、ロータリーの成果は或いは不満足なものたるやも知れぬが、ロータリーの尺度を以て前者を測定せば、その答えはまた同じく不満足なものであろう。しかるに十分なる予備知識を有せずして、或る目的またはその成果に、そう卒なる判定を下さんとする人がはなはだ少なくない。

ロータリーは各種の産業団体または慈善事業団体の分野においては、それらと地歩を競い得るものでないことは明らかである。またロータリーはその目的の範囲を超えたる事柄に関しては無役であつていささかも差支えない。

ロータリーの目的の主張は勧告であつて禁制ではない。消極的でなくして積極的なる生活のしようようである。もし会員が称讃せらるるとせば、これひとえに彼等の実際上の行為によるものであつて、決して彼らの言語によるものではない。

今日までロータリー・クラブの関与したる社会奉仕の種類は次のごとくである。

評議委員

社会奉仕事業の協同企画。

通則として各種団体の代表員を交ゆる共同構成である。

体育運動

ハイ・スクール体育の向上及び体育方法の整備を計る。

航空事業

空港、非職業技術者養成等の諸問題に参画。

学生監督

学業奨励の運動。

音楽団援助

資金援助及び発達助成。

都市美化運動

青年隣保運動

盲人救済

少年団

少年クラブ

少年生活研究

キャンプ

新鮮な空気、結核病予防、不具者の設備等。

商業会議所

設立運動。

慈善事業

共同機関の設定、救済資金の募集、職業紹介所及び公衆食堂設立等の提唱助成。

公民教育及びアメリカ主義運動

公共的改良事業

火災防止、交通規則、市町村奉仕、区画整理、公課金低減等の普及助長。

ハイ・スクール学生倫理規準設定運動

社会財団

その新設及び寄贈勸斉。

社会住宅

特に年少者或いは無援の外国人の集团的住居に適する宿泊所の施設。

社会指導

指導者クラブの組織。

社会調査

社会事業諸機関、交通制度、財政、学校等の調査。

不具児童救済

青年交換

海外との学生交換、青年観光団交換。

課外教程(小学児童)

弁説または作文競技、安全第一運動等。

保健運動

公衆衛生、歯科知識、純良牛乳、看護方法等の唱道。

四日クラブ

趣味交換

病院及び臨床講義

普通教育普及運動

少年犯罪救済

少年審判延における助力、事件の調査、赦免囚の保護。

図書館

一般図書館及び学校図書館。

雑事業

歌唱競技、公衆祝賀運動、音楽祭等の発起参画。

映画

優良映画運動。

育児

昼間育児所。

公園及び遊園地

慰安施設

青少年に対する社会慰安施設。

都市田園接触運動

学術奨励

学生援助

学費の取得または借入に関する援助等。

学費貸与基金

水泳プール

無援児童救済

青年職業指導

キリスト教男女青年会

以上の諸事業に関してはいずれも少からぬ好結果を挙げて来たことであるが、同時にそれは他の目的に役立つている。即ちこれが為めに総合的実験を大成することであつて、個々の成功程度が自ら段階を示すことにより、取捨選択の結果或る物は今後も継続反覆せられ、また或る物は廃止されることになるのである。ロータリーの帰着すべき最善なる適所は果して何処にあるか未だ全く明示されていない。我等は捲土重来進んでそして退いてはならぬ。

フランク・ラム著『実業家の見たるロータリー』第一頁より下の言葉を引抄する。

「六人のインドスタン盲人が象を見んとしたお伽詩噺がある。第一の盲人は象の大きな硬い胴を撞いてみて、象とは壁のようなものと呶った。第二の盲人は象は槍のようなものと喊いた。彼は象の牙に触れたのであった。第三は鼻を撫でてみて、象は蛇のようなものであると断言した。第四は太い脚の一本をなでてみて、象は立木のようなものだろうと言いつつた。第五は偶々耳に触れ、象というこの珍らしい動物は団扇によく似ていると主張した。第六番目は確信を以て象とは綱のようなものであると言いつ切った。彼は象の尾を掴んでいた」。

Andso these men of Indostan

Disputed loud and long,

Each in his own opinion

Exceeding stiff and strong,

Though each was partly in the right,

And all were in the wrong,

—John G. Saxe. (註五三・五四)

「ロータリアンの中には、この喩の盲人に似ているものがある。ロータリーの特定の目的、特殊の行動、または或る成果を捕えて直ちに本質的なかの如く思惟し、敢えてこれがロータリーであると声明する。かくて各々ロータリーの本質的な点を見出したと称し、または或る行動を重視もししくは或る所産にのみ深い関心を有するとうかがうが如き事實は、以てロータリーの全体を知るの料とはならず、反つて然らばロータリーとは何かという議論を引起し、インドスタンの六盲の如く断定的強弁的論争を喧しくすることになる。」

註五三

これらインドスタンの人々は、それぞれの意見を主張して、声高く長い間わめき合った。各人それぞれ少しずつ正しいところはある。しかし全体的に言えば、みな間違えているのだ。

—— ジョン G・サックス

註五四 John G. Saxe シモン・G・サックス(1816-1887) アメリカの詩人。

ロータリーの国際協議会(International Assembly)は毎年会計年度の始め七月に開かる。

この協議会は国際ロータリー役員及び理事、地区ガバナー(又はガバナーエレクト)、国際ロータリーの委員長その他の同役負を以て成る。以上の出席者によつて一般計画が討議され、その結果として同年中におけるロータリー運動を奨励すべき最善の方法を案出す。

次で地区ガバナーは区内全クラブの役員を召集し、前項の国際ロータリーの計画とそのクラブの発展に閑し協議をなす。

各クラブの執行者は又そのクラブの役員及び委員長を会して地区ガバナーより受けたる注意考案等を伝うるものとす。

X 挑戦

ロータリーがよく現在の地位にまで進歩し来った過程は、一の興味ある団体發展史を形成している。ロータリーの効力は約八十の国民により時と場合を異にして色々に経験された。かかる優れたる發展は、ロータリーが最も早く出来た比較的少数諸国のロータリアンが捧げた努力の賜物であつて、他の諸国における發展の起りは皆これよりしたものである。もしロータリーが今日のアメリカ、イギリス、及びカナダにおけるが如く、他の諸国においてもそれがあまねく国中に盛んになつたならば、その成果の規模は果して如何なるものを見るであらうか。

ロータリーとその類型を追う他の諸団体との發展は現代における最も注目すべき社会的發展現象の一として社会現象研究者の考察の対象となつてゐる。しかり現代はチェスタートンがこれを諧ぎやく的に名付けて「このロータリアン時代」と呼んだ程である。そもそも顕著な事態は如何にして到来したか、そしてまたロータリーの一業一會員限定制度は、正しき良心

を以つて飽く迄も是認し得べきものであるか。

多くの人々はこの限定会員制度を以つてロータリーを他と區別せしむる特徴であると考え、また多数の局外者からはそれがロータリーの全部であるとき見え見られてゐるようである。恐らくはこれ彼らのロータリーについて知らんと欲する総てのものであるかも知れない。

外部の人々と共にロータリアンの中においても倫理情操の強き人々が、今日までにこの限定会員制度の城壁を攻撃して暴風の如き殺到を試みてゐる。この制度はクラブ員の実業が自然の水路に向わんとする事を妨たげ、強いてクラブ内の小さき水溜りに誘導せんとする利己的目的以外に、果して何の目的に役立つのであるか。かかる構成のクラブなるものは「汝は余の背を搔く搔け、しからば余は汝の背を搔かん」式のグループたる以外の何者であり得るか。何故更に大いに門戸を開放せざるか、ロータリーは民主主義的だと呼びかけてゐるが、会員を一実業或は一職業毎に一人と限定するが如き団体の何処に民主主義が存在するか。これをしも民主主義なりとせば、知らず何処に専制主義なるものありや。若し教会がその所属信徒を一業一人と限定したりとせば、キリスト教は何処に行くべきものなるや。

ロータリーは奉仕を主張すると一般に想像されている。然るにこの制度の何処に特殊の奉仕なるものが表われているか。もしロータリーが汝に善であるならば、何故に余に善ならざるを得るのか。以上の如き非難に対すると同時に、なお答えざるべからざる他の攻撃がある。それはロータリアンが各種の実業職業を代表するのは如何なる権利に基くのであるか、何人が彼等を代表として選出したのであるか、彼らの熱愛するロータリーは誤れる基調を承けているものではないのか、もし根底に誤謬があるとすれば、それはやがて崩潰すべき運命に在るものではないかというのである。

紛々たる以上の如き諸説は、きつ然立って如何なる暴風にも当らんとする根強きロータリアン——大部のロータリアンがそれである——に対する挑戦である。それが既に反覆押寄せている難題であるとすれば、何時までもこれを雲煙過限視すべきではない。要するに反ロータリーの所見は、限定会員制度を以って高尚なる主義主張を標榜する団体の致命的欠陥の暴露に外ならぬとなし、以ってその団体には頗る偽善の臭味の存するものと考えるのである。

ロータリーに対する世上の関心がいよいよ広まり行くに鑑み、シカゴ大

学は所属の優秀なる青年社会科学徒を選抜してロータリー研究の委員会を組織したのであるが、同委員会は此の程シカゴ・ロータリー・クラブについてその調査を遂げ、『ロータリーとは』なる一書を修めて世に発表した。同書はロータリー研究者の必読に値するもので、殊に限定会員制度を考察する上には大なる参考となる。今最も興味あるこの問題に關して同書の報告する所を見るに、大略下の如くである。曰く、初期より今日に到るまでのロータリー文献にして入手し得たるものは総てこれを精読し、更にシカゴ・クラブ現在の全会員に対して、入会の動機その他適当と認めたる諸案件を提示して回答を徴したる結果、帰納せられたる結論は次の如くであった。即ち過去は勿論現在のロータリアンといえども、その初め何等かの個人的利益を予期せる動機により入会したものであつて、その個人的利益は原則として、過去においても現在においても各自の実業職業上にもたらさるべき結果の中に予期せられているのであると。

しかれども彼らの結論は限定会員制度が利己的であること、或いはそれがロータリーの最高目標たる「奉仕第一、自己第二」と両立し得ないことを断定するものにはあらずとなし、更に続いて曰く、もし利得の意志が加

味されている集団の総てに対し利己的との烙印を押しにおいては、惹いて実業構成ないし社会組立の全建築から基礎的支柱を取払おうとすることとなり、その愚に失するは言をまたざる所であらうと。かくの如き論拠よりして委員会は一つの勧告を呈している。曰くロータリーは宜しく以上の如き弁明を以て運動を継続すべきであつて、その運動は現在能く合理的に遂行されているけれども、なお改善を加うることによつて一層有効なる団体に化し得るであらうと。この懸けはなれた見解に対して、多くのロータリーアンは且つは憂い且つは喜ばざるを得ないことであらう。

ただし業務上の利益の予期が、今後ともロータリーに参加する理由たるの地位を保持して行くであらうとの見解は、全然正こうを失しているといわざるを得ない。ロータリーアンは寧ろ「星に向つて事を繋ぎ」続けるであらう。星は純粹理想主義がそれである。これに向つて高く昇り得るものあるやも知るべからず。利得予期がロータリー・クラブに入会の動機として認められていたとすれば、最も優秀なる会員の多くは疾くに四散して留まるものが無かつたことは火を見るよりもあきらかである。もし一段と現実主義を加えんとならば、前線の会員を後方に移動せしめることよりも、後

方の会員を前線にたたしめる事によって目的は達せられるであろう。彼ら名誉ある大学委員会の人々はその職務の性質よりして当然「奉仕第一、自己第二」の道念を本来の人生觀に蔵すべき筈である彼らが、実務家ロータリアンが同じ道徳水準に向上せんとする企圖に対し、反つて懷疑的であり得るといふことは著者の驚きとする所である。

かつて一九一三年にシヤトルの一会員が自らロータリー拡大運動を志し、ロータリーの中より限定会員制度を削り去ろうとしたのであつた。当時この限定会員制度を捨てて非限定制度を採用せんとする計画が、果して会員の間如何なる反動あるかを知らんとせる数名の指導者が、これがため全会員の意向を調査したる結果は、塊状維持の主張が圧倒的に有力であることとを明示したのであつた。しかれどもこれを以て完全に限定会員制度の妥当性を立証するものと論斷することは許されないであろう。何となれば現制度賛成の意見には十分なる思索的分析を欠くものがあるかも知れず、或る場合には利己觀念の表現であるかも知れぬからである。

先ず一業を代表する一會負は、如何にしてその業界の代表者として選ばれているかの問題を考へてみるに、これに対して第一の回答を試みたるは

アラバマ州、バーミングラム・ロータリー・クラブの思想委員であったが、会員はその属する当業団体がロータリーの為に出せる当業代表員にはあらずして、ロータリーが当業団体に派遣しているロータリーの代表員である。一定業界の政治的支配機関による公式の任命なきものを、その業界または当業団体の代表員と推定することの矛盾せるを看過し、有利なる解釈を下して、それはロータリーからの派遣員であると共にロータリーへの派遣員でもあると主張しているのである。

現在の制度においては総てのロータリー・クラブは、新たに会員たるの資格ありと認むる候補者をクラブ理事会に推薦するの権利を有する。理事会がこの推薦を入会者銓衡委員に移牒すれば、同委員会は候補者の一般的人格及び職業上の状況を仔細に調査し、申込の業種が果して他会員の職業と重複せざるや否やを慎重に検討する。かくて調査研究の結果支障がないものと決定すれば、当該申込は改めて理事会の処理に移され、適当なる時期において候補者に対する投票が行なわれるのである。故に現在の実践上理事会の裁定する個人は、ロータリーがその会員中において、一定業種の代表者として包有せんと希望する人物であるという結果になるのである。

即ち代表とはロータリーの特殊の目的よりせる代表であつて、またロータリーはこの資格を与うるものではなく暫くこれを仮すのである。会員にとりては右の如き意味の外公式に当該職業界を代表するものでないことは勿論である。

思うに各クラブはこの限定会員制度によりて成功を見ており、そして現在の如き会員の高き出席率が他の方法によつてもなお可能であつたかは甚だ疑問である。由來実務家は仕事を放擲してクラブの会合に出席することの困難なる事情を多分に有するものである。ここにおいて多くの団体にあつては三割または四割と言へば良い出席率であり、僅かに一割であつてもまた可なりである。

然るにロータリーにおいては、平均出席率が七割に達せぬクラブは資格に不足をきたしたるものと考えられている。平均出席率が高くなければ重要な目的を遂行し得ないのがロータリーである。最も優良なるクラブとは出席成績の最も良好なるクラブである。例えば二百五十名の会員を擁し、年五十二回の会合を連年継続する間、常に九割五分余の平均出席率を維持する如きクラブは、眞のロータリー・クラブであつて必ず多部門において

成功する。

しかしこの点も問題の圏外におかるべきものであるかも知れぬ。即ち一クラブの目的遂行上の成功は、高き平均出席率の上に依存し、高き出席率は限定会員制度の上に依存するとしても、なおそれが限定会員制度の妥当性を保証するものではないと言ひ得るであらう。

実利的方面の觀察はしばらくおき、専ら道徳上の問題としてのみ考察する時、この限定会員制度の立場は如何なるものであらうか。もし限定会員制度が非道徳的であるとすれば、それは会員を制限するというからであらう。著者の見る所では、この制度は決して制限的ではない。即ちこの制度はその設けなき場合よりも一層多数の人間を包容し得ると考へるのである。会員の選択に秩序を保つことはこの制度の効用であつて、或いはそれが一人に対して門戸を閉ざすことありとも他の一人に対してはこれを開放し、時には二人に対して開放する場合すら少くないのである。

更に問題を他の側面から観る。世上には会員を一職業又は一実業の人にのみ限定する団体が多数存在している。それらの団体はいずれも現代の社会において齊しく重要な役割を果して居る。即ち一定職業または実業に

従事する人々がこの種の組織によつて集合し、互いにその思想または経験を交換して共通の利害問題を検討する。かかる団体が特定の職業または実業に従事せざる人を除外するからといって、これをもつて制限的又は排他的と考えることは不可である。そのこれを除外する所にかかる団体の成功は依存するのである。医師の団体に製造業者または商人を参加せしめよと勧告するならば、何人もその不当であることを認めるであらう。医師の団体の成功と有用性との約束は、むしろ医学を解せざる人を除外する所に依存するのである。

医師は同僚の医師と接触することによつて大いに利得するといへ、医師以外に社交の相手を知らざるものは無為の人間となつておわるのである。人は自己と異なる多くの職業や事業に従事する人間との接触によつて広くその影響を受けなければならぬ。先ず教会及び社交クラブにおいて或る程度の接触を求め得るであらうが、これらは未だ特殊の必要を満足せしむる如くには組織せられてはいない。一たびロータリー・クラブに入会するならば、広くかつあらゆる職業の人間と接触するを得てあくまで利便を味うことが出来るのである。

しかしロータリーの成功は単に限定会員制度の依存にかかるといのではない。仮りに限定会員制度が無かつたとしても、ロータリーの成功はお相当の程度に保持せられたことであろう。それはロータリーの教義の中には、多数人を吸収し結合せしむるに足る刺戟的勢力を包蔵しているからである。他利主義者(The Altruists = All True Rotarians)なる一団体が成功している事実の如きは、その一立証と見るべきである。即ちアルトルリアンスは、かつてロータリアンであつたがやむを得ざりし理由により、ロータリー会員たるの特権を失いたる人々により組織せらるる団体であつて、前ロータリアンたる資格あらば職業には一切関係なく入会を許すのである。アルトルリアン・クラブは、ロータリーの諸理想を忠実に支持するものであつて、また一つの国際的組織をも備えているのである。

ロータリーの友愛その他諸教義を敬愛する同気の人々が結合して、かかる団体を形成しているという事実は、そうした運動の価値を自から証明する最良の事蹟であろう。彼らはあえて大宴会場に進み出ようとはせず控える席に満足しているのである。アルトルリアンに恵みあれと！　こそ祈る。しかし彼らは必ず常に沈黙を守るものではない。彼らの希求は何時か或る

物を招来するであらう。

限定会員制度は、ロータリー内外の道義人が要求する恩沢を広く実業界、職業界の大衆に均分せしむるの可能性を有するものである。

即ち職業別会員制度における各職業の代表者は、ロータリーと自己所属業界の同人との間を連れいすべき一種の義務を負うものである。ロータリーの機能は同業団体なき所にこれを成立せしむると共に、各種の同業団体の内部に浸透してその全員の間に高尚なる道德水準の設定をはかる。

著者の信ずる所によれば、皮相的觀察者の眼に制限的と映ずるものは実はその反対である。即ちロータリーの諸目的を完成せしめ、多数者に最大量の善を提供すべき最高手段の一つは、限定会員制度の遵守である。更に著者の信ずる所によれば、ロータリーはこの上限定会員制度の問題の研究に拘泥する必要のないのである。

かくいう著者は低個主義ではない。有用性と実現性とを備うるものならはいかなる革新思想にもあえて賛成を惜むものではない。むしろ将来のロータリーは、現在行なわれている手段の外なお多くの方法を採用し、もつて実力の伸長に努めねはならぬと信ずるものである。

ロンドンのロータリアンはロンドン市地区内にあまたのクラブを複製することによって、この問題を一応満足に解決した。現在同地方には六十個のクラブが存在する。

ロータリーが模範を示したる結果としてキワニス、ライオンズその他同種類のクラブが出現し、彼らまた独自の立場よりロータリー同様に高尚なる目的を標榜して立っている事実にも、著者はすこぶる満足を感じるものである。

オーストラリアにおいてはロータリーの教義に則って設立せられたる一個の青年運動が着実なる進行を続けている。そしてこの運動もまた他の諸国に広く伸展せんとする強い大望を抱いている。

また多くの都市においてはロータリアンの妻、娘、母がロータリーの真実に感銘して彼ら自身のクラブを組織し、現に慈善事業において有益なる奉仕を提供しつつある。この種婦人運動は今日までイギリスにおいて最も有力に発達し、その数すでに百になんなんとする同国の婦人クラブは、早くも国内的単一体への大同団結を完成して、今や属領各地に向かい伸展の歩武を進めつつある。著者は確信する。家事以外に時を割愛し得る婦人は

よろしく他の婦人と接触するの機会を作るべきで、婦人に対するこの必要は、男子が他人との接触の機会を増加せんとする場合よりも一層大なるものがある。ただし男子は職務上の必要から自然他人と接見する機会を豊富に恵まれ、その間社会的修養もおのずから積まるものなるに反し、婦人は多く家庭に留まる関係上かかる機会を奪われている。もし婦人にはと角他の非難排斥を事とする癖があるとすれば、それは彼らが同性接触の経験にとぼしきが故、男子にありても社交の経験に富まざる人は徒らに疑惑を事とし他に近づき難いものである。婦人とても出でて実社会に働いているものは、一般に猜疑心が少なく、見解も広く理解も優れている。

すでに婦人実業家及び職業婦人は、彼女らに対するロータリーの開放運動を相当力強く行っている。かつてアスター夫人は彼らを代表してイギリスの或るロータリー大会に現われ、その懐抱する強い希望につき訴うる所があった。まだ今日までの所では婦人のロータリーに仲間入りをしようとする運動は成功してはいないが、ロータリーの教義はすでに十分体得している。即ち彼女らは彼女ら自身の若干の団体を強化し拡大しているのである。

かくて著者の大いに期待する所は、現に存在するロータリー型の各種の団体がよいよますます増加して行き、遂に時機は到り、奉仕の理想を十分に吸収したる有らゆる実業職業の男子、婦人及び青年を一堂に抱ようする如きクラブの出現せんことである。

チェスタートンの「このロータリー時代」なる語を案出した時は、正にかかる事態に似たるものが脳裏に描かれたためではなかつたらうか。ロータリー及びこれに続く姉妹団体のかくも目醒しき発展と成功とをもたらしたる最も根本的なる理由は、万人の胸底に齊しく道徳的交友の希求が存在するというの事実に帰するものではないか。ロータリーの教義は万人の承認し得る倫理基調を提供するものであることは、各種の信仰を有する人々において先ず承認する。これ彼らはすでにこれに帰依する人々なるが故である。宗教には一切関係なき人々もまたこれを承認し得る。何となれば彼らはこれが必要とする人々なるが故である。ロータリーはこの教義をして日常生活の如何なる部面にも活躍せしめ得るものたらん事を企図するのである。

ロータリアンになるということは、何等かの宗教的信条の採用を必要と

するものでもなく、またその破棄を必要とするものでもない。何人もロータリー・クラブの会員となり、同時に教会に向つても全的に傾倒し得る。ロータリアンたるの地位はその人の躬行実践に属するのであつて、彼の宣明する信仰にかかるのではない。彼がなすべき事を喜んでなさんとする意志を有する限り、彼はアメリカ人たりヨーロッパ人たりアジア人たるは問う所にあらず、プロテスタントも可なりカトリックも可なり、ユダヤ人たると非ユダヤ人たると、モハメッド教徒たると仏教徒たるとを問わない。社会の関心はこの社会に民族、信仰、政治思想等を異にする人々が幸福なる友愛圏を形成して、共に相捷携し得る天地の出現せんことを希望するにあるが故に、ロータリーは自ら進んでかかる天地を作り出そうと提議するものである。幸にその努力の永遠の結果として人間が一層寛容自由の精神を發揮することが出来れば、ロータリーの存在は終に無益には終らぬであらう。

ロータリーは決して宗教でもなければその代用物でもない。それは古くより存在する一道徳観念の現代生活における、殊に実業職業生活における実践に他ならぬのである。

X I

奉仕の理想の意味

Work's a grand cure for all the maladies
and miseries that ever beset mankind—
honest work which you intend getting done.

—[Thomas Carlyle. (註五五・五六)]

奉仕の理想とは何を意味するか。『ロータリーの意義』(Meaning of Rotary)の著者はこれに関する種々なる言説を引用している。それぞれ言葉は異なるが精神は一つである。

エジプト人曰く「己の欲する善を他人の為に求めよ」。ペルシャ人曰く「汝施されんと欲する所を施せ」。仏陀曰く「人は己の為に欲する福善を他人の為に求むべきものなり」。孔子曰く「汝の欲せざる所を他人に施すなかれ」。モハメッド曰く「何人も己の好まざる如く同胞を遇すべからず」。ギリシヤ人曰く「汝隣人より受くる時悪となせることを隣人に受けしむる

なかれ」。ローマ人曰く「自己を愛する如く社会の全員を愛すべしとは、万人の心底に銘せらるる法則たるべし」。ヘブライ人曰く「何事にもあれ汝隣人の施すことを好まざる所を隣人に施すなかれ」。最後にナザレのイエス曰く「汝他人より与えられんと欲するすべてを他人に与えよ」と。

奉仕の理想を奉ずる人々は、富は正しき用益を有せぬと信ずるものである。答は言うまでもなく否定である。ロータリーの概念する奉仕の理想とは、著者の理解する所にては物の過程の最初に奉仕を置くものである。換言すれば奉仕の理想を標榜する者は、受くべき物質においてせずして先ず与うべき奉仕に着眼すべきである。物質を眼前に近く置けば見透しは困難となる。そしてその最も愚なる方法は金銭に集中することである。

多くの専門職業に従うものの奉仕がその注文に対して引合わないことがある時、他方においては、法律、医学及び神学の学生は、その従事する職業には必ず遵守すべき義務の付随するものなることを教えられているのである。弁護士は正義の支配下にある法延に仕うる公人であることを記憶せねばならぬ。医家は何よりも第一に人類の公僕であること、宗教家は神聖なる受託者であることを記憶せねばならぬ。

弁護士は法廷の要求に答えて無一物の囚人のためにも無償にて弁護の勞を取らねばならぬ。医師は支払能力なき患者のために時間の若干を提供せねばならぬ。宗教の伝統は富貴と貧賤との差別を禁じている。その他の職業ひとしくそれぞれの義務をおうものである。

最近、三年間も継続した複雑なある事件に関係した一青年弁護士は著者に語つて、「それは実に興味深い事件で、必要あらば余は無報酬で喜んで引受けたらう」と言ったことがある。そもそも法曹の伝統はここにあつて、それが事件の判断を可能にするのである。この青年弁護士は実に彼の職務に愛着を持つのであつた。もし万人がその職務に愛着を持つならばその結果は如何に驚くべきものであらうか。奉仕の理想は速かに実践の舞台に登場するのである。

動物愛護会は犬、猫、猿、モルモット、鼠等を実験材料に供することにひんしゆくを催すであらうが、医学から見ればそれは科学の進歩により十分に正当化せられる。かく考うる医家の誠実は疑を容れない所であつて、彼らは時に自身の上に実験を試み、為めに生命を危険にさらし或いは犠牲に供することすらある。若し「奉仕第一、自己第二」の教義は実行すべく

余りにユートピア的であると考うる人あらは、医学界のかかるかぐわしき事実を想見すべきである。

医学の実践及び法律の実践は古き貴き過去の伝統に恵まれている。医学の父ヒポクラテスが後継者のために遺訓した宣誓は、今日においてもなお斯道の最高観念として真実に響いている。法曹界におけるユスティニアン(註五七)の標準またこれに劣らぬ理想主義の呼号であった。

「何人も敢えて怠惰たらんと欲せば限りなく怠惰たり得べし」と言つたエマーソンの心の絶叫は、容易にその芳醇を失わぬことであろう。

現在の職業訓練制度は、青年をして最も適せる職業を發見せしむることに着々効果を収めてきた。勤務に従う人々をしてその欲せざる事務より好む所に転換せしむることは、往々彼らの全人生觀に良好なる変化をもたらすものである。方今の進歩的企業主はよくこの事実を認識し活用していると思う。

著者は次の如き事実を記憶する。或る男が戸外の役目を好むに拘らず内部の事務につき、漠然日に夜を継いで奔走するも甲斐がなく、よく己が将来を考えたのであったが、半歳の後彼のために自然なる環境裡に立つて仕

事に励むことが出来、成功は暫くして彼の物となった。

職業指導専門家の所説によるに、合衆国の職業人中適材適所についているものは百人中僅かに四人に過ぎぬと言われている。此の説果して真に近しとすれば、これが改善は限り無き幸福の到来を意味するものであろう。

己の職務より何らかの示唆又は感激を受けざるものありとすればはなはだ憐むべき人間である。ガリレオ、ダンテ(註五八)、シェークスピア(註五九)、ゲーテ(註六〇)、パスツール、エディソン(註六二)等の人々は、総て心が物欲を離れていたのである。凡そ社会の幸福または理解の向上に資せる最高級の貢献というものは、もとより金銭的報酬を伴わぬものであった。即ち卓越せる巨人の作為は、皆これ奉仕の新原野を開拓しようとする熾烈なる情熱の鼓舞する所であった。メーテルリンク(註六三)の「青い鳥」は、自己を離れて奉仕から生ずる幸福を愉快に描いて居る。奉仕の生活は幸福の生活である。ここに一つの家庭に二人の子供があり、その一人は他の一人に仕えるように躑けられたとする。両親が意識すると否とにかかわらずその結果は仕える事を学んだ方が子が後年総ての福を享けることになる。奉仕の中にこそ幸福は存在するのである。限りなき人間の行動にはあらゆる種類

の奉仕をいゝる余地があるではないか。近年の名著たるハーグエー・アレ
ンの Anthony Adverse にも「自己を奉仕に没頭するまでは人生の終了を告
げるものではない」とある。

職業教育の専門学校は、人格が将来の成功を建設する最も信頼すべき基
礎であることを教える。すなわち成功は提供する奉仕の質によるといふこ
とである。

各都市、州及び国の法曹協会及び医師協会は、数年来悪らつ弁護士及び
不徳医師の撲滅に従事してきた。これ似而非業者の放散する腐敗菌を掃蕩
して業界をかく清せんが為めである。

法律と医学との実践は、善良なる良心をもつてあくまで誠実を保持せざ
るべからざる特殊の理由を有する。弁護士と依頼人及び医師と患者との関
係は、最も本質的なる信用関係である。依頼人が弁護士の勧告に従つて自
己の利益をよう護せんとすれば、その弁護士の手腕及び人格に満腔の信頼
を持たなければならぬ。もし手腕人格何れかにいやしくも疑念を抱く時
は、折角その弁護士に依頼したる目的は全的に齟齬せぬまでも多少毀損せ
られることであろう。もしかかる神聖なる信任を裏切る如き弁護士がある

とすれば、それは正に社会の敵であるがゆえに、監督官憲はその義務として適當なる手續を経て資格認可を取消さなければならぬ。

更に医師と患者との關係が含む信任は一層神聖でなければならぬ。義務感と利得感とはしばしば鬭争する。たとえば患者に不必要なる手術を施す外科医は悪魔に加担するもので、もしその事実が発見する時は彼には必ず烈しい現実の呪詛が襲うて来べきである。然るに外科手術が患者の要求ありし為めでなく、医師が金錢を要求する為めに行わゆる場合が往々にしてある。これは恐らく弁護士の場合に於ても同じであつて、即ち一定の法律行動が依頼人の利益をよう護するが為めの最良方法なりとせる理由に出でずして、彼弁護士が之に依り豊富なる礼金を収めんとする計画による場合が往々にしてある。

支那の風習によれば、患者は病中には医者に対し何等の支払をなさず反つてその無病息災の日に於て報酬をしようことであるが、以て他山の石たるを失わぬであらう。

専門職業に従事する人が他の実業家の知悉せざる難関に遭逢することがあるのは、その依頼者に反対する場合である。商業家は売らんと欲する物

品を顧客に提供するを拒むというがごときことなきも、専門職業の人々には往々にしてそうした場合がある。たとえば弁護士は依頼人が希望して進んで報酬を提供するという理由のみに依り訴訟手続を開始するとすれば、それは法律家の神聖な宣誓を冒瀆することになる場合がある。もし自分がこの依頼を拒絶すれば他の弁護士が引受けるであろうということを理由として、自分の引受けるのを正当と主張することは出来ぬ。弁護士は己が法廷に仕える公人であること、しかして法廷とは正義を確保する目的を以て公衆の支持する所であつて、決して不正義を為すためのもので無いことを忘れてはならぬ。適正なる条件の下に於て、罪を告発する為めに用うべきものが法律の機構であつて、迫害の為に行使すべきものではない。

宣教師は往々にして彼自身の教義を説くべきか、また彼の支持者の教義を提唱すべきかの岐路に立つ。己の見解を捨てて知識、良心、思索、祈祷の熱意に於て己に劣れる人々の意見に服従せしめんとする誘惑の、殆んど克服し難い場合がある。即ち彼は教団の利益のために己の指導的見解を捨てるか、或は少くとも妥協する場合がある。薄志弱行の宣教師はよろしく自ら信ずる所に従ふことの出来る他人に地位を譲つて去るべきである。

フランク・ラムは『実業家の見たるロータリー』に於てラスキン(註六三)の「名譽の根蒂」の一節を引用している。即ち軍人、牧師、医師、法律家及び商人に就き論じて曰く、人間は当然の場合にはその職務の爲めに死すべき義務を負う。軍人は戰場に於ける己の持場を去らんよりは死を敢てすべし。医師は疫病より逃避せんよりまた牧師は虚偽を説かんより、また法律家は不正に与せんよりはむしろ生命を賭すべきであると。商売人の所謂当然なる場合が何であるかは明示されていないが、これ商売人自身の決定すべき問題である。ラスキンは続けて言っている、商売人の利潤の取得はその機能に於て僧侶も大差はない筈である。報酬は固より付随物である、僧侶にとつても商人にとつてもそれは決して人生の目的ではないと。

政治家にとつての所謂当然なる場合についてはラスキンは指摘して居ないが、われらの見る所に依れば、彼らはその政治的城壁を築かんとするに際し最も強烈なる熱意を發揮するものなるが故、恐らくその時が彼らにとつての所謂当然なる場合であろう。

諸法曹協会及び医学協会の達成したる成果は決して一気呵成に出来たものではなく、多年に亘る強固なる運動の集積的結果である。

かかる専門職業人の協会と実業家の団体とが同列に立ち得ぬという何等か本質的なる理由があるであろうか。或る人は言う。「実業は法律や医学の実践と同時に論ずべきものではない。法律家及び医師の職業は個人的である。即ち何れも彼ら自身を考慮すれば足るが、実業家は数百数千の男女を使用する」と。

実業もまた専門職業化しつつある。カリフォルニア州政府が土地売買業の許可制度を規定する法律を施行して以来、無数の悪ブローカーは為めに一掃せられた。それから他の多くの州もこれに倣いつつある。

実業の性質には奉仕の理想に無感応ならしめる何物かが内在するであろうか。今や労働団体すら労働の尊厳を要求して居る。しかしそれを要求してはならぬという理由があるか。

著者は信ずる、将来の実業は非常なる熱意を以てその面目を保つことに努め、しかし不正なる実業家を法律職業に於ける悪徳弁護士及び医界に於ける不良医師と一処に高い木の上に追い上げずしては止まぬであろう。既に実業改善局 (Better Business Bureaus) なる名称の下に活動を開始して居る新機関は、如上の目的に副う有効なる事業をなしつつある。

ロータリアンは、彼らの実業は各自が社会に奉仕するために最良手段であること、しかして慈善の分野に於ては明らかに初年兵であるが、各自の実業に於ては彼らは専門家であることを自覚している。実業は甚だ手近かにあり、カムチャツカや南洋諸島を開発して住み良き世界を作らんとするごときことは、実業家にさ程必要ではない。それよりも雇用する人々の心に希望の火を点ずべき新たな方法を発見せんと努むることが、一般実業家のなすべき更に善き奉仕である。

世界は何人にも負う所はないが何人も生活を獲得すべき機会を得なければならぬとロータリアンは信ずるのである。ロータリーは会員が各自の業界の協同機関、特にその倫理標準の向上に尽力することを奨励する。著者は米国法曹協会、イリノイ州法曹協会、シカゴ法曹協会の会員にして、殊にシカゴ法曹協会に於ては二年間道徳向上委員会の委員長たる光栄を担った。その外シカゴ法曹協会の他の委員会の委員、ハーグ国際比較法規会議に於けるシカゴ法曹協会代表員、アメリカ法曹協会の国際委員等を勤めていたが、これ等の地位に依り著者はロータリーの奉仕の理想を業界に鼓吹すべき豊富なる機会を恵まれて来た。シカゴに於ける弁護士の数は一八千乃

至九千に上り、シカゴ法曹協会は業界の倫理標準向上に巨大なる足跡を印して来た。今日までに約三百名の弁護士が善良なる業務道德の遵奉を肯んぜざりしため、協会の規定によつて処分されている。ロータリアンは単に専門職業乃至実業界の団体内に於て活躍したるのみならず、多くの全国的新団体を合衆国内に発起し、また他国に於いてもその若干を建設した。奉仕の理想の運動にとり最大の障碍たる一事實は富の崇拜である。由来大なる人とは富める人を意味したことは一般世態である。大なる富を所有せざる者は小なる存在として止むの外なく、人類の福祉に対する貢献が如何なるものであるうともそれは問題ではなかつた。人の財産の高を知らんとする言表として「ジョンの価値はいくら位か」と訊ねるようになったのである。これに対し「彼は百万ドルの資産を持つ相だ」と答えればよいので、彼の等級は全くその所有財産によつて定まり、人間その物は毫も考慮に上らない。ジョンを最もよく知る人としてはかく評価することが、彼ジョンに対し決して不都合なる評価をしているものではないのである。

最近オマハのロータリアン、フレデリック・ジー・スミスとの会談の際、彼は衝動的に「一人人間は百万ドルという金の眞の効用を何処に認めてい

るのであろうか。何故に百万ドルは百万本のステッキ、百万本のネクタイ、その他百万の何物かの以上のものであるか」と著者に問うたので、著者は「習慣であろう」と答える外はなかつた。もし個人の価値をその所有するステッキの数かネクタイの数を以つて評価する習慣であつたとすれば、ステッキ工場またはネクタイ工場は昼夜三交替を以つて製造に従事せざるを得ないであらう。小児は懸命に砂山を築く。しかしこれは世の中に砂が乏しく貴重なるがためではなく、唯他の小児の山よりも自分の方を高く作りたい一心からである。小児は砂を積み、大人は黄金を積む。両者の動機には余り懸隔はない。望む所は単に所有とその支配権及び所有せざる者に対する優越感とに在るのみである。しかして両者の中少くとも一つの点に於ては小児の方が聰明である。けだし黄金の蓄積にはミダス王が憐れにも晩年に至つて悟れる悲しい経験があるが、砂山の堆積には後日の不愉快が残るようなことがない。財産獲得慾は奉仕の理想とは両立し得ない。

利得の感情が奉仕の後に従つたと言ふことが無かつたと考へてはならない。これもとより怪しむべきはあらずして、この教義は古くしかして依然たること山のごとくである。彼の奉仕の感情が視野の殆んど全面をおおつ

て、他の何物をも顧みなかつた人が古来多くあつたと言う事実が存する。スピノザは彼を礼讃し彼に感謝する弟子が千金の寄贈を申出た時立所にこれを退けた。この大哲学者は貧困が自己の高邁なる目的達成のために大切なるものであると考えたからであつた。

アメリカの或る雑誌はアインシュタイン教授(註六五)に多額の原稿料を提供して反感を買つたことがある。教授は「余を以つて懸賞勝負を業とするものとなすなかれ」と断つたというが、これは清廉なる人に共通の憤りである。また同教授はプリンストン大学から報酬額を通知された時にもこれを沢山過ぎるとなし、遙かに減額されない限り講師の地位を引受けられな

いと断つたのであつた。

或る者は言わん、かくのごときはその独自の天地に生きる偉大なる天才の場合であつて、彼らには自から彼らの報酬がある、われらの行つてこれを得なければならぬ場合とは全くその趣きを異にする。われらはこの世に一たび僥倖を逸すれば再び好機会に際会することなくして終るであろうと。しかし退いておもむろに考えるならば、よし天才にあらざる幾百万の男女の生活に於ても、奉仕感が支配的地位を占めて居ることを認識すべきで

ある。試みに思え、或る個人が巨額の資金を以つて購ひ得る物品に欲求を置くの時、彼は果してよく教育事業のごときものに志し得るであろうか。与うる所多くして受くる所少きに満足する学校教員のごときを想うべきである。

ここに拝金宗の競争者たる新たなる神が大衆に勧請され顕現した。近來は余り百万長者の噂を聞かなくなつたが、新たなる神が黄金の神よりも或点に於て悪魔の威力を發揮して居るのである。この新たなるものは反つて魔神でそれは耽溺であり快樂主義である。しかしてその方が前者よりも一層大衆の接近し易いものであるだけに有害である。百万ドルもしくは以下の少額にてもこれを積むに当りては不屈の精神と犠牲とを要するが、耽溺または快樂主義にはそれをなすことをもちいない、故に世の中には快樂主義者程簡單極まるものはない。小兒は年長者から求められると絵の講釈をする。小兒は相手が本心からこれを求める筈のないことを知らぬのである。更にまた快樂のために供えらるる無益の事物を崇拜することが一段と興味を以つて迎えられる。繁栄は憧憬されるが窮乏は悲歎される。逆境が偉大なる人格陶冶の母たること、強力なる国民は決して繁栄のうちに育まれ

たものではないことをわれらは忘るるのである。繁栄は精神的及び肉体的懶惰を生み、結局破滅の前奏曲となる。かくてこの事実の適例を示したる国民は古代ローマである。酷烈の氣候と荒蕪の土壤が住民の人格を建設したる事実の適例をなした郷土は、スコットランドとニュー・イングランドとである。年古り物の理合を識別すべき筈のわれらは、今なお大なる物質的繁栄を一切のものに勝さるとして、仰望して居るのではないか。

数学の奇才にして電気技術界の世界的權威たりし故チャールス・スタインメッツに対し、ロージャー・バブソンが次のごとく訊ねたことがあつた。ラジオ、航空機、動力輸送等の内、何れの分野に於ける研究が最も人類に貢献すると考えられるかと。スタインメッツは答えて、最大の貢献をなすべきものは次々に現われる發明そのものにあらずして実はその精神である。これすなわち人類を發展せしむべき最大の力であると。彼はなお続けて、人間は結局物質的には幸福を齎らすものでないことを発見するに至る。しかしてその時到来ば過去の世界が四時代を費せるにも勝さり、一時代を以つてそれ以上の進歩を遂ぐることを得んと。この偉大なる科学者の所説は誇張のごとく見ゆるも、スタインメッツは元來誇張的言句の使用に慣れず、

正確ということをも最も顕著なる特質とするのである。しからば精神力は何物を達成するかと言えば、それは必ず戦争回避の途を発見するにあるであらう。もし果して恒久平和の途が見出し得るとすれば、その上に価値ある発明がまた何処に求めらるることであろうか。スタインメッツは金銭を一つの目的に対する手段と考えた。その目的とは必需に対する支弁であったので、それ以上の金銭は高尚なる生活の途上には反つて障碍物たらんことを恐れた。如何なる称讃も及ばぬ程に貴重なる彼の奉仕に対して、彼は俸給というものを受けず、唯必要の生ずる毎に少額の資金を求むるに過ぎなかつたと言う。

植物受性学の天才故ルーサー・バーバンクは、他人のためには巨万の富を作ったが、自分のために残せるものは誠に貧弱に過ぎぬと著者に語ったことがある。

有史以来偉人中の最大偉人等がその言にその行に宣揚し来つたものは「奉仕第一、自己第二」なるスローガンの中に要約され得る教義である。誰か言うロータリーの目的は夢物語に過ぎずと。

ニコラス・ムーレー・バトラー博士はコロンビア大学総長としての或る

報告中に曰く、「人間の努力要求する目的が独り利得にあるとすれば、社会は必ず墮落に瀕し個人間、集団間及び国民間の確執は絶えず増大し、その終局は破壊であると。人々がよく利得感情の支配より解脱して利得を奉仕の後に服従せしむべきことを自覚する時、ここに初めて社会上、経済上、政治上の秩序は確固たる基礎と堅実なる持続性とを保ち、以って平和と幸福とを大衆の前に保証し得るの緒をなすものである。

大衆が確信を以って奉仕の感情を第一に置き、その後利得を従属せしむることが世界の商取引を益々發達せしむる所以なるを意識するに至らば、現在世界の各方面に蹠踞している革命思想は速かに滅殺せらるるであろう」と。

不正直で金を儲けるよりも反つて正直で金を儲ける方が多きことを覚えれば、人は正直になるに違いないとヘンリー・フォードは言った。これと同じく富から得る幸福よりも教養から得る幸福の方が大であることを悟れば、人は教養を取るに違いないと青い得るであろう。富と教養との価値の比較は、一九三二年の不況時、即ち「自殺年度」の或る米国大都市に於て最も明白に実証せられた。すなわちその十二カ月間に同市に於ける第一流の富

豪二十余名が自殺したにも拘らず、財産を有たない約一万の学校教員は、市財政の甚しき窮乏のため、無報酬にして働きながら一人の自殺者も出さなかつた。富対教養と言う場合となると富は第二位に落ちなければならぬ。

教員等は背後を支える健全なる人生哲学を有つて居た。これすなわちロータリーの奉仕哲学で、窮乏の中に彼らのなすべきことは前よりも更に豊富であつた。閑暇の時間があれば彼らは如何にこれを費すべきかを知つてゐた。すなわち交わるべき友人を持つてゐた。それは富に心を傾けた友人にはあらずして思想を共通にする友人であつた。

彼らの多くはまた他の種類の友を持つていたのである。或る者は森林に遊んで鳥禽と交わり、或る者は種々の可憐な動物と戯れた。彼らの興味は顕微鏡の驚異から望遠鏡の神秘まで森羅万象に拡充した。要するに人生は決して退屈とはならなかつた。彼らは倦怠を知らなかつた。彼らは決して人生の探険旅行を放棄しようとは思わなかつたのである。

ロータリーは共產主義は勿論その他一定の政治的結盟に加わるものではなく、会員を諸種の列序に於て包括するものである。ロータリーは政治の

形式に關し特定もしくは公式の見解を持つことは出来ない。ロータリーが關心を持つているのは会員は何をなすかと言うに在って政府に就いてではない。ロータリーは思想及び經驗の交換により、また個人的及び集团的に諸般の行動に参加協力することにより、この特殊の時代に於ける社会的重
要事項に關する会員の知識を啓發し、以つて会員をして一層聰明に善悪賢愚、並びに事の一次的なるものと永久的なるものとを弁別せしめんと企図するものである。

世の多くの父は、巨万の富が幸福を齎す齋らす手段として無益なることを彼自身の場合においては是認するに拘らず、なお子孫に幸福を齋らすため富の争奪を一生懸命に続け、子は常住親んで父と共に在ることが富より一層貴重であることを忘れて居るのである。父が子のためにすべき最良の遺産は最良の教育である。これすなわち其の子が独自の生活力を獲得する上に貴重なる機会を与えるからである。或る時二人の者が、大富豪の一人息子で優秀な青年の価値に就いて論じ合った。しかしてその青年は勤勉、礼讓、明敏等の種々の良い素質に恵まれていたのであった。二人の何れかが彼の青年を評価して将来大成すべき有らゆる資質を具えて居ると称讚し

たのであったが、これに反して他の一人は述べた。「然り、されども唯一つ欠けているものがある。彼は労苦を知らない」と。これをカーヂナル・マシーアの言を以つてすれば「労苦はこれを受けまたこれに克つことにより人生の地位を高めるものである。しかしてその結果として体得する沈着は、生涯を通じて高貴なる果実たることを最もよく証する」というのである。

これ実に至言となすべきである。およそ失望、懊惱、艱難、辛勞等に対し子供を庇護う父は、無意識の中に却つて人生最大の特典を防遏せんとするものである。多くの学生を監視する立場にある某大学の学長が最近述べた所に依ると、同大学の落第生の九〇パーセントは両親の放逸に基因するものであつて、それが逆境に在るがために落第の余儀なきに至つたものの数は反つて少ないと。トーマス・アークル・クラークは放逸なる父母の無慈悲を指摘する彼の持論を永久に捨てることを欲しなかつた。

もし大なる富の所有が子孫の墮落を導くものであるとすれば、その富の所有を如何に弁明し得べきか。実業の実践上に種々の差違があるという事実は、国際間の理解親善を害する大なる障碍となつている。実業法規の相

違は屢々紛争を惹起する。しかし実業道德が今日よりも遙かに低級であつた時代にエマーソンは言った。「結局最大なる世界改良者は利己的なる小商売人である」と。

実業道德に関するアングロ・サクソン人とラテン人の觀念との乖離は余りに甚しく、国際間の感情が円満に運行している時に於てすら、両者の調和は所詮望みのないものであると考えられた時代があつた。實際單純なる習慣の相達に過ぎざるものが、是認すべからざる重大問題のごとく視られたのであつたが、これ等は今や相互理解の光に照らされて一般的に消滅した。

実業上の指導精神として奉仕の理想を提唱するも、その実行上には疑問があるとは屢々聞くことである。「人間の性質は人間の性質である」、「実業は実業である」と謂うような言葉が未だに真理のごとく多くの耳に響き、しかしこれより稍々上品なる見解を取る者を粹狂人または偽善家と評するのである。

Business is business, the Little Man said.

A Battle where 'everything goes',

Where the only gospel is 'get ahead'

And never spare friends or foes.

—Berton Braley. (註六六)

実業なるものは総じて十字軍的精神には無感受であると考えられて来た。實際過去に於てはかかる解釈の正当なるを証するような事実もあつた。

他方に於ては夙に十字軍即ち主義のために総てを賭して進んだ人々もあつたのである。古き昔から深い思慮を以つて富貴に背いて来た宗教学、教育家の心に棲んだ犠牲的精神は、また実業家の心の中にも宿つたのである。実業の欠きたるものは唯団結の熱意のみであつたが、これまた徐々に修得せられつつある。将来の十字軍は実業十字軍であらう。しかして実業は一度事に従うや必ず徹底的に遂行するものである。

アメリカ人のロックフェラー(註六七)とカーネギー(註六八)、イギリス人のカドブリーとレヴァー等は実業十字軍の人々であつたと謂うべきである。

この四人は富を解して正確なる計算の行わるべき信託財産であると化した。この四巨星には及ばざるも幾多の小明星またこの主義を是認し、各々独自の途に於てこれを実行し来たつたのである。現在の実業十字軍の傾向は労働者の利害を第一に考慮すること、すなわち彼らの職場及び家庭環境の幸福を計ることである。

Life without labor is guilt,

Labor without art is brutality.

—John Ruskin. (註六九)

今日の実業は「乗るか反るか」の冒険事業ではなくまた吉凶占いなどを弄ぶものは殆んどない。科学的方式を欠く事業は競争に耐えるものではない。今日の実業会社はその科学的研究方法の整備せる点に於て往時の大学にも勝っている。現代の大企業は科学的管理の賜物として、従前より一層巨額なる労働賃金と租税とを負担し、更に分外なる他の要求にも満足を与えている。

かくて実業の実践上には著しい変化が来ているが、そこにロータリーの強い影響が看取せらるることである。旧時代に於ては実業家の慮かるところは如何にして金を儲けるかの一事であつたが、今日の実業家は多面的相関的問題に当面している。今日の実業家が成功するためには、その祖先よりも深遠に且つ迅速に考慮しなければならぬ。彼らは四方に風を受けて立たなければならぬ。顧客、使用人、競争者、仕入先、また公衆に対して正しくなければならぬ。かくのごときは決して容易の業ではないが、しかも現代に頭角を現わす成功者の大部分は、かかる幾多の責任を是認し履行したる結果によるのである。時代はいよいよ急変して実業の方策に挑戦して来た。その挑戦に対して実業は立派に立上つて来たのである。

註五五 (大意) 一生懸命誠実にひとつの事を成しとげようと努力、それは

この世の初めから人間をとりまくあらゆる病いや苦悩に対する偉大な療法である。——トーマス・カーライル

註五六 Thomas Carlyle トーマス・カーライル (1795-1881) スコットランドの随筆家、歴史家。代表的作品には、「衣装符号」「フランス革命史」等がある。

註五七 ユステイニアス Justinien (483-565) 東ローマ皇帝。『ローマ法大全』の編修を成した。

註五八 ダンテ Dante Alighieri (1265-1321) イタリアの詩人、「神曲」は故も著名な作品である。

註五九 シェークスピア William Shakespeare (1564-1616) イギリスの詩人、劇作家。「オセロ」「マクベス」「ハムレット」等傑作が多い。

註六〇 ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832) ドイツの世界的詩人、小説家。著名な作品としては「ファースト」がある。

註六一 エディソン Thomas Alva Edison (1847-1931) アメリカの発明家。蓄音機、活動写真等を発明。

註六二 メーテルリンク Maurice Maeter Linck (1862-1949) ベルギーの文学者。著名な作品として「青い鳥」がある。

- 註六三 ラスキーン John Ruskin (1819-1900) イギリスの美術および社会批評家。代表的著作は「建築の七灯」「この最後の者へ」等がある。
- 註六四 スピノザ Baruchde Spinoza (1632-1677) オランダのユダヤ人哲学者。著作に「エチカ」がある。
- 註六五 アインシュタイン Albert Einstein (1879-1955) アメリカの理論物理学者。一九二二年ノーベル物理学賞を受けた。
- 註六六 (大意) 商売は商売 全力をあげて戦う場所だ 唯一の救いは前進だけ 敵も味方も容赦しない
——バートン・ブレイレイ
- 註六七 ロックフェラー John Davison Rockefeller (1839-1937) アメリカの石油王。一産業における独占の創始者と言われている。
- 註六八 カーネギー Andrew Carnegie (1835-1919) アメリカの鋼鉄王。
- 註六九 労働なき生活は罪である 芸術なき労働は野蛮である
——ジョン・ラスキン

XII

ロータリーの世界平和観念は空想か

Nations have recently been led to borrow
billions for war; no nation has ever borrowed
largely for education. Probably no nation is rich enough
to pay for both war and civilization. We must
make our choice; we cannot have both.

- Abraham Flexner. (註七〇・七一)

ロータリーの庶幾する諸目標の中殊さら高唱せんとするものは、「世界の
実業家、職業人は宜しく奉仕の理想の下に一致団結して以て友愛親善の向
上に尽すべし」の一項である。八十有余国の賢明にして有力なる実業家、
職業人は打揃うてこの理想を追うていたのであつて、世界の指導的教育家
もまたこの明かるい思想を分担している。

ロータリーが百の国家中に存在を主張し得るの日は恐らく遠くはあるま

いと信ぜられるのであるが、やがて一百に接近しつつある世界の枢要中心地に数千のロータリー・クラブを有せんとするこの大機関を以つてしても、なお且つ「戦争」と呼ぶ一制度に対しては重要な影響を与え得ぬであらうか。これは正に厳肅なる問題である。

もし戦争が理性的のものであるならば、人は右の借問に対して直ちに肯定を以つて答へ得るであらう。しかれどもおおよそ戦争なるものは理性を知らない。戦争は勝敗の何れの場合にも相償わぬものである。最善なる戦争も人類の知る最悪の事件である。人間の感情を抑制せざる結果が戦争である。これ実に貧婪、嫉視、迫害、驕慢、対立から起り、果ては有り得べくまた有り得べからざる、もつともらしくまたもつともしからざる、信ずべくまた信ずべからざる、崇高なるがごとくまた滑稽なるがごとく虚偽の宣伝に挑発せられて憎悪に燃え上る。戦雲の液濃化し、もしくは開戦を見る時には、虚偽を食わんとする貧慾は健啖を極め、鉤も釣糸も沈子も共に嘸み込む。彼我の差別を好む人が民間の自警的集団に付属して探偵の役を勤むる時、団員は彼に教えて言う。「戦時の虚偽はまことに美味にして芳醇なる調味料と共に喰うべし」と。

かくて虚偽は尊重せられ、虚偽者は筆舌何れの徒たるを問わず大いに需を喚ぶ。新聞雑誌の発行者及び講演協会の支配人等は総て公衆の要求に仕うる御用商人を以て自ら任ずる。事態がここに到るに於ては最早国民の道義観念は地を掃い、「余は人々をよく戦争の埒外に確保せり」或は「戦うには余りに足らず」等の言は、一瞬にして「これは戦争を終息せしむるための戦争なり」と変り、かく戦争は続くのである。私刑は法律を無視するものなるが故に呪阻せらるる、しかるにすべての戦争は無法律である。

貴むべきは何人であるか。ジョン・ゴールズワージー(註七三)はヴィヴィアン・カーターの著『ロータリーの意義』の序文中に戦争の罪は三箇の階級であることを指摘し、破壊手段を發明する科学者(理化学者、發明家、技術屋)、軍費を供給する金融財政家、感情を激成して理性の放棄を誘う新聞雑誌製作者であると言っている。興味あることには他の論者が恐らく包含すべき他の二階級即ち軍事学者及び所謂外交家をゴールズワージーは除外している。英国の有名なる著作家ジョン・メイナード・ケインズ(註七三)に依れば、世界大戦前の数年間に暗躍したる秘密外交は、連合各国を或地位に陥し込んだものであった。即ち或る地位とは何れの署名国も不名誉を甘んず

ることなくしては脱退を敢てすることの出来ないものであったと。しかしロード・ピーヴァーブルック(註七四)は、今や事態の変化はその秘密なると否とに關せず条約を無効に葬り去った。しかして戦争に比較すべき程の名誉はあるべきではないと論じているのである。

ともかくも一国民に就いて多くを知れば知る程、彼らを悪様に解釈する危険は少くなるのである。言を筆舌に托して悪意を醸成すること程その弊の甚しきはない。ロータリーは常に国際關係に就き善意の考察をなす習慣を馴致せんと企つるものである。粗暴なる言を吐く習慣も温和なる語を交わす習慣も、慣るるに安きことに變りはない。要はこれを試みんことである。戦争時代の残忍なる物語は誇張的宣伝にして多くは虚妄である。或大
学教授は言った。「かかる物語は味方に於てすると敵に於てするとを問わず、これを信ずるは愚者である」と。不幸にして今日なおその「愚者」が少くない。

もし鉄鋼製造業者が結托すれば戦争煽動家に対して戦争の道を平坦な円滑なものとするのが可能であるとは、合衆国スチール会社社長時代に故ジャッチ・ゲリーの言った言葉である。ゲリーの言が真であるとすれ

ば、世界の実業家、職業人が相提携することに依つて、有効なる支配力を發揮し得べきことは明らかであるや。もし八十の国に於て發刊せらるる数千のロータリー機関誌中に、ロータリーの理想に対する信念を完全に發揮せば、将来の戦争煽動者は少くとも一箇の恐るべき対立勢力と抗争せねばならぬであらう。

もしわれらは是非とも好戰的たるべしとあらは、例えば「マース」(軍神)に向つても砲列を布くのであらうか。しかし何分にもその名目は正しからず、且つ神様は人間の慈悲の届かぬ所にいるのは、よんどころないことである。

ここに意外なるは道義觀念の強き多くの人々が、国境外の事になると忽ち日頃の道義觀念を忘れる。戦争のみが國際無法律主義の暴露ではない。条約は一片の紙屑となり、協定は形骸のみの記念物と化する。自国の同胞に対して人道的思考態度を持するということは、外国人に対し同じ主義を適用することとは自ら別問題となる。容易に外国人を信ぜざることと愛国心とは同一であると考えるのである。かかる人々にとつては、常に自国人の思考感情を尊敬すべきものと主張するのが善良なる國民であつて、他国

人の思考感情を非難する前に熟慮せよと勧告する人は、裏切的非国民なのである。

文明が爛熟して穀倉は満ち溢れ、紡錘は日夜を挙げて全能率の運転を続け、大学と専門学校とは生産界に向つて卒業生の洪水を送り出しつつあるの時、一つの害悪の製作所が言論機関の奥室に、政庁の内殿に、宗教家、詩人、哲学者の書齋に、農民、商工業者、労働者の家庭に、果ては獄舎、養老院にまで侵入した。彼は愛国心という名を被つて現れたがそれは実は恐怖であつた。

最初の程はいささか遠慮していたのであつたが、容認、歓迎、好遇に乗じて漸く驕慢となり、やがて増長発展したる威力は遂に善悪、高下、文武の有らゆる勢力を支配するに至り、しかも単に一國に止まらず文明列強の殆んど全般に及ぶのであつた。かくてこの害悪製作者の支配下に帰したる諸勢力は続く四年間に世界の財産を物の美事に粉碎し、父子兄弟、孫をさえ含む幾千万の人命を破壊し去つたのであつた。はかなく消えた生霊の中には、不滅のパスツール、テニソン（註七五）、モーツアルト（註七六）、エディソンもあつたことであろう。これ等の人々により人類は幸福に、悲哀は緩

和され、文明は更に豊富となるを得たことであろう。かくのごとき人々は一定の国の資産ではなくて世界の資産であつた筈である。

世界戦争に於て其の戦勝「軍隊」というものが只一つあつた。即ちその目的を達成したる唯一の軍隊である。それは敵味方の差別なく温かきコーヒーとドーナツツとを供し、その讃仰する「平和の皇子」に尽忠を宣言したる「救世軍」であつた。

サー・ノーマン・エンジェル(註七七)は国際平和達成のため、最も重要な条件が国際理解であることを主張し、これを強調するために付言して曰く、理解なき好意は無益以上に悪く、時には絶対的なる悪の脅威となると。如何にも戦争の勃発が往々友誼の前奏曲に伴うて来ることがある。しかしかかる場合は大抵恐怖、嫉視、商戦、秘密条約等が既に数年の前より鍋中に熱化していたからである。しかして友誼の前奏曲は蔽い懸る災禍を払おうと必死に焦慮する人々の最後の足掻きである。サー・ノーマンは理解の重要意義を強調することに熱心なる余り、言説いささか過ぎた所があるものかと考えられる。著者としては好意は理解の有無に拘らず望ましきものであると信じたのであるが、何れにしても単なる見解の問題に過ぎぬ。

しかしサー・ノーマンの述ぶ次の点に就きては著者は完全に同意し得る。即ち或二国が戦争に訴うる場合、一方は正しき理由に立つと信じ、他方は正しからざる理由に立つと信ずるといふことはなく、双方共にそれぞれ理由が全く正しきことを確信して干戈を取るのであると。この事實は本来自明の理であり、また理性の光に照らせば更に自明の事柄である。しかれども何時何処に理性を求むべきであるか。

アメリカ南北戦争の当時北部の有名なる一論者は叫んだ。「今や歴史上正義の全部が一方に存在するを見る空前絶後の時期である」と。言何ぞ悲劇なる。

かかる潮流に抗して一百の国の数千のロータリー・クラブは、果して何事をなし得るであろうか。

かつて著者は英国の或る拔群なる思想家から次のごとき言を聞いた。曰く、もし強力なる政治家ありて戦争熱の極度に上昇せぬ間に、卓抜なる信念と確固たる決意を以て毅然その爆発の防止に努めたらんには、独力なおよく目的を達し得べきやも知るべからずと。かかる危機に際してはロータリーは無力であると信ずる人も少くない。或はしからん。しかれども敢てこれ

に当らんとすることのロータリーを冒清するものならざるべきは、何人も承認せざるを得ない所であろう。

ロータリーの計画は少時間の実験を以てせんとするにはあらずして、国際親善と理解の増進運動はすでに多年の前に開始している。この重要な分野に於てロータリーは先駆者だったのである。ロータリーは国境を見ず、太陽の没することを知らない。ヨーロッパ、アジア、アフリカ、南北アメリカ、オーストラリアに跨がる全幅員と全延長とを通じ、国際親善と理解の増進運動は、不撓不屈、堅忍持久の進行を続けるのである。

途に横たわる多くの障碍は言語、宗教、民族的性情、習慣、頑強なる割拠主義、争闘、優越の錯綜であるが、幸にしてこれ等の障害は突破し得ざるものではなく、現前除々に征服されつつある。快速汽船、飛行機、電信、電話、ラジオ等の機械力は極地間を接近せしめつつある。すなわち物質的科學はよくその役目を果しつつある際、もし同様の実績が更に社会科学の上にも顕わるるの時到来れば、戦争の暗雲はここに消散し、各国の全能力は挙げて生産的及び文化的事業に傾注するであろう。神は時の到来を促進せん。

ロータリーは国際理解増進のためには、ロータリー運動の初期に於て有効に遂行し得たる方法を応用する。すなわち友愛関係の成就である。その間に存したる唯一の本質的相違点は、初めは単に一都市に住する各民族的及び宗教的グループの代表者を以て、友愛圏を形成したものであったが、現在目標とする代表者は殆んど全世界の諸国より出で、よつて以つてこの光輝ある計画に参加しているのである。毎年数千の熱心なるロータリアンは、多数の国々を代表してその大会に参集して友誼の交歓を行う。更に小規模にしてまた一層親密なる形式の会合は一年を通じ間断なく諸国のロータリアンの間に催されている。

最も興味ある発展として挙ぐべきは、数国のロータリアンに依る協同会合の成立である。就中その最も古きもの一つは、ウインニペッグ・ロータリー・クラブの主催により毎年開催せらるるカナダ及び合衆国ロータリアンの連合会である。この外カナダ、合衆国の国境地域のクラブにして同種の会盟を組織するものが少くない。また北米南部地方に於ては、メキシコ、キューバ及び合衆国ロータリアンの間に最も親密なる接触が行われ、そこには国際的の組織がある。

ヨーロッパ大陸に於ては各国の關係が一層複雑であるだけに、この種會盟は一段重大なる意義を有するもので、それがロータリーの設立比較的新らたなる同地方に於て行われつつあることは甚だ慶賀すべき現象である。

その最初の顕著なる成功の一つは、ボーデンジーに開かれたるスイス、オーストリー及びドイツ・ロータリアンの連合会であつた。

フランス及びイタリーのロータリアンにより頻繁に國際會合が催されることであるが、その古きものはフランス・ロータリアンのイタリーへの記念すべきイースター祭日の旅行であつた。

北部欧州(デンマーク、フィンランド、ノルウェー、スエーデン)に於ける数回の國際的會合は一つの連合委員會を組織し、その後同方面の國際的會合その他の親善増進運動は、すべてこの委員會の指導する所となつてゐる。

フランス、ドイツ、その他の欧州ロータリアンはまた數箇の連合委員會を組織し、同委員會はd f 屢々國際會合を催して諸国の当面する各般の難問題を有効に処理している。

一九三二年四月にはフランスの區監督主宰の下にベルギー、フランス、

イタリー、スペインのロータリー・クラブ員は、フランスのカンナに聯合会を開催した。次いでルクセンブルグ・ロータリー・クラブの第一回記念日に際せる会合は、ロータリーの背後の勢力が如何なるものであるかを輝しく例示した。この会合にはベルギー、オランダ、フランス、ドイツ、デンマーク、スイスのロータリアンが参加したことであった。

同年九月にはユーゴスラヴィアのヴァラジンに於てオーストリー、ハンガリー、ユーゴスラビアのロータリアンによる連合会がすこぶる成功の裡に行われ、引続きこの三国会盟は翌一九三二年九月にはウインドンに於て挙行された。また一九三二年の八月にはハンガリー、ユーゴスラビア、ルーマニアのロータリアンがスポティカに会合を開いている。

ベルギー、オランダ、ルクセンブルグの組織的国際接触は既に数年前の久しきに溯るが、一九三二年九月の重要なアントワープ会合を以てその最高潮の域に達したと言い得るもので、この時は専ら三国間の経済的諸關係を検討したのであった。

ドイツ、チエコスロバキアの会合は、一九三一年十一月プレスラウに呱呱の声を上げ、いくばくもなくテプリス・サノヴに於てその第二回は行われ

た。なお両国の他市のクラブもまた同様の会合を催している。

エジプト、パレスタインのロータリー・クラブ会合は、その第一回を一九三〇年十一月カイロに開いている。しかしして同会合には十二ヶ国を代表する六十七名のロータリアンが出席した。

イギリス及びアイルランドのロータリー・クラブとフランス、ドイツ、その他欧州大陸諸国のロータリー・クラブとの接触は無限である。

一九三一年四月南米に開かれたる国際的会合は最も興味あるものであった。即ちロータリー第六十三区(アルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイ)と第六十四区(当時はチリー及びボリビアのクラブを包括していた)とが、アルゼンチンのペント・デ・インカに於て連合大会を開いたのである。

また特に注意すべきことは一九三二年十二月モンテヴェデオに開かれたるアルゼンチンとウルグアイとの会合である。これは両国公式の外交関係が成立されたるを機とし、その友愛関係の確保を計らんとする特殊の目的を以つてしたのであった。

この以後の国際的会合は多くして枚挙にいとまがない。その親善と理解の増進運動は、各国に於ける青少年の間にも浸潤した。若者は感受性が強

い。しかして品性の着成時代に受けたる印象は一生涯存統するものである。この故に国際親善増進に興味を持つロータリアンは、注意を学齢期に在る青少年に向け、その海外旅行を懲慙して国際的友好を作るの機会を得せしめるようになった。しかしかかる交遊は永久の厚誼に成熟するものである。

この方面の最初の組織的計画は、青年濠州連盟(The Young Australian League)の合衆国訪問であつた。「青年濠州連盟」は濠州パースのロータリークラブの一員が首唱したものであつて、目的は濠州の優良青年たる連盟会員に対し、毎年一回の海外遊歴によりて「旅行に依る教育」を授けんとするにあつた。これ等の青年の多数はロータリアンの子弟であつた。

一九二九年一月彼ら百六十名の青年は北米合衆国旅行の途に就き、先ずサン・フランシスコに上陸南部地方を横断してニューオルレアンズに出で、それよりニューヨーク、シカゴを歴訪し、カナダを通過して五ヶ月の日程を終り、ヴァンクーバーより帰航したのであつた。

青年らは友愛使節として、合衆国及びカナダの到る所に於てロータリー・クラブの手厚い歓待を受けた。彼らの帰国するやこの旅行が所期の目

的を十分に達成したることを証するに足る多くの書信が、各地の接待者に送られたことであつた。

たまたま団員中の一青年がサン・フランシスコに於て急激なるリウマチ炎に罹つたという出来事があつたが、それは手当に猶予を許さぬ甚だ危険な容体であつた。この不慮の災難に向つて一人のサン・フランシスコ・ロータリアンとその夫人が救援の手を延べた。父となり母となつて懇切に看護すること実に七週間、病人はとみに快方に向い、無事に両親の膝下に帰ることを得て間もなく全快した。七千マイルを距つる濠州の一家族に対しこのサン・フランシスコ・ロータリアン夫妻が尽したるサービスの絶大なる価値は、何人か言語を以て表現しうると言うか。ロータリアン家族が慈雨のごとく注いだ至情は、多数の若者の胸に深く記憶の種子を下ろし、それが将来友愛の大樹に成長して同情、寛容、理解に実り、良果を齎らすようになることは疑いがない。

その後「青年濠州連盟」の指導者数名は一九三二年の春合衆国に來たり、濠州を訪問せしむるため米国青年を以つて「青年アメリカ連盟」を組織し濠州訪問の計画をなした。この一行は經濟界の不況に妨げられ濠州からの

一行はど大なる団体とはなり得なかつたが、訪問したる諸都市に於て濠州ロータリアンから受けたる歓迎はまことに熱烈なものであった。

スポーツに依る接触もまた国際理解の向上に甚だ有効なるものである。

この事実を認めたるスイス、ダヴオスのロータリー・クラブ会長ミュラーは、オーストリー、ベルギー、カナダ、チェコスロバキア、フランス、ドイツ、イギリス、イタリア、ポーランド、スペイン、スウェーデンの諸国のホッケー・チームをダヴオスに招聘して国際試合を挙行した。

また国際交遊の一方法として青年のための国際夏季キャンプがある。一九三一年の夏ロータリー第五十四区即ちスイスの少年事業委員会は、ジエネヴァ・ロータリー・クラブ員ブリエル・ラウチ指揮の下にロータリアン子弟の第一回スイス・キャンプを催したが、これに参加したる少年の国別はドイツ、イタリー、オーストリー、ベルギー、イギリス、デンマーク、スペイン、チェコスロバキア、オランダ、ポルトガル、ハンガリー、仏系スイス、独系スイスの十三カ国に互つた。

第一週は少年相互の接触と親交を進めることにあて、その後は朝は社会、経済、科学、芸術その他の問題に関する講演を開き、午後は工場等有益な

る場所の見学及び水泳、テニス等のスポーツに費さしめたのであった。

キャンプ生活を終つてから二週間、スイスの風光、言語、産業、住民等に就き、同国の国情を知らしむるため少年達の国内視察旅行を行ったが、スイス・ロータリアンはこれ等若者の滞在に興味と啓発とを与ふるよう時を惜まず斡旋したのであった。右スイスの例はその後諸国のロータリアンをして、同様の企てに依りロータリー第六目的の顕揚に貢献せしめた。

すなわちウィーン・ロータリー・クラブは一九三二年八月オーストリー・ラッドスタットに近いタソタリエル・カツスルに於て国際少年キャンプ団を組織した。参加者はベルギー、チェコスロバキア、デンマーク、オランダ、イギリス、ドイツ、ユーゴスラビア、オーストリー、ザール地方、スイス、ハンガリーのロータリアン子弟百二十名に及び、経験ある指導員各一名の統率の下に四箇の大営舎に分宿した。

キャンプ員は言語の不自由にも拘らず、よく国籍の相異を眞のロータリーの方式に依りて融合し、相互の未知の国々に関する知識の交換をなしたのであって、このキャンプ団もまた多大の成功を収めた。

オーストリー・グラッツのロータリー・クラブもまた「ズードマルク」

学生ホームにキャンプ団を作った。これにはオーストリー少年とユーゴスラビア少年とに初めて友誼関係を結ぶ機会を与え、この点に於て特殊の功績を挙げたものと言うべきである。なおこのキャンプにはチェコスロバキア、イギリス、フランス、ドイツ、ユーゴスラビアの学生も参加したのであった。

デンマークのロータリアンは多年の間青少年に国際思想を培養することに関心を示して来たが、由来は既に古きことに属する。イギリス・ロータリアンの家族は他国殊に欧州諸国ロータリアンの子弟を客分として招待し、これに対し自分の子弟を交換的に送っている。

また国際親善問題に関する青年男女の関心を喚起せんとする他の一方方法は、ハイ・スクールの学生に対しこの重大問題に関する懸賞論文を募集することである。

国際ロータリー・ウィーン大会の際には、同論文の懸賞金合計五百ドルが同市の学生当選者に贈られ、また同ボストン大会の際にもほぼ同額の懸賞金が同市の優秀学生に与えられた。

論文の審査員は、開催当該地の大学教授中より特に十分なる資格を備う

と認めらるる人々に委嘱する。

なお同種の運動方法にして一層規模の大なるものが目下考慮せられつつある。

もしロータリー運動が最も困難なる試練を経験せる国を求むるならば、それは調和し難き信仰の相違が幾百年の昔より存在し、特殊の氏族制度が越え難き障壁を形成し、政治的激動が恒久的秩序となつてゐるインドである。かくのごとき国土に於てもなおロータリーは根強く存立し得るか、また容認され適応し得るかということは一つの疑問であつた。ロータリーは明かにこのインドに於て最高の試練を経なければならなかつたのである。ロータリーは遂に試練を克服した。しかしてその普遍の教義であることを自ら実証したのである。

エジプトのカイロは想像されたごとく事実一大難所であつたが、ロータリーはここにも成功した。実にクラブ発起員二十一名の含む異種族の數十六、宗教の異なること八、しかして発起宣言が朗読せられたる時、これに答へたる国語の相違は十二種に及んだ。かくのごとき条件の下に於ても友愛は栄えるであろうか。しかりその通りである。しかし、そこに栄える友

愛の甘美は、純一なる社会に存在する友愛に毫も劣るものでない。

かつてカルカッタのロータリー・クラブに於て時のインド総督ロード・レチングはその所信をのべて、ロータリーの影響はインドに於ては特に大なる価値を示すであらうと言った。米国に於てカトリック、プロテスタント、ユダヤ教徒のしかるがごとく、インドに於ては仏教徒、モハメッド教徒、キリスト教徒がロータリー・クラブの会合に集つてともに食卓に親しんでいるのである。

シンガポール行政長官サー・セシル・クレメンチはシンガポール・ロータリー・クラブに於ける演説に於て、「余はシンガポールその他マライ半島の諸都市にロータリー・クラブが成功を以て設立されたることに對し、歡喜に堪えぬものである。何となればこの地方に於ては各民族及び各宗教義の間柄は幸にしてよく調和せられてはいるが、ロータリー・クラブのごときは真にこの調和を維持し確保する最善の手段となるものであると思惟するからである。余の奉職した大英帝国の他の部分に於て最も憂慮せることありしは、そこに社会を形成する異人種が日常接触をみておるに拘らず、相互の生活と思想との方式に就ては全く理解されず、あたかも互に遠く世

界を隔てて住むがごとき状態に在ったことである。かく同一の国土に住する各箇の社会を画する障壁は、これを打破するの要最も緊切なるものがあることで、ロータリー・クラブはこの目的に適応する最良の方法となるものである」と述べたことである。

雑誌『アジア』(Asia)の一九三二年四月号に於けるダブルユウ・イー・プリーストリーの一文は、ロータリーが東洋の実業道德に与えたる影響をよく論証している。曰く「東洋に於けるロータリー・クラブは国際親善の増進に尽すとほぼ同様の努力を実業道德の向上、すなわち地方的標準より高尚なる世界的標準への向上に力を注ぐものである。かくのごとき道德標準は、東洋人が外国人に対して待構える伝統の鎖国的城壁を打破すべき有力なる動因となるもので、同時に商業取引に対する有効なる促進剤となる。満州に於ける三箇のクラブ——大連、ハルビン、奉天——及びホンコン・クラブの外、支那本土には現在北京、上海、天津に三箇のクラブが設けられてあるが(*)、会員はヨーロッパ人、アメリカ人及び東洋人を含みその数二百二十名に達する。就中上海クラブの会員は国別十二以上に及び、支那人及び日本人もこの内に含まれている。極東に於ける多くのロータリー・

クラブを訪問したる余は、ロータリー運動が東洋と西洋との接続上、また相互間の平和の上に如何に大なる貢献をなしつつあるかは、到底想像し得なかつた所である」と。

* 右論文の書かれたる時以後支那の諸都市にしてロータリー・クラブの設立を見たるは厦門、広東、福州、杭州、漢口、南京、濟南、青島等である。

ロンドンのシドニー・パスカルは、その世界周遊の途上国際ロータリー本部に次のごとく報告して来た。「ボンベイ・ロータリー・クラブは真乎の国際団体である。ヒンヅ、モハメダン、パーシー、イギリス人、アメリカ人、スイス人、その他の諸国人を含み、宛然たる国際ロータリーの縮図である。ここにロータリーは各民族相互の利益のために且つ広漠たるインド全土の利益のために、彼ら異種族間に友愛親善の關係を取結ぶべき重大なる任務を負うものである。もしボンベイ・クラブがインドの品性を代表するとすれば、その標準たるやまことに高いものである」

「余は到る所に於て国際ロータリー会長として絶大なる歓迎を受けている。例えば昨日はボンベイ政庁長サー・フレデリック・サイクス及び同夫

人の午餐に招待され、次の水曜日には総督の午餐会に招かれている。またラホール及びマドラスに於ては政庁官舎に宿泊する筈である。実にロータリーは特殊の好感を以て迎えられているのである」と。

国際融和は今日まで人類の思想感情を捕えた最高の願望である。いやしくもこれを知るわれらが単にこれを知れりと自称するに止まるならば、むしろ目的のために実際に戦つて仆るるの勝れるにしかざるものである。

「シカゴ・デーリー・ニュース」の発行者、故ヴィクター・ローソンは常套的に言つて居た。「何れの国もよくこれが研究をなす程好愛するに至るものである」と。世界という家族にとり何れの国も欠くべからざる一員である。

ルーサー・バーバンクはその世を終わる約半年前に著者に彼の信念を語つた。アメリカに於ける諸民族混合の実験は窮極に於て、無神経なるチュートンの素材はラテン種の幻想を容れて初めて豊富なるを得たることを証明するであろうと。学問の研究が漸く進んで専門用語に移すを得た植物学者は言う。「由来混血種族は常に進歩的である」と。

アングル・サム(註七八)の治外法権的外貌は、古き諸国の大小植民地を有

するものより見れば、多少限定されたもののものであつても、内には莫大なる混融物であると共に、その多様にして加うるに熾烈なる経験は、必然的にロータリーの主導者となり参画者となる任務に當つて十分なるものがある。

実業上及び社交上の接触を通じ諸国民は相互に認識し得るに至るのである。奇異なる習俗は最初は多少の悪感を刺戟することがあつても、結局は興味を以て迎え或は取つて以つて我が物となすに至つて生活の内容を増すのである。一度南部の人々の親切と鄭重とを経験した北部の人は、誰かその魅惑を否定し得るであらうか。著者自身もロータリーのためにメキシコを訪うまでは、メキシコ人の眞の魅力を全く知らなかつたものである。恐らく今日に於ても、アメリカ人の多数は南部の国境に在るわれらの隣人が敬愛すべき独特の文化を有するといふ事実をよく認識し得ないことと思つ。合衆国が美術上の源泉をメキシコ人に仰いで居る程度が、如何なるものであるかを知つて驚く人が多いであらう。善き評判は時を遅くして伝えられ悪事は速く千里を走るものである。シカゴ・ギャングの殺人事件やメキシコの反乱は、世界一周超特急のニュースとして翌朝の食卓で読まれるが、

真に称讚に値する事故は全然新聞記事に漏れる。

全体的優位は各国共通の抱負であるが、実はこれ幻影に過ぎない。一國が或る点に於いて優位に在るとするも必ず他に劣る所あるべく、各国民は唯それぞれの特質を異にするのみである。国際ロータリー前会長ジョン・ネルソンはこれに就いていう、「何人も海外旅行に上る際には必ず自國の碼尺を捨てて行かなければならぬ」と。

太平洋沿岸諸國のロータリアンに在つては今日までに四回の連合會を開いている。この會議は一の「平和會議」とも目すべきものであつて、第一回は一九二六年ホノルル、第二は一九二八年東京、第三は一九三〇年シドニー、第四は一九三二年ホノルルで開催せられ、しかして第五回は一九三五年マニラで催されるが、これには本部理事會の選任に依り國際ロータリー會長アル・エル・ヒルが出席すべく、著者夫妻もヒル及び同夫人と同伴する予定である。

毎次の太平洋地方連合會には、多数の代表者が各々自國を國際親善の道に上らせようとする真摯なる希望に燃えて出席する。しかして諸國の元首、宰相、その他の世界的指導者より受くる激励または祝福のステートメント

は朗読される。

一つの太平洋會議に於て或代表員はその演説の結論として次のごとく述べた。『國際平和が到来するとすれば——しかりそれは必ず到来せねばならぬが——これは一般政治家の努力や外交官の奔走や為政者の画策によりて到来せず、實に実業家の協同的力作に依つて到来すべきものである。全世界が挙げて「最も着き奉仕をなすものは最も多くを利得す」の眞實を自覺する時、その時、夢想の極と考えられ来た世界平和は正しく實現するであらう』と。

また他の演者の結語には曰く、「各種の言語を語り、各種の神を崇め、各種の觀念と外容とを有する幾多有色無色の國家が相對峙する太平洋は今や平和である。しかしてこの平和を維持し得るものは相互の理解これのみである。理解を欠きたる過去の太平洋は少からざる不信の中心をなしていたが、善いかなロータリーにより今や理解の欠如は次第に且つ確實に改善されつつある。何れの方面にも平和を工作するロータリーの其精神は現われているのである」と。

ローズ奨学金を設定したるセシル・ローズ(註七九)は、ためによく戦争を

防止し得たとは称し難きも、彼がイギリスと他国との親善関係促進に著大なる効果を与えたことは何人も否定し得ない所であろう。彼は卓見よく時勢を洞察し、イギリスの大学に他国の青年を招きこれを教育するの途を開いたのであったが、今や既に大西洋のこちらにもその相対物たる十数衝の教育機関があり、学生、教師、青年勤務者、代表的実業家の子弟等の交換を通じ、理解親善の向上に貢献しつつある。

今や国際接触の方途は盛に講ぜられ、諸外国のロータリアンがこもこも招聘されて到る所に所信を披瀝している。合衆国大学生と海外の大学生との討論会は近年一種の流行物たるかの觀を呈し、引続きますます盛んに行われつつある。「二つの国際旅行連盟は四十の国際政治連盟に匹敵する」とアーノルド・ベネット(註八〇)は喝破した。合衆国が領事外交の方面に優秀なる青年を要求している事実を察し、プリンストン大学は適材の供給を準備しつつある。その他幾多の大学またこの必要を知り、青年のため公生活に有効適切なる教育を授けんとして、つとにオックスフォード及びケンブリッジが遺した轍の跡を急ぎつつあるはむしろ遲蒔の感すらある。

海外留学が将来自由教育の必要なる一部たるべきこと、またその実業生

活に入る必要なる準備条件たるべきことは、近年の経験に徴して明らかに証明されている。何故にかくのごとくならざるべからざるか。それは得る所があつても失う所がないからではないか。

世界戦争当時、米国少年軍として出征したるロータリアンの子弟にして、イギリス・ロータリアンの家庭に寄寓しその厚情を受けたものが多く、その結果は当然親交を生んだのであった。以来海外に旅行するアメリカのロータリアンが、しばしば欧州ロータリアンの家庭に客となる因縁をなしたのである。著者も諸国の多くのロータリアンの家庭に厚遇せられた経験を有しているが、か程の幸福、か程の精神的価値を痛感することはない。トーマス・ハーディー(註八)も

「思想の国際的交換は、唯一の世界救済手段である」と記している。

もし学校当局が過去の歴史よりも将来教うべき歴史の性質に就き、一層の注意を払うならば誤解の大なる原因は除去されるであろう。軍事的行動に関する虚妄の宣言は、敢て不確実なる功績を記録せんとする卑しむべき企図で、それよりも却って一般文学の方が遙かに信頼するに足りる。小説

の眞実性は往々正史の虚偽を矯めるものである。

一たび海外に旅行して、誰か心にその代表する祖国に対する責任感を喚び起すことのないものがあるうか。郷土の自慢や比較論は不快なる印象を与え誤解の種子を蒔く。また徒らに他国の制度を非議し、祖国に対し要らざる敵愾心を挑発せしむるときも眞の愛国心ではない。

時は正に国際協同時代である。ロータリーの成立は米国に於ける一機関として止んでも不可なきものであったが、事実しからざりし所以はその視覚が拡大したからである。即ちロータリーが国際化されたる理由は、他の宗教、倫理、科学等の諸機関が国際化されたのと同じようである。既にロータリーが国際的地盤を占めた今日、他のこの種の諸団体もまたますます国際的視覚を取るに至るであらう。平和の確保に関心を有する人々が利用し得べき一方法は、先ず各種の国家的諸団体の連繫を計るにある。この連繫より生ずる一層広汎なる見解が、構成団体を促してその効果を増大せしめるものであると信ぜられる。

地方商業會議所より始まり州商業會議所、全国商業會議所、国際商業會議所と次第に拡大したることく、法曹協会、医師団体の類もまた同様の過

程を取るのである。ロータリーの發展はロータリアンにあらざる多くの世人に対し一大魅惑であった。ロータリアンが先驅者として照らす道程を辿つて、他の多くの人は進んで行くことであらう。

友誼の關係を作ろうとしても的確なる方法がないと見え、友誼を追うのは却つてこれを追払うものでその愚は幸福を追い廻すラセラスに等しい。友とは偶然の出来心で離れまたは合うものであると考へている人もある。また他国との親睦を計ることは、自国の利益に対する正当の考へと矛盾するものであり、かかる方面に志す者は愛国的精神を欠くものであると眞面目に思つて居る人々もある。しかし著者の信ずる所では、ロータリーが国際理解と親善のために努力するのは多く愛国心の靈感に基くものであつて、世界のロータリーはおのおのその祖国を愛すること深きが故に、戦争の惨禍を免がれ祖国の安全を守るに最も有効なりとする手段を追求するのである。潜航艇と毒ガスのみが祖国を守る手段ではない。

また接壤二箇国間に平和を保障する最良手段は、国境に長城線を構築することであると考へている人もある。しかしその無効なることは昔より繰返し経験せられたところである。三千マイルの無堡墨国境を接するアメリカ

カとカナダの間に存する百年の善隣関係は、戦争不可避に対する事実の反駁ではないか。

著者は現状維持を択ぶ者であるが仮に変改を試みるとすれば、北米合衆国は南にも北にも隣国との境界を画するに、大学、病院、図書館、教会、公園、運動場、遊園地区、その他これに摂する建設物の連続線を以てすることを提案したい。兵營の維持には寄宿舎を設けると同じき費用を要し、しかしてその示唆するものは平和にあらざり戦争である。

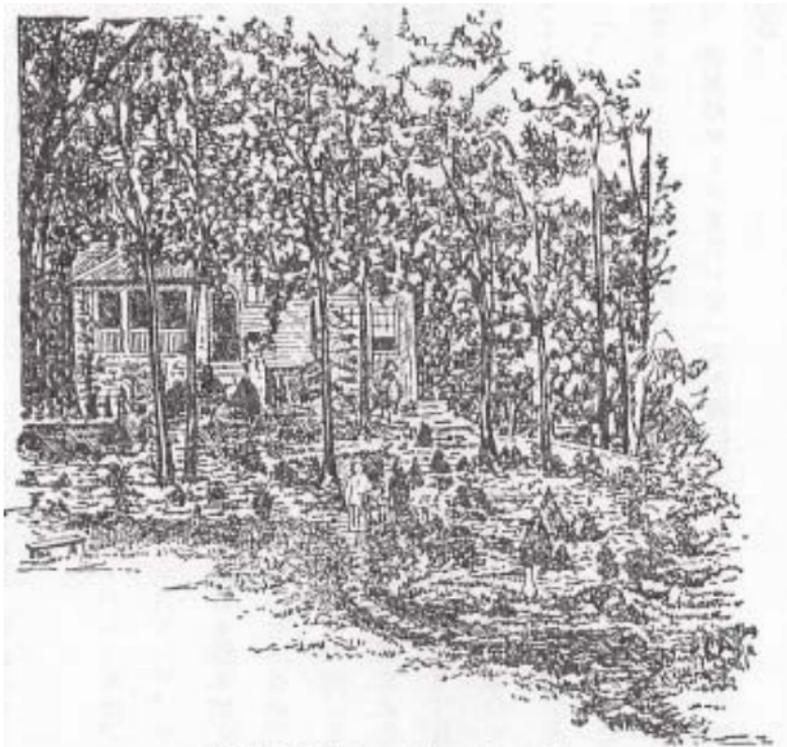
一九三二年六月十八日合衆国とカナダとの間には更に新らたなる友愛の連鎖がモンタナのグレーシャー・パークに公然鑄造された。すなわち両国の二公園グレーシャー・ナショナル・パークとウオータートン・レーク・パークとが公式に合体したのである。これ以来両者は一つとなりてウオータートン・グレーシャー国際平和公園として知らるべきものとなった。この他にも国境線に沿うて同様の国際公園が今や建設の緒に着いている。

ロータリーが国際的伸展に努力しつつあった時、著者またスコットランドに生い立った妻を娶つて家庭を国際化した。この結合は当初からそれを目的としたものでは勿論なかつたが、著者の理静に対し絶好なる實際的根

扱の用意となつた。もとより事を行わるべきものと行われ難きものあるは明らかであるが、もし著者以外にスコットランド生れの伴侶を得んと希うニューイングランド人があれば、著者は彼らに向つて言わん、「大賛成なり、これに過ぐるものなし」と。

著者の妻がイギリスより来たり訪うロータリアンを喜び迎うることは極めて自然である。彼らは著者の家に柔きスリッパに足を休めつつ炉辺に茶を啜り、平和のパイプを燻らしつつ静かな会話や楽しい瞑想に耽るのである。

客はイギリスよりするもののみでなく、この家は世界の各地から来るロータリアンのための会合所である。或時は八十国からの客が共にここに食卓を囲んだこともあつた。このシカゴ郊外なる著者の住居は或人々には別荘でありまたは山中の閑亭である。しかして妻ジーンと著者にとつては二人の心が命ずるままに設計されたる小やかながら楽しい「アメリカの我家」である。「カムリー・バンク」これ妻が生い立ったエディンバラの町の名に因んでこの家と呼ぶのである。「家の美は秩序である、家の幸福は満足である、家の光輝は慈愛である」。



善意の庭「カムリー・バンク」

「カムリー・バンク」の庭前には、各国よりの訪問者を記念するための樹木がここかしこに植えてある。世界の総ての国民が永遠に生存し繁茂することをここに表象せんと希望に外ならない。著者の友愛の園に初めに植えられた唐檜の樹は、濠州メルボルンなるロータリアン故ウオルター・ドラモンドの突然の死を記念するために彼に捧げられたもので

ある。生前著者を訪れたウォルターは、ここに美しく生えていた唐檜を痛く愛賞し、濠州に帰るや彼の庭にその一本を移し植えたのであった。我が庭の唐檜はその後訪れる濠州人に依り幾回となく写真に撮られ、またかの赤道下の地にその生国に於けると同様に有名になつてゐる。友愛の樹を植えると言うがごときことは、或いは単なるジェスチュアに過ぎないかも知れないが、ジェスチュアからしばしば幸と不幸が生まれる。

国際ロータリー前会長たるロンドンのシドニー・パスカルは、南阿、濠州、ニュージールランドの十数都市に友愛の木を植えた。著者もドイツ、エストニア、フィンランド、スウェーデン、ノールウエー、南阿にこれを植えたが、明年は東洋の各国にも数本植える光栄を得たいと思つてゐる。著者は外客の接待に過去二十年を過したものであるが、もしアメリカ及びヨーロッパの数十万の家庭に於てこの事が同一轍に行われるとすれば、その時こそ檜の穂は植木鉢に鍛ち直され、アイルの詩聖の夢は現実と化するであろう。著者は己が金蘭簿にあらゆる文明国の代表的人士の名を網羅し尽さんことの希望をしばしば発表したが、最近の状況よりすれば、この希望は実現に近付いたようである。友愛の交換は国際理解と親善の増進に

最も肝要のものである。

ロータリー・クラブの講話はラジオに依り放送される場合が多く、その全国放送も珍しくないのであつて、更に、国際放送も既に数回行われてゐる。あるときは合衆国のロータリー・クラブと濠州またはアルゼンチン等の遠国のロータリー・クラブとが、無線連絡に依り連合会議を催したることさえある。世界のロータリアンを一天四海に連絡するためには、ラジオの効用はまことに想像以上のものがある。

機関誌 The Rotarian 及びそのスペイン語版 Revista Rotaria は、全世界のロータリアンにロータリーの精神を伝え、またイギリスに於て刊行される優秀なる二雑誌 Wheel 及び Service は各英語国に普及してゐる。この外各地区及びクラブの発行する機関誌は無数であつて、その中の或る物は普及範囲の限定されてあるものとしては驚くべき功績を示している。

今日までに米大陸以外の土地に於て三回の国際ロータリー大会(エディンバラ、オステンド、ウィーン)が開かれたことであるが、それがロータリアン相互の友愛を深厚ならしめたことは勿論、実に旧世界の諸国と新世界の諸国との間に大いに理解と親善を進めることが出来た。カナダもトロン

トに於て一回これを開いている。しかして次の大会はメキシコ市に開かれる筈であり、その後の大会も合衆国外の諸国に於て行われることが従来よりもますます多くなることは疑いを容れない。

ロータリーは上記の他幾多の方法を以て、国際親善の向上に貢献し得たと信じている。しかれどもその方法は従来のものを以て尽きているとは決して考えぬのである。すなわちロータリーは今なお経験の時代に在り新たなる効果的手段は活動的会員の増加と共に、またロータリーの實力の發展と共に、多々益々発見せらるべきものと信ずるのである。しかり、諸多の障碍を踰越し突破する手段は、絶えず自らを更新し改善しつつ見られて来るのであらう。

またロータリアンは実業家の義務が最近ますます複雑となりたるごとく、政治家の義務もまた同様に増大して来たものと信ずるのである。将来の政治家は自国民の福祉を計ると同時に、他国民の利益も考慮せざるを得ぬであらう。米国の明敏なる教育家は、官界政界が有為なる青年の進むべき妥当なる職業分野であることを看取し、今や頻りにこの方面の用意に従っているが、これ実に近年に於ける最も祝すべき發展現象として数うべきもの

であろう。数年前ハーグアード大学の或期の卒業生が示した記録に依ると、彼らの圧倒的大多數は有利なる方面として専門職業及び実業界を志望し、官途を選んだものは僅かに一人のみであった。理由は極めて明瞭である、即ち通念として官界生活は唯わずかに名誉の存するところに過ぎぬと考えられたのであった。かくて敬すべき米国の公事を管掌するに相応わしき才能並に志望なき自己本位の人々の手に、最も重要な方面の職務が托されて来たことになる。幸にもかかる風潮は漸く変化を見ようとしている。

英本国とアイルランドとが行政的便宜の上から一単位となつていふ点を除けば、全ロータリーは挙げて十四名の理事より成る国際理事会により統制されて居る。理事会はこれを補佐する十二箇の委員会、二名の名誉ゼネラル・コンミッショナー、八名の名誉コンミッショナー、七十九名のガバナー(区監督)及びヨーロッパ協議委員会、カナダ協議委員会とがロータリーの中枢機関網を形成している。事務局本部はシカゴにあるが、スイスにはチューリッヒ事務局、イギリスにはロンドン事務局、東部アジアには交代する移動事務局があり、他の若干国に於ては事務の自由制度が行われている。

英本国、北アイルランド及びアイルランド自由国のロータリアンは、所謂国際ロータリー、イギリス・アイルランド連合会 (Rotary International-Association for Great Britain and Ireland.) を組織している。しかしそれ等のクラブはすべて国際ロータリーに所属し、執行上の或る事項を除く外は全く国際ロータリーの統制下に在るのである。国際ロータリー、イギリス・アイルランド連合会はその行政的事項を有効に処理するため、十二名より成る理事会(会長、副会長、幹事、財務委員を含む)を有する外、数箇の委員会及び各地区委員長十七名を置く。この委員長は国際ロータリーの区監督とほぼ同様の職能を有するものである。

イギリスがかく独立的の行政単位を構成したことは、ロータリーにとり幸であつたか不幸であつたかは一つの問題である。イギリス以外のロータリアンは一般にこれを喜ばない。その理由は歯車(ロータリーの徽章)の中に更に歯車を設けたると同じく、時に統制中心に危険な紛争問題を惹起することもあるべく、少くとも国際的性質を庶幾する団体の内部に国家主義意識を強化せしめ、やがて各国ロータリアンの間にイギリスの会員を孤立せしめるおそれありと言うにある。

これに対しイギリスのロータリアンの中にもその孤立の傾向を認めこれを憂慮する人々もあるが、また一方には彼らの自治的行政單位に少からざる自負を持ち、この制度に依りよくロータリーの一典型を發揚せしめ得ると信じている。すなわちこの制度の下に生れたるロータリーは、少くとも彼ら自身の要求に合致するという点に於て他に勝るものであつて、これを現在以上に國際的共通運動の中に投下し、これがため反つてその優良なるものを破壊の危険に曝すがごときことは決してないと彼らは信じているのである。またイギリス・ロータリアンの中にはロータリーの内部的転回は結局ロータリーのためによりである。即ち各自よく行政的責任に当り得るまでに十分ロータリー精神の發達せしめたる國に対しては、それぞれに自治的單位の設定を許容することが、ますますロータリーを國際的に發展せしむるゆえんであると信ずる人々もある。しかし内部的転回説の反對論者にあつては、これ畢竟イギリス・ロータリーが國際的統一圏内に唯一の國家的單位として存在しているという意識から、自らを弁護せんとするに過ぎぬものとなすのである。

可否の議論は種々あるとしても、事実を熟知する人は敢てイギリス・ロ

ロータリーが独立的行政單位を形成したることを咎めぬであらう。何れにせよこれは公然と万人同意の下に行われたのであつて、當時に於ては何人も将来の紛糾などは予想せず、それが英本国及びアイルランドに急速なる發展を齎らすべき最も有効なる具体的方法であると考へたのであつた。

ロータリーが合衆国に出来て未だ他国に及ばざるの前、国内に於て既に異常な發達を見たる事實は、ロータリーが余りにアメリカ的性質を帯び、ためにその國際化を多少遅延せしめたと言ふことにもなるのである。今日に於てはクラブの新設は合衆国に於けるよりも他国内に多きを致すのであるが、ロータリーの過半数はなおアメリカ人である。この均衡を欠く事實は、イギリスの例に於けるがごとく往々異論を呼ぶことになるのである。ロータリーは真に國際的であるかとの声は一部のイギリス・ロータリアンからはしはしは聞くところである。かかる質問者より見る時は、ロータリーは名を國際的に籍るも事實はアメリカ的であつて、これに付和迎合を続けるよりも内部的転回を計る方がよいということになる。

アメリカ・ロータリアンから見る時は、イギリス・ロータリアンはなお暫く忍耐に出ずべきではないかと感ぜられる。即ち魂在に於てロータリー

の財政上その他大なる援助が専らアメリカ側より提供せられ、その他種々なる譲歩が迅速に行われつつあつて、今や国際理事會員の過半数は合衆国以外の会見中より選任せられてゐるのである。

しかしこの点に關しイギリス・ロータリアンは反駁して言う。いわゆる利益は事實よりも想像に属するものである。合衆国以外の理事或はその他の委員にして規則的に會議に出席し得るは常に少数に止まり、従つて彼らは出席するも多くの場合、ロータリーの諸問題に關してはその經驗に於て勝るアメリカ人側の判断に服従せざるを得ぬのであると。

この不満の説は数年前に於てはその理由ありしものなるも、その後アメリカ以外の代表員の割合は増加して各国に有利となるよう急速なる改正を見た。今日に於ても引続きこの方向の改善は行われつつあるが、なお他に一層重要な変化が生じつつあると著者は信ずる。如何にも数年前に於てはアメリカ外の理事は經驗に於て劣れる傾向があつたが、今日に於ては全然このような事實はない。すなわちアメリカ外のロータリアンも今日は既に十分なる經驗を積み、その所見を發表するに何らの躊躇を要せぬのである。

著者は国際ロータリー会長ヒルの招待により、一九三五年一月の国際理事会に出席した。この時の出席者は北米（合衆国及びカナダ）より八名、その他の諸国より五名、すなわちカナダの二名が均衡票権を保持していたのであった。

もし各国より出す代表員の数はそれぞれのロータリアン総数に比例して選ばれるということであったならば、この場合北アメリカよりすべき理事の数は現在の約二倍を必要とするであろう。しかれどもロータリーは未だかつてかかる問題を取上げたることなく、恐らく今後に於てもまた決してこれなきことであろう。

右理事会に於て合衆国外の理事よりすこぶる有力なる意見が開陳された。かくて彼らに依り真に会議の国際性を濃厚にしていたのであった。

著者はイギリス・ロータリアンによる発展の主張に価値を認めるとは言え、未だその内部的転回説の妥当を肯定することは出来ぬと思うものである。現今の極端なる国家主義の時代に於て必要なるものありとせば、これロータリーの国際性である。すなわち著者は極端なる国家主義より脱出するの途は、事情の許す限り一刻も速かに且つますますロータリーの国際性

を増大發揚するにあると信ずるものである。この目的に応う一面の手段としては、合衆国の伸展を後に譲り専らアメリカ外への伸展を促進助長すること、國際ロータリー会長には従来よりも多く外国人を選任すること、國際大会は従来よりも多く外国に於て開催すること、商取引には国内よりも国外において多くこれに従事すること各国ロータリーの事務員及び會報編集員をしばしば國際的に交換すること、シカゴ本部には一層多数の外国人を備えますますこれを國際化すること等を挙げ得るであらう。もし以上のごとき事柄が順次に実行せらるるに至れば、ごうごうたる内部転回の議論のごときは跡を絶つであらう。

眞の國際的任務とは、この重要な問題に關し眞劍にして科学的なる研究をなすことにある。

ロータリーは有史以来各国人の追隨し來たつた國家主義の後塵を拝せんとするのであるか。または將來の人間社会のために新機軸を施さんとする努力を繼續するものであるか。両者何れに於てするを問わずロータリーは行進を続ける。

駐七〇 近年世界各国は戦争のために膨大な借りを作るはめとなった。教育のために大きな借りを作った国はない。多分戦争と文明の両方の支払いが同時にできるほど豊かな国はないだろう。我々は、そのどちらかを選ばねばならない。二つを同時にすることはできないのだから。

アブラハム・フレックスナー

註七一 Abraham Flexner アブラハム・フレックスナー (1866-1959) イギリ

スの教育家。医学、教育制度整備の功労者として著名。

註七二 ジョン・ゴールズワージー John Galtsworthy (1867-1933) イギリスの作家。一九三二年ノーベル賞受賞。代表作としては「銀の箱」等がある。

註七三 ジョン・メイナード・ケインズ John Maynard Keynes (1883-1946)

イギリスの経済学者。著書に「確率論」「貨幣論」等がある。

註七四 ロード・ビーヴァーブルック 1st Baron of Beaverbrook (1879-) イギリスの政治家、新聞王。第二次大戦中航空機生産相、兵站相を歴任。

註七五 テニソン Alfred Lord Tennyson (1809-1892) イギリスの桂冠詩人。代表的な作品には、「国王歌集」「ウエリントン公の死」などがある。

- 註七六 モーツアルト Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791) ドイツ系オーストリアの大作作曲家。交響曲、ピアノ曲、歌劇等多数の作曲がある。
- 註七七 サー・ノーマン・エンジェル Sir Norman Angel (1874-) イギリスの政治経済評論家。ノーベル平和賞受賞。代表的著書としては、「大いなる幻影」がある。
- 註七八 アンクル・サム Uncle Sam アメリカ政府の意。
- 註七九 セツル・ローズ Cecil Rhodes (1853-1902) イギリスの植民地政治家。アフリカ・キンバレーでダイアの採掘を行い巨富を作る。ケープ植民地首相を務む。
- 註八〇 アーノルド・ベネット Enock Arnold Bennett (1867-1931) イギリスの小説家。代表作に「老妻物語」がある。
- 註八一 トーマス・ハーディー Thomas Hardy (1840-1928) イギリスの小説家、詩人。代表作には、「テス」「埋もれたるジュード」などがある。

XIII

ロータリーに対する評価

会員はロータリーの組織につき自らこれを如何に見んとするか、まずこの考察を施すことなくしてロータリー運動を正しく評価せんとすることは無稽である。会員はすべからず自画自讃を事とすることなく、この運動に對しては最良の批判者たるべきである。ロータリアンはその会員たることに於て果して如何なる価値を認めるであらうか。

右に對して結論を下し得べき徴証がある。ロータリーは歳を閲すること三十年にして西暦の各世紀はロータリーの一年余に當っている訳であつたが、現今では殆んど四千のクラブを算し、それは一箇のクラブに發して三十年間に發達したのである。

そもそもロータリーが最初に成立した一九〇五年二月二十三日より今日に至るの間、会員クラブにしてその誓約を破棄したものは割合に少なかつた。世上多くの団体が朝生暮死のはかなき状態にあることを考うればロータリー・クラブの永續は驚嘆に値する。特にクラブのすべてがその誓約を

確保せんがため活躍しているという事実を見るときは、いよいよ驚歎せざるを得ないのである。経済不況時代に際してもロータリーは絶えずその特色を發揮したことは甚だ顕著であつて、クラブの数が増し会員が殖え、相待ちて着々と進展している。

しからば会員の出席は如何、果して会員は出席を怠らないでいるか、それとも会員は有名無実過ぎないのであるか、この質問に答えて言わん。各会員の出席は少くともクラブの集會数の六割を下つてはならぬ。しからざれば会員資格は喪失すべきものなりと。ここに言う六割とは最小限度であつて、平均すると遙に六割以上であり、各会員の集會出席率は増加するもかつて減じてはいない。これすなわちロータリーの健全なる現状を証するものでなくて何であるう。ロータリーの初期にはクラブ在籍会員の総出席を見ることは破天荒とされた。しかるに今日では会員の一人も残らず出席することは、必ずしも特筆に値しない。仮に一箇のクラブが全会員の総出席せる集會を連続し、且つ期間が可なり久しきに亘るようならばそれこそ注意を喚ぶに足るであろう。全会員の総出席を見る會が十二回或は十五回位連続して開かれていても、今はまたこれを異とせざる状況である。ク

クラブの中には全会員の総出席を毎週一年以上続けて行ったものが三、四十もあり、或るクラブに於ては三年間を通じ一人も洩れなく出席したという好成績を挙げ、また二十年間に一回も欠席しなかつたという記録を有する会員も若干はいるのである。無欠席の記録を有する会員は今後この記録を持続しようとして、自ら大いに精励せずにはいられない。それには絶えず身体の強健であることが最も必要であつて、出席という記録の上では、病気のためならば欠席してもよいという申訳は成り立たない。

平生居住する甲の地の集會に欠席したる者といえども、勿論乙の地のロータリー・クラブに出席したる場合はこれを承認しなければならぬ。こう言う制度上の便宜が設けられなければ、上述の全会員の総出席というような好結果を挙げることは困難であらう。

多忙なる人々を一週に一度その事務所から誘致するには何か強い引力が無ければならぬ。ロータリアンは如何にも強壯に見え熱烈であり、発刺としてその一処になつた元氣は到底これ他に見出すことはできない。ロータリー会員には奉仕する理由と意志とがある。

クラブの集會に出席せんがため昼の一時間半を割くことは必ずしも便

宜ではない。出席するために幾マイルも旅行しなければならぬ時もしばしばある。重要な集會に出席せんがため、數百マイルも旅行せねばならなかつたような極端な場合もあつた。かかる情況を目前にして會員はロータリーを念頭に置くといふ結論を正しく下すべきである。

或るロータリー會員が以下の如く記している。曰く「ロータリーは實際と理想とを調和する如く、又尊崇をもつて友誼と略儀とを調和する。ロータリー・クラブに於ては何人も不愉快な話を試みてはならぬ。殊にまたロータリー會員の妻子も同席する場合に不謹慎のことがあつてはならぬ。この作法は長年に亘れる不文律で重複されている規則でもある。ロータリー・クラブの集會は不愉快な談話をする時間でもないし場所でもないと同じく、クラブの出版物等もまた會員やその家族の感情を害するような場面となつてはならない。それが単に面白いとか、おかしいとかいうような事柄は、ロータリー出版物に掲載される資格がない」と。世の中には金銭以上の尊いものがあるが、その最高の価値に位するものは友誼でなければならぬ。友誼が人心に訴ふる力に感じ、友誼が多くの人々を感化するのを見た時、著者は幾度となく深く感動したことがある。

ロータリーはあえて形式を張り技巧を弄ぶことを禁ずるのは、ロータリーは各人がその地位や身分に頓着せず平等の地位にならび立っているからである。友誼はロータリーのかかる雰囲氣に於てこそ發育するものである。アメリカのロータリー・クラブに於ては會員同志が挨拶をするとき、その苗字の代りに個人名を呼ぶ習慣がある。ただし、かく呼ぶことを要求するものではなく、単に習慣たるに外ならない。甲はこの習慣に追々慣れ乙は自然とこれに和するのであつて、習慣に和さないという人はそう多くない筈である。大抵、新入會員がこの習慣に馴れた時、不思議にもその心が寛いて欣快を覚えるもので、一度この習慣を身に付けてしまえばまた当惑するようなことは無くなるのである。

會員の階級は概して高い方で、何れも実業界に於けるすべての階級を網羅している。故に銀行頭取が食事の席では同じビルディング内の理髪店の主人と並んでゐるのに氣付くことがある。しかしこの場合、銀行頭取は理髪業者と懇意になつた機会を快しとする所にロータリーがある。

父と息子とが双方とも會員となり、ために互に親みを加うる事実もしばしばあるが、かかる場合にはロータリーに重きを為す者は親であるか子で

あるか、これを決定することは難しいことである。多くのクラブ会員名籍には老齡なる隠居同然の実業家達の名も掲げているのは、彼らは出来る限りここに食事を偕にしたり、または教養の資となる催しに加わったりしている、ロータリーの気分を味えば心に喜悅を覚えるからである。

著者自らも老境に入ったが、と角病身であったロータリアンの例を思出すことである。今は既に他界せるも、彼は当時実業家としての経歴を全く終え隠退の身の上であつたが、毎週の集會に出席するために約二十マイルを旅行するのが常で、その定めの席に彼の姿を見ないことは甚だ稀であつた。『バピト』の著者シンクレアはどう富おうとも、このロータリアンは何か価値あるものを得たと推論して間違がないのである。獲物というのは握手に過ぎなかつたかも知れないが、その握手は長途の旅行を償つて余りがあつた。或は遙々出掛けて来て与えられたものは友人の微笑であつたこともあろう。一語にして最善の説教の一つは「微笑」という題目である。人は微笑に慰められてこそ人生の行路を朗かに濶歩する。友情を喚び起すものもこれまた微笑である。微笑は心の中の嵐を鎮めるものである。著者はかつて炎天の午後某停車場に於て、汽車の到着を待っていた旅客が待ち

かねて憤慨して怒号しているのを見たことがある。しかるにたまたま群集の中に一人の微笑を湛えていたものがあつたので、憤慨し怒号していた連中もこの微笑の魔術から脱し得ず、肩を落して静かになった。微笑に迎えられると人は嚴寒の空にも暖かくなり酷熱の下にも涼しくなる。微笑は年がら年中、人心を慰撫するものである。

世間には以上の如き教義を以つて譎言に過ぎずと見做す人々もいる。彼らは微笑などは持合せないと言う顔色で自負している。彼らは実に有頂天で自惚れで微笑というような無邪気な感激を嘲笑し蔑視しているのである。しかるに彼ら以外の人類から見れば、この微笑を解せざる連中こそむしろ片輪者で、微笑を解せざる彼らより蔑視される人々は決して変態者ではない。微笑を知らざる者が普通の人々以上の識見を具えているのでもない。彼らは反つて識見の足らぬ輩である。彼らは他人を判断するに自分一存の標準を用いている。しかもその標準なるものは人々の承認せざる所である。故サイラス・カーチス(註八)は有名なる『ザ・サタデー・イヴニング・ポスト』、『ザ・ウーマンス・ホーム・ジャーナル』、『ザ・カンツリイ・ゼントルマン』の諸出版物を通じて、米国の思想界に力ある感化を及ぼせる

こと他の出版業者とその撰を異にし、彼の自称先進者流が左右することの
できない真の偉人が多くいる。カーチスはその偉人中の一人であった。カ
ーチスは三市のロータリー・クラブの名誉会員を兼ねていたが、メイン州
ポートランドは彼の生まれた町であり、フィラデルフィヤは彼が寄任した
市であり、フロリダ州マイアミは彼が冬を過した所であった。カーチスは
いやしくも事情が許しさえすれば何時でもロータリークラブに必ず出席し
た。自称先進者流はこの尊敬すべき出版業者が、その苗字を以ってせず個
人名で挨拶されるのを耳にして意外としたに達しないが、当人のサイラ
ス・カーチスは平気であった。ロータリアンの間では彼は相変らずサイラ
スであつて、彼もまたこう呼ばれるのを好んでいたのであつた。

サイラス・カーチスの所有せるヨットは世界で誇るに足るものであつた。
或時そのヨットの上で昼餐を共にしながら彼が著者に告げるには、自分の
友人中に、業務の間を割愛して自分と共にヨットで、長期の巡航を楽しみ
得る者が少ないのは実に残念であると。

サイラス・カーチスは朋友を愛し、彼にとつては握手と微笑は無意義の
ものではなかつた。握手や微笑があればこそ人間は生き甲斐がある。

ヘンリー・フォード・ビーチチャー(註八三)は左の如き説教をしたことがあるが、これロータリー精神を喝破せるものでなくして何であるうか。曰く、

「世界に於て微笑するものは人間だけである。宝玉は燦然として光線を反射させ得よう。しかるにダイヤモンドの光といえども人間の眼の輝きと喜悦の明かるさに較べることは出来ない。形容以外花は微笑することが出来ない。微笑は美わしき花にすら求むべからざる魅力である。微笑は人間の特権である。愛と愉快と喜悦の三つの帯びる彩色である。微笑は人間の顔と称する窓に射す光であつて、この光明に照らされて人の心は家に落付き団輿の樂を覚える。微笑し得ない顔は花弁が開かずして莖の上で乾からびる蕾のようなものである。哄笑は明かるい昼で渋面は暗い夜である。しかして微笑はこの双方の間を往来する陽光である。微笑の方が哄笑よりもまた渋面よりも魅力がある」と。

ロータリーは大いに若き会員の加入を奨励することを志している。青年は熱心であり果敢であり随つてロータリー運動に貢献する所が多い。青年、中年、老年各々に働くべき役割があり、万人が互に協力すれば効果はます

ます大である。はたまた元氣満々たる青年が年長の会員から資本の供給を受け、両者が一致して好成績をあげている事業の実例も多く見られることである。

年老いた会員の実業界から引退する時が来ると、ロータリーはこれに対して祝福を示すことがしばしばある。会員は己が属するクラブの集会に出席するのみならず、多くの他のロータリー・クラブの集会にも出席する。訪問者であるロータリアンの方が、その地に居住の出席会員よりも数の多いこともしばしばである。

シセロ(キケロ) (註八四) 言えるあり、人は齡を重ねるに従い益々公務に心を傾けて行かねはならぬものであると。これシセロ(キケロ)は自ら信ずる所があつたことで、此語を言い換えれば、人生の意義を十二分に現わそうとすれば、年をとるに伴つて自分のことはかりを考えぬようにしなければならぬと言うのである。此の世界は真面目に考えるほど実に不思議に見える。地球が回転する毎に新しき異象が現われて人を驚かす。人事は万華鏡の如く、千変万化思慮ある觀察者の心を動かさずしては止まない。人生という競技を見るに、奮励一番技を戦わすべき機会や乾坤一擲の愉快な場面

が夥しくある。かくてなすべき事も場合も沢山に見えているにも拘らず、重要な地位を占めた人がその引退の時節が来ると、最早生きていても仕方がないと考えているものが往々ある。

多くの中には人生が大切に保存したものを悉く盗まれるように思う人もいるが、かかる人は宜しくデヴィッド・グレイソン（註八五）の著『Adventures in Contentment』と『Adventures Friendship』とを読むべきである。必ずや資するところが多くあろう。良友との交誼を喜ぶ人から見ると人生は常に生き甲斐があることである。

自分一身の事だけを考えつつ人生行路の終局に近づいた人ほど悠然なものがあるうか。自我の意志は間もなく消えてしまうが、時間は永続してやまないのである。われらが死んでしまった後にも、尚かこ久しくわれらが愛して止まない世界は前進しているのであろう。古い讚美歌に『漕げや、船夫（かこども、岸へと漕げよ。暗礁に乗り上げし破船を捨てて、漕げや、岸へと』と言うのがある。この歌詞には深い意味がこもっている。

労作は祝福であって呪わしきものではない。人は労作すればするほど自分が力相応に働いているという満足を感じることが出来るのである。しか

し人生は労作以上のもので、徒らに仕事にのみ人間の全体を吸収させてしまつてはならない。米国の実業家はその引退後平均三年を生きて暮らすに過ぎないと言ふことを聞くのであるが、果してしからは、これは使つて損ずるよりも使わないで錆びさす方が易いという諺の真理を証明するもので、実に驚かざるを得ないと謂うべきことである。この世界には数えきれぬ必要な事件があるのかかわらず、引退せる実業家が人生を面白くすることが出来ないとは何という悲惨事であろう。著者の人生に歩み始めた六十七年間は仕事の多い時代であつた。著者は何ものにもこの活動時代を換えたくなかつた。過ぐる四年間著者は法律事務に関する限り自分の名

を引退者名簿に連ねている。神経衰弱という結果は恰も預金を引き出し過ぎた工合に、自分の能力を使い過ぎたから起つたのである。著者は自ら過労に陥らぬようと種々の義務を清算してしまつて、最後に帳面に対して己が能力を首尾よく計算し、今やバランスの剰余を以て別の取引を契約した。かくて今や彼は現金とも称すべき持合わせの能力にもとづいて仕事をなし、かくて人生を楽しんでいる現状である。もしまた二度と閑日月を得れば、彼が実務に立帰らねはならぬことは明らかである。

故フランス・パットン博士はプリンストン大学の尊敬すべき前総長であつた。彼は晩年に著しく耳を損じ、殆んど聴力を失つたので著作に没頭する興味を感じた。同博士が著者に語つて聾せる彼と全く失明した同夫人とは共に大発見をなしたという。すなわち此の夫妻の幸福は視力や聴力を有する点に基づかないと言ふことを発見したのである。博士は視覚や聴覚を損じたため、かえつて心の窓が広く開放されて、そこに美しい思惟世界が出現して来た。先には事件の応接に忙しかつた心の窓は殆んど閉塞していたのであつた。聴力と視力とを失つた虚弱者には何も出来ないのである。否、かかる人でもその志気さえ損せずハットン博士の如くであつたならば、なお己を有用の器たらしめる方法を見出し以て幸福であることが出来るのである。

多年実業に没頭した人々は、その劇務のために緊張した時代には身体の疾患が大したことでないように思ったものが、引退後には偏に疾患が関心事となり、急にそれが氣遣いになることに心づくことで、實際疾患が引退者を悩ませる仕事になる。病院の診断表によると、病気が軽いのに患者が粗忽であるため重体になるような例がしばしばある。かかる例を見て学ぶ

所がなくってはならない。富は人を助けざるのみならずかえって不幸を大きくする場合もあり、貧乏のため意を己が健康に用うることが出来ぬため、かえって達者だという仕合者もある。一時に二つの事を氣遣い、しかして双方を公平に懸念することは難しい。

重大なる如く思われるもの常に必ずしも人生に必要でない。親切、交誼、友情、愛は手軽なようなものであるが、かかる諸性質を首尾よく養い得ない人には閑暇が堪え難くなり、人生が急に消滅するようになる場合が甚だ多い。パットン博士はこれと異なり、物質を主にした考え方を遙に超越した。ある意味からいうと、博士はバイロン卿の意図とも甚だ異なるところがあり、青春の鉱山を鑿って黄金の最後の鉱脈に達したとも称されよう。

ウイリヤム・ライオンズ・フェルブスはエール大学の英文学の名誉教授にして、その甘美なる人生哲学の故を以って、ロータリー会員がこぞって敬愛する人物である。彼曰く、人の幸福は当人の興味の多種且つ深奥なるにもとづく。コロンビア大学のワルター・ピトキン教授は『人生は四十年から』と題する名著を出したがその中に曰く、専門家の期待する人生は事務家の期待するそれよりも勝れていると。曰く、事務家の期待する人生は

労働者のそれよりも勝れていると。曰く、身体を健全に保つ最良の方法は精神の健全を保つにあり、しかして精神を健全に保つべき最良法は、諸問題の全域を健全且つ活発に思考し、以つて精神を刺戟し続けることにあると。これがピトキン教授の説く所である。

著者は最近グラスゴーに於て、ロータリー会員某が大いに自覚したといふ顕著な例を知つた。彼は十五年間病のため全く仰臥したぎりで、体は四肢とも動かすことが出来なかつた。彼の視力が速に去るので字を読むことまでも出来なくなつたが、この勇敢なる人はその訪れる友人を迎えて呵々大笑するのであつた。最近彼が自ら記した所に拠ると彼の痛苦は実は苦惱でなく、かえつて彼の最も豊かなる祝福であるという。その僚友の報知によると彼の病苦は未だに続いているが、彼の徹底せる悟りは却つて多くの悲嘆者を奨励し鼓舞しているとのことである。人生の常態に於て祝福されているわれらは、かかる不屈不撓の意気に鑑み、区々たる憂慮に降服することを恥辱とすべきである。パットン博士やジョージ・ワルカーの如き氣魄を備へることを得れば、何人も境遇というものの悲しき重荷を耐え忍ぶことが出来る筈である。ウエルズ曰く、現代の文化は原料に過ぎない。人々

が志しさえすれば此の原料を用いて真に価値ある何ものかを作り出すことを得るのであると。上に挙げた人々の実例に徴しウエルズの所説を肯んずるに躊躇なかるべきである。

オーストラリアのシドニーのロータリー・クラブは会報ゼ・ピニオン誌を発行しているが、その近刊に左に抄出する一記事が掲げられた。読んで心の爽快なるを覚ゆるものがある。曰く

「われらもし学ぶべきものありとせば、本誌がその卒去を報じて哀悼の意を表するロータリアン、エッジワルス・デヴィッド卿の晩年はまさに好個の教材である」。

「快活にして親切に、しかして曾て不平を呟かざりし卿はその羸弱な病体を駆つて大学やロータリー・クラブに赴くがために努力した。たとえ乗物を使用して行くとしても、行動不自由のためその苦勞は並大抵でなかつた。時にはロータリー・クラブの昼食の際会員が卿の身体を支えて介抱することもあつたが、卿は衆の背後を静かに廻つて匍行し、他人に面倒をかけることを考えるさえ嫌つて自分で用を便じていた。われらが車の中で氣楽に踏反り返っている時、この痛ましくまた快活なる白頭翁は、時に雑囊

を負い杖を携さえて、暴動でも起つたように騒々しい都会の中を骨折つて歩んでいくのであった。卿の威厳と礼讓とは高嶺を吹き下す涼風の如く、我々に清福を与えた」と。

A little more tired at close of day,

A little less anxious to have our way,

A little less ready to scoled and blame,

A little more care of a brother's name;

And so we are nearing the Journey's end.

Where time and eternity meet and blend.

—Rollin J. Wells. (註八六)

ロータリアン、エディ・ゲストは、日常生活の底に看過された美の潜在を探つたというべき人であるが、彼は謂えらく。「凡そ自然界に於て錦織りなす秋の紅葉ぐらゐ美しきものはない」と。彼の詩的想像から見ると、秋の紅葉は葉が落ちて枯れる間際の野外劇であり、大哄笑であり、また最

後の祝典である。ゲストは紅葉を見るととき旧友の終焉を連想した。彼がエッジワルス卿を知っていたら、彼は必ずやエッジワルス卿を挙げて人心を感奮せしむる傑物と做し、その名を偉人伝の中に連らねたに違いない。

ロータリーの見地から言うと、業務は人生の重要事であるが人生の万事ではない。人生には事務専用の所もあるし、それ以外の所に耕作地もあることが認められるが、その仕事場の外に視界の拡がらない人は憐むべきである。かかる人は仕事に成功しても用をなさない。一朝その事業が逆転する時彼は何に助けを藉りようとするのか。その引退する時が来たとき彼は何事に没頭して可いのであろうか。

ロータリー主義を信奉する人は何らかの関心事を有し、これに頼りて大いに助けられることであろう。社会奉仕は人間最上の道楽である。社会奉仕は貨幣や郵便切手の蒐集よりも遙かに心を満足させる。健康と幸福とは物質上の財産よりも遙かに尊い。戸外生活は健康と幸福との両方に寄与する。故にわれらは戸外生活を愛するように努むべきである。われらは鳥を愛し花を愛し景色を愛する。何れの道楽も興味津津々たるものがあるけれども、予の道楽は景色を賞することである。予の常に眺めたいのは、長く連

なる丘陵に手入れの届いた農園が点綴し、その中腹には肥えた牛羊が草を
食み、雲雀や鶉や駒鳥が遠く牧場のあたりに囀っているという風景である。
スコットランドの丘陵は、春になるとハリエニシダや石南の花が咲いてい
るし、ニュー・イングランドの山々には、秋になると砂糖楓が紅

葉している。その何れの景色を佳とすべきか予は未だに決しかねているも
のである。スコットランドの春景色、ニュー・イングランドの秋の風光二
つながら心を爽快ならしめる。我が妻、ジーンは夕陽を眺めては大騒ぎをす
るが、予もまた彼女と共に之に対して心躍るを禁じ難いものがある。

知友にして引退せる者の中、甲は絵筆を楽しみ乙は園芸に興じている。
園芸趣味の乙は、春来りて蕃紅花の咲きそめる時より、秋の終り残菊の散
る頃まで庭上を逍遙している。他の友は読書を楽しみ、史中の大思想家と
交わって歓を極めている。絵画、園芸、読書の趣味は簡素にして健全なる
勉強となり、貧富の別なく万人を裨益するものである。

歳月を経る間にロータリーの価値を語る幾多面白い実話が著者の耳に達
して来る。時々著者の事務所を訪ね、ロータリーは己が一生に最大の感化
を与えたという感激談を、両頬を潤しつつ述べたロークリアンがあった。

ロータリーの徳により主人が立派な人物になった。或いは夫や父はロータリーに加盟して以来思慮分別が円熟して、夫らしき夫、父らしき父になったと告げる婦人達もあつた。

これ等告白の中には時々或いは大袈裟なものなしとせざるも、その実証の発見されんとする結果こそ、まさしくロータリーが到達しようと努めている所のものである。ロータリーの目的は実践にあり、その希望は人生を充実させる所であり、その哲学は健全なる哲学である。ロータリーにはもとより教義として特定せるものなきも、常に寛大を以て他に臨む。

ロータリーの目標はこれを家族関係に局限するものには非ざれども、しばしば家族会の如き催しをなすは、親子や夫婦の責任感を明らかにするようになるからである。所謂少年、または不具児童のための計画等色々のことが行われている。救済を要する児童のために計ることを喜ぶロータリー会員は、自分の子のために無頓着でいよう筈がない。

ロータリー・クラブの集會に漲ざる友情に化せられ会員の人生觀が一変する時がしばしばある。これは友誼というものの不思議な性質を有するからである。著者は聖書の「再び生まる」という句を常に口にしていた人々

を思い出すのである。一例をあげると、イリノイ州の小都会に仮にジョン・スミスと呼ぶ人がいたが、彼は不屈不撓な決心を抱き、他人の補助に頼らずして遂には大工場を設立しその名声は四方に轟ろいた。彼の下に働く千八百人の従業員には毎日正確に給料を支払っていたが、この社長の人となりは徒らに給料を支払うものではなかった。彼は実に稀に見る意志堅固の人物であった。

彼は朝早くから夜更けるまで働き通しで、すなわち四六時中「執務中」であった。彼は仕事に専念して人生の他事には目を配らなかつた。家を出れば其直ぐに事務所へ赴き、その日の用を終れば事務所から家路を指し、かつて左顧右眄、寄り道をするようなこともなかつた。彼には友人もなければ其の必要も感じなかつた。彼は自分だけで足れりとし、自己を中心とした一種の偏窟人だったのである。

一日遠方の或る町にある事務所を訪れたとき、彼の支配人からロータリー・クラブの集會に出席するよう勧められた。実はスミスの心中は他の場所ので昼餐を認めたかつたのであつたが、思い切つてロータリーへの誘引に応じた。出席した彼は、はじめより好感を抱かなかつたのは、ロータリー

は沢山の人が混合った面倒くさい所で、その歌う歌の如きも巧者のものでないと見ていたからであつた。しかるに散会した後、種々様々のことが彼の念頭に浮んで来た。仔細に考えてみるとロータリーの精神には、彼の半生に一度は持ったがすでに亡くしてしまつたあるものが見えたような気がした。彼は終に此のあるものを取戻そうと決心して自分の町に帰り、やがてロータリー・クラブの設立を試みたのであつた。会員達はこの更生せるジョン・スミスを重んずる余り彼を会長に挙げ続けて六力年間もその任に就かせた。数年の後彼が立派な住宅を新築するや、セメントを以てロータリーの徽章である車輪の大きなものを作り、之を家の前面の目立つ所に掲げて通行人に此処にロータリアンのあることを知らしめた。

三年前彼は寄辺なき少年や不具な幼児を救護せんがため、ジョン・スミス基金として四十万ドルを喜捨した。

こういう人がこういう道に踏み入るに至つたのは実に不思議な程であるが、つまるところこれロータリアンの純情に感奮せる彼が、向上して再び人生の大道を歩むに至つたもので、驚嘆に堪えぬところである。実際彼はロータリーを介して人々と親しき社会的接触を保つに至るまでは、未だ真

に人間を知らなかったに外ならぬので、一度これを知るや、彼は他の長所に気づき人々を愛するようになったのである。

ジョン・スミスは最近此世を去ったが、その臨終の近きを知るや彼は著者に向い、「人の寿命は問題ではない。我々は能く己が仕事を果したか否かと言うことのみが大切である」と語った。彼の死により著者は尊き盟友を喪ったことである。

彼は種々の遺言をなしたが、その一つは養育事業についてである。すなわち神の慈悲によつて生れながら不幸の境遇にある嬰兒を養育する施設であつた。ジョン・スミスはこれを成就して今や天与の休息を得ようとしている。無数の人々がかつては朋友を有せざりしジョン・スミスを頌徳し、また彼の新生という奇跡がロータリーの友誼精神の結果であると証言している。いわゆる知識階級の或人々にはジョン・スミスの心境がわからなかつたかも知れないが、よく彼を熟知するものには実に明々白々であつた。ロータリーの目標とする如き単純な觀念が各方面に普及し、またこれが多くの国々に定着するに至つたことは、むしろこれを奇とするものがすくない。そもそもロータリーがかかる効果をあぐるに至つたのは、是全く

その本質をなす単純性に負うているものと著者は考える。ジョン・スミスの如き人がロータリーには幾千となく居り、人間の単純且つ不思議なる性質である友誼の力を以て、十分に且つ豊富なる生活を味わっている。地位あり品性ある人々が常にロータリーを發達せしめこれを賛成している、批評家の所説の如きは関する所ではない。

「生き甲斐ある生活を営み、いつも朗らかに笑い、大愛を有する人こそ成功に達する。識者からは尊敬をうけ、可憐なる子供達の友となる人がそれである。身分相応の地位についてその仕事を成就する人である。罌粟けしの花を見事にし或いは珠玉の如き詩を作り、または救済事業に当たるのである。その何たるを問わず、いやしくも社会のために有用の事あらはこれに任じ、自己の生れて来た時よりもその死するの時に、世の中の少しでも良くなるのを見ようと努力する人である。世界の美を鑑賞してこれを表現する人である。常に他人の中に長所を發見しようと努めると共に、己が持つてる長所を惜まらず他に与える人こそ成功者である。かかる人の生涯は我々を感奮せしめ、これを回想する毎にわれらは祝福されるのである」。

確立した男子だけがロータリー会員たることを得るのであるが、クラブの中には成人教育の講座も設けられ次第に高尚な課題を踏むようになっていく。ロータリーでは日常生活の実際の価値を考出し、これを有用ならしめる方法を会員に教えているのである。昔は子供が学校を卒えると教育という仕事が完成したかのように考えられた。小学級以上に昇ろうが中途退学しようが一向頓着なく、教育を閑却していた時代があつた。新たな標準から見ると人の一生は悉く教育の課程である。茲にいわゆる成人教育運動とは、商業に従事したり専門の職務に当たれる相当に齡をとつた会員を集め、これに時代におくれな訓練を授けることで此の教育法は世の賞讃を博している。ロータリーは進んでかかる成人教育運動に賛同しているのである。学問には年齢の差別はない。誰でも若い気持で勉強すべきである。

毎週開くロータリー・クラブの集會、委員會、幹部會、各市連合の會合、區部會、會長及び幹事の集會へ國際ロータリー評議員會、國際ロータリー大會等のあらゆる集會は、大いに公民國家及び國際という意識を覺醒せしめ、思想の標準を向上し理想を廣大ならしめ、相互の理解を助長せしめんがためになされている。

會員同志が友誼を厚くし自他を教育することはロータリーの課程に於て最も大切である。シカゴ・ロータリー・クラブの書記長はかつて言った。

「シカゴのロータリー會員は必ずしもビー・オー・ジョオンズが會員の中にいたから著名になったとは思わないが、彼を有していたからシカゴ・ロータリー・クラブが名高かつたのである」と。陽気な性質のために「日光」という渾名をつけられたジョオンズは、二十四年の久しき間幾千の人々を助けまたその氣分を引立てた。彼は悩める人のために慰問の使節だったのである。

ロータリー・クラブの會長に選挙されることを名譽とする理由は、會員が選挙された會長に信任という極印を捺すからである。否、そればかりでなく、會長という名譽を冠せられた人はロータリー理想の代表者になったという意味からである。その任期間會長は毎週會員の前に現われるのであるから、會長は多くの人々の模範となり、人々は意識しつつあるいは知らず識らずの間に、己が生活に會長を典型とするのである。國際ロータリーの會長に選挙されることは更に大なる名譽である。この地位に就いた人は、世界の會員全体に対してロータリーを代表し且つこれを証拠立てる。彼は

何れの国人であろうともその代表する国の人格を例証して立つのであるから、他国のロータリアンその会長を出せ

る国家の新理想を窺おうとするのである。かくの如き人物がその堂々たる姿を示すだけでも尚且つ驚嘆に値することである。

合衆国以外では、カナダの三人とイギリスの一人とがロータリーの最高名誉を受領した。彼らを知り且つ敬愛するに至れる人々は、以前よりもカナダやイギリスに就いて一層多くの好意を抱くようになり、ロータリーの運動に対して甚大なる貢献をなしている。

国際ロータリーが常に適任の会長を選挙して今日に及んでいることは幸である。歴代の会長は能く各国のロータリー・クラブを国際ロータリー運動と和合せしめ、且つ社会一般のために大なる寄与をなしている。著者はこれら会長の労を認め、これを特筆大書せんとするも、はなはだ難しきを覚えるのである。また彼らが表明せる忠誠、精進、犠牲的精神はいかにこれを礼讃するも尽し難きものがある。著者は努めて彼らのロータリー指導の跡に種々のものが存していることを述べてみたいが、これを誌するは終にロータリーの歴史を編集することとなり、それには非常の大冊を要す

るが故に他日を待つこととする。

以下に記すところ、敢えてこれを以て国際ロータリー会長の諸徳を表せんとするものではない。ロータリー運動の進歩発達に貢献著しき彼らの特徴に就き、単に著者の印象的観察を掲げるにすぎない。

グレン・シー・ミード(註八七)

正直

ラッセル・エフ・グレイナー(註八八)

柔和

フランク・エル・マルホーランド(註八九)

雄弁

アレン・ディー・アルバート(註九〇)

典雅

アーチ・シー・クランプ(註九一)

敬虔

イー・レスリー・ピッツジョン(註九二)

基督教主義

ジョン・プール(註九三)

謙遜

アルバート・エス・アダムス(註九四)

友誼

エステス・スネデコル(註九五)

勇氣

クロフォード・シー・マツカロウ(註九六)

理解

レーモンド・エム・ヘーヴンス(註九七)

快活

ガイ・ガンデーカー(註九八)

ユヴェレット・ダブリユウ・ヒル(註九九)

ドナルド・エー・アダマス(註一〇〇)

ハリー・エッチ・ロジャース(註一〇一)

アーサー・エッチ・サップ(註一〇二)

アイ・ビー・サットン(註一〇三)

エム・ユージン・ニューサム(註一〇四)

アルモン・イー・ロス(註一〇五)

シドニー・ダブリユウ・パスカル(註一〇六)

クリントン・ピー・アンダーソン(註一〇七)

ジョン・ネルソン(註一〇八)

ロバート・エル・ヒル(註一〇九)

綿密

多方面

理想

強固

親切

温厚

俠氣

競技的精神

人格

能率

外交

愛嬌

上記の中、他界せるはアルバート・エス・アダマスとレイ・ヘーヴンズ
の二人に過ぎざるを思えばロータリーは真に多幸と言うべきである。自余
の会長たりし人々は何れも健在にして長老統率者の一団を作り、いかなる

大問題にも直面しました個々の所信を果たそうとしている。

著者は僚友にして会長たりしこれらの人々を悉く熟識することを得、またその友誼に浴することを得たことを僥倖とする。しかししてまた己が姓名の常に彼らと連ね記せらるることを付言するの不可なかるべきを思う。

著者はしばしばロータリーの創始者として紹介された。カナダのゼームズ・ホイラー・デヴィドソンと陸軍大佐レイトン・ラルストンとが、オーストラリアとニュージージーランドとにロータリー・クラブを設立せんがため、両国を巡回しようとして出発した。二人は著者と其の行を共にしたいという希望を語り、或会合の席上その一人は、ロータリーの建設者と会談せずしてかかる重要な使命の途に上るを得ずとまで言った。創始者と称せられる人は、これを聞いて感激に耐えざるものがあつたけれども、それは彼の仕事の価値が過大に認められたためにすぎぬと告げたのであつた。彼らの著者を見んと希望は、大河の源泉に面したいというのと同じようなものであると、チェスレー・ペリーは言ったことである。右の比較は当を得ない所が一つある。それは河というものは一つの源泉から起るものではなく、数百の細流が合した総量であつて、幾多の細流が各々山間より注いで

来て大河の水路をなしたことである。ロータリーの閱歴もまたかくの如くで、ロータリーは情豊かにして心寛き多数人の相率いて同運動に貢献せる総量である。ロークリアンの中にその源泉に比すべきものがあつたとするも、ロータリーの中に源泉と共に教条の流派のあることを記憶せざるべからず。合して混々昼夜を分たずに流れ、かくて水勢次第に強く抵抗すべからざるものとなつているのである。ロータリーにはチェスレー・ペリーという不屈不撓の一と筋がある。

ロータリーの遠く極東にまでも普及したことは、会員の奮励を示す立派な実証である。彼らはロータリー主義のため自己を犠牲にしてさえ努力した人々である。故ゼームズ・ホイラー・デヴィドソンはこの種の会員中の筆頭である。ゼームズをジムと呼ばれた彼は数奇な閱歴を有し、日露戦争の頃は新聞通信員であり、極東の各地に於て米國領事を務めたこともあり、ペアライ海軍大將と共に北極探検に加わつたこともあつた。カナダ・カルガリーのアルベルタ・ロータリー・クラブの会長たりしこともあり、陸軍大佐ゼー・レイトン(当時ハリファックス・ロータリー・クラブの会長にして、その後カナダの国防大臣に就任した)と共にオーストラリアとニュージ

ーランドとを訪れ、両国にロータリー・クラブを設立したのであった。一九二八年彼と夫人リリアン及び令嬢マージョリーとは国際ロータリー理事会の招請により、約八カ月間の予定をもってロータリー運動のため地中海沿岸の東方諸国と東洋とを巡回した。一行の旅程は実に二カ年半を費したが、エジプト、ギリシャ、トルコ、パレスチナを過ぎ、イラク、シリア、ペルシャ、インド、セイロン、ビルマ、マレイシア、蘭領印度諸島、シヤムを経て、支那、満州、朝鮮、日本、フィリッピン諸島をも訪れたことである。

これら諸国に設立されたる二十余のロータリー・クラブは、頗るジムの力に負うものがある。彼は自己の信ずる所に従つて計画を進め、本部承認の手續に通ぜざりしたため、後日更に改めてロータリー・クラブとして承認を受けたものもあつた。ジムには数カ国の政治界及び実業界の有力者からの紹介状が用意されてあつたので、彼は到るところの最高の公職吏を説き、ロータリーの組織を進めること

を得た結果、地位あるヨーロッパ人と土着の人々とが相伴うてロータリー・クラブに参集するようになった。ロータリアンは宗教上、政治上、社

会上の区別を認めず、出来るだけ都市の重要な実業や諸職業の眞の代表者たるを求めぬ。故に厳格なる階級的区別や社会的慣習は、ジムの此のロータリーの所論の前に譲歩せざるを得なかつた。

デヴィドソン一行は幾多の困難に遭うたが、天意は彼らを冥護した感がある。マレイの森林を旅行した時自動車がある茅葺小屋の集団した地点で大破したことがある。一行は溝の中へ投げ込まれて殆んど溺死するところを、土人が飛び込んで彼らを救助した。また或時はジムは熱病に犯されマジョリーは毒虫に刺されたが危うく死を免れた。しかも彼らは屈せず撓まらず東洋各地にロータリー設立のために順歴を止めなかつた。ジムは十四カ国の実業を主とし種々の職務を帯びる人々の集団を設置し、リリアンは『ロータリアン』誌上に好評噴々たる寄稿をなし、世界のロータリー会員をしてその發展に刮目せしめた。シヤム皇帝プラチャトラ殿下は、シヤムのバンコックに於けるロータリーの発起者となられ、マレイの諸公はロータリーの会員となつた。

スエズの東には種々の重要問題が起つて居り、しかしてこれらの異なる国家、民族、宗教上の諸団体をして相互に理解せしむべき唯一の動因力は

ロータリーであるとジムは断言した。彼は東地中海から東洋各地を巡って支那、日本にも赴き、各地のロータリー・クラブを連繫せしむることに努めた。

これ等ロータリー・クラブはいわゆる前哨の連鎖をなし、これより好意、寛大、国際親善が放射して、アジアに混在せる無数の人々の間に限なく光被するに至るであらう。

ジムの組織したロータリー・クラブの中には、ギリシヤのアゼンス、パレスチナのエルサレム、エジプトのカイロ、インドのボンベイ、デルヒ、マドラス、セイロンのコロンボ、ビルマのラングーン、タエティミヨ、同盟マレイ海峡のクアラ・ルムプル、セレンパン、イポ、クラング、ジャワのバタビア、バンデング、マラング、セマラング、スマトラのメダン、海峡植民地のシンガポール、マラッカ、ペナン、シヤムのバンコック、支部の香港に於ける等がある。更に彼はイスタンブール（コンスタンチノプル）、ダマスク、バグダッドを順歴視察したが、これら各地の状況は、当時彼の意見に拠ればロータリー・クラブにとつて不利であつた。

ジム及び家族がロータリー設立勧誘の大旅行に上つた時ジムの健康は、

はなはだ勝れなかった。しかし北極の酷寒の経験を有せる彼は使命を聞いて直ちにこれに応じ、この重責に当つたのであつた。帰來の彼を迎えて友人連は彼がいかにその全力を尽くしたことを明らかに知つた。間もなく彼は此世を辞したが、ロータリーの大使節として其名を不朽の記録に刻んだわけである。彼は実にロータリーのため献身事に当たり、内心の満足の外何等の報を受けないという人々の長き且つ顯著なる列の中の第一人者であつた。

ロータリアンの献身的精神が種々の形により、また往々その個性の表現によりて著しきものがあつた実例は数多くある。ロータリー精神を個人として最も善く実行に移した人々の筆頭に、ワシントンのジョージ・ダブリュー・ハリスがある。写真師として過ぐる三十年間米国大統領は悉く彼の友人であつた。ジョージの特異とすべきは、毎年開く国際ロータリー大会の時SAAとして会場整理の役目を得意としていた事である。毎年彼はロータリー大会の開催地に赴くを常とし、遠近を問わず大概その家族をも同伴した。今は何人も彼を知らざるものはないが、彼は何時も滑走する如くに速やかに己が役割に就いた。凡そサーゼントの役を自ら選ぶ者は稀であ

る。独り彼が進んで此の厄介なる職務を引受けた精進の故を以って、ロータリーに於けるサーゼントの役目は堂々たるものとなった。

註八二 サイラス・カーチス Cyrus Curtis (1850-1933) イギリスの出版業者、新聞経営者。サタデー・イブニングポスト、ニューヨーク・イブニングポスト紙などを経営。

註八三 ヘンリー・フォード・ブーチャー Henry Ward Beecher (1813-1887) アメリカの牧師。名説教家として知られている。

註八四 シセロ (キケロ) Cicero (前106-43) ローマの政治家、雄弁家。
註八五 デヴィッド・グレイソン David Grayson (1870-1946) アメリカの著述家。ベルサイユ会議に米国情報局長として出席「平和会議の歴史」等を書いてピューリッツァー賞を受賞。

註八六 一日の終りにはもう少し疲れているように 明日のことについてはもう少し呑気に 他人の非難や叱責にはもう少し無邪気に 兄弟同胞のことはもう少し気にかけて そうする時、我々は時間と永遠が一致混然とする旅の終りに近づくことになる

ローリン J・ウェルズ
註八七 グレン・シー・ミード Glenn C. Mead 九二二—三年度国際ロータリー会長。

註八八 ラッセル・エフ・グレイナー Russell F. Greiner 一九三二—四年度国際ロータリー会長。

註八九 フランク・エル・マルホールランド Frank L. Mulholland 一九四一—五年度国際ロータリー会長。

- 註九〇 アレン・デー・アルバート Allen D. Albert 一九一五—一六年度国際ロータリー会長。
- 註九一 アーチ・シー・クランプ Arch C. Klumph 一九一六—一七年度国際ロータリー会長。
- 註九二 イー・レスリー・ピッジョン E. Leslie Pidgeon 一九一七—一八年度国際ロータリー会長。
- 註九三 ジョン・プール John Poole 一九一八—一九年度国際ロータリー会長。
- 註九四 アルバート・エス・アダムス Albert S. Adams 一九一九—二〇年度国際ロータリー会長。
- 註九五 エステス・スネデコル Estes Snedecor 一九二〇—二一年度国際ロータリー会長。
- 註九六 クロフォード・シー・マツカロウ Crawford C. McCullough 一九二一—二二年度国際ロータリー会長。
- 註九七 レーモンド・エム・ヘーヴンス Raymond M. Havens 一九二二—二三年度国際ロータリー会長。
- 註九八 ガイ・ガンデーカー Guy Gundaker 一九二三—二四年度国際ロータリー会長。
- 註九九 エヴェレット・ダブリュウ・ヒル Everett W. Hill 一九二四—二五年度国際ロータリー会長。

- 註一〇〇 ドナルド・エー・アダムス Donald A. Adams 一九二五—二六年度
国際ロータリー会長。
- 註一〇一 ハリー・エッチ・ロジャース Harry H. Rogers 一九二六—二七年度
国際ロータリー会長。
- 注一〇二 アーサー・エッチ・サップ Arther H. Sapp 一九二七—二八年度
国際ロータリー会長。
- 註一〇三 アイ・ビー・サットン I. B. Sutton 一九二八—二九年度国際ロ
ータリー会長。
- 註一〇四 エム・ユージン・ニューサム M. Eugene Newsom 一九二九—三〇
年度国際ロータリー会長。
- 註一〇五 アルモン・イー・ロス Almon E. Roth 一九三〇—三一年度国際ロ
ータリー会長。
- 註一〇六 シドニー・ダブリュー・パスカル Sydney W. Pascall 一九三一年—
三二年度国際ロータリー会長。
- 註一〇七 クリントン・ピー・アンダーソン Clinton P. Anderson 一九三二—
三三年度国際ロータリー会長。
- 註一〇八 ジョン・ネルソン John Nelson 一九三三—三四年度国際ロータリ
ー会長。
- 註一〇九 ロバート・エル・ヒル Robert E. Lee Hill 一九三四—三五年度
国際ロータリー会長。

XIV 宜伝

虚偽を摘発することが往々尊い本能の反応であり、またそれが、はなはだ必要の時がある。真に能く理解せるものが虚偽を暴露し、かくて誤てる者を利益せしむるといふ使命を持つので、ここに於てか批評家なるものが生ずることである。

思慮に富める批評家はその言葉に注意する。これは畢竟己が所業に対する熱心を誇張せざらんがためである。過失は人間に免れない。しかして批評家もまた人間である以上、時にその批評の対象に就ての記述が足らず自ら過失に陥ることなしとはしない。また彼らあるいは自己の誤解により失敗することもあるかも知れない。

他人の行為に対する正しき判断は、自己の性質が常態であると誤信しているものには望み難きことである。普通の人の正常なる反動が、全く異なる感情を有する人よりは誤って判断され易いものである。ハーバート・スペンサー(註二〇)に言わせると、感情を正路に導く教育はいわゆる知的

能力を教育することよりも重要であると。心理学研究者や現代の教育家は、スペンサーのこの説を真理と認めているが、ロータリー運動を民衆から隔離させないように希っている同会負は、またこのイギリスの大哲学者が人間の感情を社会秩序のために訓練するの重要性を認めたという事実にも、満足しているものと思う。

ロータリー会員は、これを批評する人々の目には往々不自然なほど熱烈に、また突飛でもあるように映るかも知れない。人を歓迎する場合などにロータリアンの熱烈振りは誇張にも見え、むしろ衒示と思われるかもしれない。しかれどもそれは自然であり純粹である。

ロータリーは富豪階級然たる組織に向おうとした。しかしイギリスに在つてはあくまで商店主の国民たり、アメリカに於ては豚缶詰業者の国民たる如く各国にはそれぞれの特色がある。しかしてロータリーは両国何れにも依然として有望であり、富める者も貧しき者も、公侯も庶民も相携えてロータリアンになつてゐる。

或著名な批評家に言わせるとアメリカのロータリーは浅薄で傲慢で頑固で、偉大なアメリカの現状に全く満足しきつていて、他の伝統と容れざる

意見を排斥しているものである。また評してアメリカのロータリーは世界の平和をのみ夢みて居り、却つて燦然たるアメリカの現状に不満を抱く実行不可能の改革者が計画したものであるとも言ふ。しかるに事実を徴してロータリアンは甲とか乙とか一方に偏するような極端なものではない。彼らは偏えに最善を願ひそれがために進んで献身する理想主義者である。世の批評を招くことなくしてロータリー運動の調和を遂げようとは期待すべきでない。ロータリーは既に顔著なる地位を占むるが故に専門批評家の目標となる。ロータリーの集會が和氣靄然として形式にとらわれる所のない結果、感興を無邪氣にあらわす興奮しやすい會員はしばしば興に乗じて有頂天になる時があるが、かかる現象は兎角非難を招く機會を作る。先ず自ら滑稽化する者は他から滑稽視され易いものである。

更に一つ非難に対し注意すべきは、凡そ際立つた呼名や特別の言葉を用いたがる人間の性癖から、「奉仕」という語はあまりこれを繰り返さずと陳腐とされることである。ロータリー、キワニス、ライオンズ等の諸クラブは往々「奉仕クラブ」と概稱されている。用語が脱線してこれがためかえつて運動の助けられることもあるが、ために亦運動が破綻する時もある。

これ「信心」が極度に用いられればかえって迷惑するという諺と同例である。

際立つた言葉や熟語は人をしてその真面目か否かを疑わしめ、ついには不真面目という判断に帰着することがある。現にロータリーにみられている傾向は、その場限りの用語を余りしばしば繰り返すことを止め、その表現方を大いに莊重にすべしということである。「役に立つ」という語は「奉仕」というよりも仰山ではなくむしろ適切である。ロータリーは実業家の団体にして、実業人は足を大地に踏みつけて着実ならんことを好むものである。

祈禱を捧げて開会するという行事が批評的の的となり、また偽善の証拠であるとまで攻撃されて来た。しかるに元来宗教的勤行に無頓着な多数の会員を含むロータリーに於て、祈禱を以つて開会することが反対なくして執り行われ、期待した効果があったと信ぜられている。即ちこの仕方が集会の調子全体を高めるようになったと信ぜられるに至った。

更に一步を進めて言い得るかも知れない。ロータリーに於て神の祝福を祈るといふ行事は頑冥な信仰に味方するよりもこれに反対なことである。

蓋し祈禱者を選ぶ時こそ偏頗の処置に陥つてはならぬからであると。ある日の祈禱者はプロテスタントの牧師である如く、他の日には、カトリックの司祭なることもある。更に別の日にはユダヤ教の教法師が祈を捧げるかもしれない。信教の自由が行われている国々では、モハメッド教徒だろうが、仏教徒だろうが、その形式の如何に頓着せず人々に馴染みのある祈禱が開会に際して捧げられて満足している。理論の上から祈禱を不快に思う者は、凡ての宗教形体は文化の敵だと思ふ人々だけであつて、かかる狭溢な見解を抱く者はロークリアンには多くない。

しかし批評は当然人事に存すべきもので、批評を省みずしてよく其外に超然たるを得る者はほとんどない。我々は妄りに批評と戦うべからずとすると共にこれを雲煙過限視すべきでもない。批評を自己の目的に資することを得る場合はよろしくそうするべきである。ロータリーに対する批評の多くは、ロータリーの実際を究むることなくその皮相のみを論じている。勿論これらの批評は多くは他を毀損するに過ぎぬものであつたが、また時に正鵠を得たこともある。批評家にして真にロータリー運動の歴史と生活とに通暁するを得れば、この題目は敢えて佳境に入ることなく、またこれ

がために一般の人々は、かほど賑わった乱曲にもあずかり得なかつたことであろう。

ロータリーは好んで批評に応じたが、その論ぜられた所は大体に於て推賞をかち得たものであつた。代表的な批評家がしばしばクラブに招かれて演説した事がある。シカゴのロータリー・クラブの如きは、最も著名なる批評家の一人をして思う存分に演説させた。

著者は特にシカゴ大学の社会科学の専門家から選出した委員の、思慮撤密なる批評に注意せねはならぬと思う。彼らの批評を非實際家の妄想とみなしこれを抹殺すべきではない。彼らは決して浅薄でないのみならず、彼ら委員にはロータリー文書を研究しまた多くのロータリー会員と協議する機会が十分に提供された。委員はかかる機会に恵まれているから彼らの批評は悪意をもつて激発していいない。即ち彼らの批評を鼓舞せるものは好意であつた。その批評は、自ら満足せるクラブを動かしてその惰眠より覚醒せしめ、無頓着のクラブを幻惑より離脱せしめる効果があつた。即ち凡てのクラブを向上せしめ一層高き責任を感じしめたのである。かかる真摯なる批評は、バーナード・シヨウ(註二二)の「ロータリーの行先が俺には判

る。昼餐を食べに行くのである」というような軽薄なる批評とはその精神に於

て著しく異なっている。しかもシカゴ大学選出の委員がシカゴ・クラブに提出した推薦の一つにより、将来論争をかもす虞れのある定款の附則も変更するに至った。シカゴ・クラブの此の修正に賛成せる決議は大多数をもつて通過し、此の種題目に関する討議は完了したと言つてもよいのである。

該委員の報告は相当の時間を費し、且つ頗る巧みに問題を取扱つた。茲にロータリーという世界に普及せる組織の力が、大いに活用さるる最上の機会が横たわつていとされた。シカゴ大学選出の委員からみると、シカゴのロータリー・クラブは勢力のある約七百名の実業家を以つて成立し、これ等の会員は種々の商業や職務に従事せるをもつて、同クラブは社会の重要問題を討議する理想的議場であり、公共の指導者を養成する理想的団体を為しているのであるから、委員の目にはロータリーの前途は最も有望で、会員は区々としてただに博愛慈悲の方面の尽力に止まるべきものではないと考えられている。しかし著者はロータリーが現在必要として力を致している方面が油断のないことを望むもので、ますます実験を重ねてその

行程の裁智が明らかになるまでは、是非ともロータリーの現状を継続して欲しいのである。

凡そ一つの団体が発展して更に飛躍をみんとするには、必ずや試煉に遭遇しあるいは錯誤に陥ることもまぬかれない。此時に当り最も重きを措くべきは、忍耐もつて実験を重ねる精神態度を持し、且つこれを継続することである。かつて、ヘンリー・フォードが新聞通信員と会し、食下は自ら進んで或る失敗を認めるや否やと訊ねられたとき、彼の大工業家は答えていうには、自分は一度も失敗した覚えがない。自分は多くの実験を試み、その中の或る実験は成功しなかつたという丈のことに止まるのであると。

自説を誇りに主張することは人々の陥り易いところで、指導者を多く有する大団体に於て殊にしかりである。自説を固持して遂には偏狭に失するに至るは人情である。人は自分の行く道がはなはだ明らかに見えるほど他人の道ははつきりしないものである。著者は己に弱点があるから特に上叙の困難に気づいている。著者は公平を期し臆測を斥けて、実験という精神態度を抱こうと努めているが、明らかに失敗したことがしばしはある。

ロータリーに於ても他の団体に於けると同様に、その根本義というこ

とが頻りに論ぜられるが、そもそも根本義とは何であるか。例えば論争を
かもす政治問題に就いて討議するのをやめることがそれであるのか。久し
い間しかりと考えられていたのであった。多くの会員の信条に拠れば、ロ
ーターリーが民族も信仰も異なる多数の人を合して友愛するを得たという未
曾有の成功は、一つの事実に基いている。即ち会員が此処にロータリーと
言う神聖の場所を発見し、彼らは宣伝に乗せずまた転宗を強いられないと
いうことである。ロータリーが異民族、異宗教の人々を集合してこれを一
致せしめ得たのは、この事実に即している。とロークリアンは信するのであ
るが、これはロータリーの会員を獲得する強みでもありまた弱みでもある。
結合せしむるものはセメントであると同時に、これが取捨に注意
せざれば建築物を粉碎させる爆発薬ともなるのである。

ロータリーが国際的性質を帯びて来た今日、特に旧組織の維持が大切で
あると提議するものがある。国際的境域に入るの時、人は徐ろに自国のた
めに思うと共にますます他を親切に遇すべきである。彼は説教せず保護者
ぶつて話さず、講演も演説もむしろこれを為さざるを可とす。此種の事に
のみ没頭するとかえってその目的に遠ざかる結果となる。数輪の花もこれ

を数々に利用し得る如くに、演説という花も如何様にもこれを遣ることが出来る。人は行くところとして可ならざるなきを上乘とすれども、さりとして多弁迎合をよしとするものはない。先ず誠実を第一とし、若し優美な思想が浮んでこない時はむしろ黙止するに如かずである。しかし我々は互に一つの大家族を為し、共通の問題を有する以上冷淡に過ごしてはられない。親切なる申し出に対して何時にてもこれに応ずるの覚悟がなくてはならぬ。

自国が軽蔑され、はなはだしきは罵詈の声をきくが如きことあらば、實際親善のためとて沈黙を守らざるべからざる理由はない。自ら正しうして他の攻撃を招かざると共に、他の不正を是認せずという態度を示すことをよしとする。此の如くなればよし内に自国人の非難を蒙むることがあつても、外に他国人の挑戦を排除することが出来る。一たび国際間の論争に面しロータリーがその渦中に投ぜねばならぬ時には、其処に関税、借款、軍備その他何の問題があろうとも、我々は善意をもつてこれに処し、悪意をもつてこれに向わないように常に鄭重でなければならぬ。

著者は深く教育に興味を有し、ロータリーが国際問題の理解を助長する

上に絶えず寄与せんことを希う故に、偏頗なる教育はむしろ無きに如かずと思つてゐる。仮りに一国の代表者が自国の立場を述べんがために、ロータリー・クラブに出席を許された時には、同国人にして反対の意見を抱く者もまた出席して、彼らが一般に認むる立場に就いて述べなければならぬ。これ著者の信じて且つ主張せんとする所である。凡そ重要な論題に就いては、賛否双方の意見を併せて傾聴すべきであつて、しからざればむしろ双方の意見を聴かざるを可とする。著者は法律家として、裁判が原告何れか一方の主張が強ければ、概ね其方に味方するといふことを知つてゐる。宣戦布告に関する国家の政策が多くは片開きに基くといふ事實に悲惨がある。

何れにせよロータリーは常に一種の問題解決方法を見出すから、決して紛糾を見るような場合はない筈である。ロータリーが逢著した凡ての問題で、事の国際間に開した場合ほど忍耐と辛抱とを要したものはなかつた。もしも実験という精神態度を保持し、自説を誇らしげに固持することをやめ、周到の注意をもってロータリーを国家主義の宣伝機関たらしめないようにすれば、必ずや尊い結果がロータリーから出て来るに相違ない。如何

なる場合にもロータリーはその組織を自治範圍に止め、もつてその組織内に於て自由に実験を試みるということを各クラブの特権とすべきである。ロータリーは長年に亘つて一定の方針を取つて来ている。すなわち各国のロータリー会員をしてその国々に最も良く適した仕方にてロータリー精神を遺憾なく現わさしめるといふ方針がそれである。アジアの希望は、必ずしもヨーロッパの要求と同一ならざるものがある。凡ての会員はロータリー精神を各々の地域に適所せしめ、しかしてこれに満足を見出し、るのである。我々はロータリーの共通の目標を見出す方向には、既に可なり前進して来ているものと著者は信じている。アメリカのクラブは、従前よりもヨーロッパのそれに近似してきていると共に、一方ヨーロッパのクラブはアメリカのロータリーの中にはじめは認めなかつた価値を今は発見している。

大学選出の委員が友誼に下した解釈は興味がある。特に「ロータリーの友誼は奉仕を穀損するや」の題下に記した所ははなはだ面白い。その要旨は次に記す如くであるが、結局切実なる質問としてはロータリーの友誼は果して眞の社会奉仕に到達するものか、或いは反つて社会奉仕を穀損する

ものか、「挨拶と集会」を事とするロータリー会員は、口にロータリーの理想を喋々と語るが、実は元来個人同志の親密和睦に興じている輩であるのか、友誼を内心に盛ならしめるとは何の謂であるのか、ロータリー会員とは個人あるいは団体の活動を通して奉仕という理想を成就せんがため、外観だけの友誼を盛にしようとして親睦している有力な実業家や専門職業人であるのか、というにある。

即ち委員がシカゴ・ロータリー・クラブの会員に試問を送った中に、友誼に関しても質す所あり、その解答に徴して以下の如く結論しているのである。「会員の大多数は熱誠且つ親密なる交情によって一致している。この親愛は自らこれを保持して行くのには十分なものであるが、ここに奉仕という理想を連成せしむるに当り、これにより個人や団体の活動を激励するにはなお不足を感じる所がある。ロータリーの友誼はそれ自身全く望まじきものであり、奉仕という理想の概念に対して心理学的基礎を据えてゐる」と。

更に委員の報告に曰く「ロータリーの普及せる友誼は、他の社交クラブや集会所に現われたる友誼と似通っている。友誼はもとより必要なるが故

に存在するのである。近代の都会文化は兎角人情を冷却し混乱させているから、何らかの親密なる人格的關係が社会上の善徳として歓迎さるべきである。然るに實際友誼なるものが望まじき種頭の奉仕を助長せしめていない。故にその方策という問題が起らねばならない。即ち『バビット』の一書に滑稽化せる如き友誼にはあらずして、積極的で社会的で顕著なる事業計画に精励するため、社会上にも個人間に於てすると同じき友誼を要する。ロータリーは此種の友誼を助長させるため、種々の計画や団体事業に向つて大いに力を致すべきであるという方策の間膚が起つてくる」と。

著者の見解は既に叙述せる所の如く、会員の大多数がロータリーの事業に参加活動するに至らんことを庶幾しつつ、その事業を發展せしめまた興味を生ぜしむるようたえず努力することを良策とする。上記の觀察は、専らロータリー運動全体の中の最大なるシカゴ・クラブに基くものであるが、兎角大なるクラブは討論クラブたるよりも傾聴クラブになりがちであることとを讀者は知ることであろう。大なるクラブには常に有名なる演説者を外部から招待し、会員相互が討議する機会の少ない傾向がある。シカゴ・クラブの如きは委員のみをもつてしても、小クラブをいくつか集めた会員の

総数よりもはるかに多く、この委員会がある程度まで一般クラブ員として親密の欠くるところを補っており、ここに精神と興味とを共通せる会員は大学委員の承認せる有益なる友誼を十分に味わっているのである。

批評的精神は進歩を伴うものである。工業は現状不満の精神の故に発達する。進歩的工業は常に新しき境域を開拓し、未知の世界へ未知の世界へと進む。現在の標準を保つに過ぎざる製造業者は、頓て他人の後に瞠若たらざるを得なくなる。大製作所の中の最も有益なる仕事は調査考査に在るのであって、この部門は現状不満という根本精神を具象する所である。ロータリーの最大なる指導者は現状に不満を感じて精励する。ロータリーは常に真摯なる批評には欣んで従おうとしているものである。

Wud some power the giftie gie us

To see oursel's as ithers see us. (註一一一)

- 註一〇 ハーバート・スペンサー Herbert Spencer (1820-1903) イ
ギリスの哲学者、社会学者。著書に「社会学原理」がある。
- 註一一 バーナード・シヨウ George Bernard Shaw (1856-1952) イ
ギリスの劇作家、評論家。
- 註一二 (大意) 他人が自分を視るように、自分自身を視る能力が与えられますように。

XV

明日のロータリー

ロータリー会員は前代よりの伝承を重んじ、同時に将来に対する己が義務を忘れない。青年のために便益を計る方法は沢山ある。その計画に独創の思考を示すのもよいが、また伝習の跡に追隨することも一法である。ボイ・スカウトが人気を博していることはすこぶる自然であつて、多くのロータリー会員が金と時とを費して同運動を援助している。ロータリー・クラブの下に少年クラブが幾種もある。これら少年クラブは、ロータリー・クラブがこれを組織し支持しているのである。

著者は最近南アフリカに於て、寄る辺なき子供を收容する立派な学校数カ所を訪れた。これらは何れも個々のロータリー・クラブの維持によるものであつた。ロータリー会員は到る処でこの事業に熱心に携わつてゐるのである。

教育の重要なを認めて、ロータリー・クラブは現に二百有余の学資補助基金を有し永久にこれを供給しようとしてゐるのである。現在の少年は

成長して将来の大人になる。

ロータリー・クラブは、アメリカ中の専門学校生徒をしてチャールズ・イー・バーカー博士の講演に列せしめ、これが費用を助けて多年に及んでいる。青春の危機にある約百五十万人の青年男女を対象とし、この方法によりて最も重要な使命を彼らに達することが出来た。またその一部分としてバーカー博士の男子に対する『父の息子に対する務』、女子に対する『母の娘に対する務』の如き最も有名な講座もある。

少年週間と称する催しは、ニューヨーク市のロータリー・クラブが熱心に行っている所である。「再就学」運動は約五百のロータリー・クラブが催している事業の一つである。

成人の少年に対する現今の態度は前代に於けるそれとは全く異なっている。従前の主要目的は子供を静肅に保つにあつたが、近代の方法は子供の信頼と愛情とを得んとする所にある。子供を圧制するよりもこれを指導することが有効で可能である。国家の最も価値ある財産は青年であるから、青年の爲めにする企図には価値がある。これを如何にせば最良の結果を得ることが出来るか。青年男女の生活をしてその将来の安寧及び幸福を保持

せしめ、これが統御の方法を確実たらしむるためには如何にせば可なるか。心理学上の或時期には少年を逆路から正道へ転換させることは比較的容易である。シカゴのユニオン・リーグ・クラブは一つの実験の意味に於て、警察眼には市中の最悪の場所と考えられていた区域に少年クラブを設けたのであったが、結果はその地方に於ける犯罪は減じてほとんど憂慮を要するところなき状況となった。同区域の少年達は正道へとつれ戻されたことである。

我々の祖先の時代には、通常の少年の生活には遊んでいて可いという時は殆んど無かった。少年は畑で働くか店で働くか、その他何処に行くも働かねはならなかった。働いて閑のなかった少年は過失に陥らなかつたばかりでなく、これがために立派な訓練をうけることができた。今は労働減少を計画した結果父親の労働時間が減じたことは勿論、少年の働く必要が殆んど無くなつて了つたのである。この少年の放漫になり易い精力を如何に費さしむべきか。

少年の落着かぬ精力をいかに費させるかという問題に対して、少年自身が種々の少年運動を採用して現にいくらかこれに答えている。多くのアメ

リカ人は無銭旅行の流行を国をおびやかすものであると考えて、法律の力によつてもこれを鎮圧しようとしているのであるが、著者はそこに自ら良法があつて存すると信じているものである。簡易な仮設キャンプはこれを善良の方向に進ましむる一步である。無銭旅行の流行はこれを極く控え目に言つても、正に青年の精力の遣り場となる役割をなしている。すなわち、かくの如くにして先ず自国のことに就いて学ぶところあらしめ、また人生の現実を知らしむる機会を与うるのである。最後に大切なるは彼ら青年を他日の珠となすべき艱難に遭遇せしめ、人間に必要な品性陶冶の苦験を味あわしめるものである。

何れにしても無銭旅行を非難するは著者のことではない。著者は青年時代に自国の到る所を遍歴し、三たび大西洋を渡つて世界の事情を学び、眞の人生を経験しようとして企てた。時の歴史に有用とされたあらゆる種類の艱難を経験したのであるから、著者は決して無銭旅行を非難する者ではない。そもそも無銭旅行第一の要件は規律にあるので、それは鎮圧ではない。成人の指導者が生じなければ青年の指導者が生ずることであらう。しからざれば遂に如何。

一日の動労時間が将来更に減少を見ようとしているのは警戒すべきことである。閑暇が動労時間よりも多くなるに従い、何故教育をもつぱら少年動労の上に集中せねばならぬか、走れ将来の少年は閑暇の使用法を学ぶことを最も必要とするためである。少年がその動労の結実を楽しむ力を失えば、たとえ事業に成功しても何の利益もないのではないか。仕事は重要であるが生活は仕事よりも重要である。教養は技術よりも大切である。アメリカ人はヨーロッパ人の書いたものを読んでその中の或る部分には常に必ず益せられるであろうが、著者は幾度か外遊して後一つの事実を確知するに至つた。すなわちヨーロッパ諸国人の仕事と生活との関係を見るに、我々アメリカ人よりも更に大いに健全なる考え方に出ているという事実である。ここに困難なるはアメリカ人が国境を拡大するに従い、その生産機関を促がして遂に統制し難い程になりつつあるということである。

国立公園や州立公園が発達して青年を神経過敏なる都会生活の影響を受けざらしめ、これを清新なる戸外生活に誘い出すに至つたのをみることは、時代の最も有望なる表徴であると思う。真に自然を愛する者が悪人であると言ふことは未だかつて聞かない。自然界は疲労せる神経を慰めて休息を

与える。自然は緊張より戻つて休憩をうるかくれ家である。エマーソンは、美は必要である。高尚な生活に於て特に美は必要であると言っているが、我々は少年の情操に戸外生活への愛着心を培養することを力めなければならぬ。戸外生活を愛する報酬は実に夥だしきものがある。我々が今に於て忠実にこれが計を為しておけば、将来の人々は他日また同じように之にむかつて考慮を費すに違ひない。

不具児童救護事業も着々として進捗している。この運動には精神的価値と均しく莫大なる経済的価値がある。この救護がなければ社会に重荷を負わず筈の数千の児童が、この事業の恩恵により社会に幸福なる、しかして独立し自活し自重する成員となつている。ある市のロータリー・クラブには職業指導委員が設けられ、これが指導により児童は出でて自分に適した職業に就くことを得ている。人道主義の施設がロータリー会員の支持を求め、これもまた顕著である。

これに交渉ある決議第三十四の精神にもとづき、ロータリーは不具児童の事業を独占の態度に出ずることをなさない。かかる事業に興味を抱きこれを補助せんと志す他の経営にも進んで参加している。すなわちロータリ

ーは事業を創始しその資金をも供給したのであるが、他と共同した責任もまたこれを分担し、事業はますます進捗し且つ整備している。国際不具児童救護会がロータリーから発生したと称するもあえて不可はない。この事業は誇るに足る大なる人道主義の偉績である。ロータリーの価値の有無を問う人々にも、この種事業は興味の多きものでなければならぬ。

クリーブランドに国際不具児童救護大会第十回年会が開かれた時、同会は「不具児童権利法案」と題する決議を採択したが、その最後の章に次の如く記している。曰く「不具児童自身のためには勿論全社会のために、彼らには近世科学の進歩より得べき最良の体健、近代教育が与え得る最善の心理、近代の職業指導が与え得る最良の修練、その健康状態が許す人生最善の地位、その境遇が与える精神的發達への最善の機会を得る権利がある」と。

国際不具児童救護会は欧州に二回の大会を開いて思想の交換をなし、不幸なる児童のため救済事業の進歩及び協調を計ることを目的とした。北アメリカやヨーロッパに於ける同事業の進歩に徹し、外科治療が利かぬ場合は別とし、何時かは不具児童の存在を見ざる時代の来ることが信ぜられる。

ロータリーの社会奉仕事業の救護をうけた青年階級の中から、将来必ず多くの公共事業の指導者が輩出するであろう。

ロータリーの異常なる発達が、巨額の資金を要することは自然の勢であり、その財政は常に保守的であり健全でなければならぬ。細心に遠きを慮る人は万一の場合ということを考えるのであるが、これに備うるため会計には余分の資金を蔵している。

毎年の経費予算は大きいようにみえるが、ロータリーの社会奉仕の多くが果して牡に益している所があれば、費用は意とするに足りない。世界中のロータリアンはその運動のため現に全力をつくしておいて、仕事に見出す満足が彼らの受くる唯一の報酬である。

確実な収支計算のみが、ロータリーの社会奉仕という連続せる流を保障する唯一の方法ではない。元国際会長アーチ・シイ・クランプは別にロータリー財団を設立し、これが計画のために、時と力とを捧げてきたことが多年である。

二つの要素が重要な事業を成就するに際して肝要である。第一は幻である。幻がなければ事業は始まらない。第二は決心である。決心がなければ

ば成功するに至らない。およそ大運動に着手せんと欲する者は、疲労と失意とに長年月を送る心構えを要する。大運動は献身犠牲をなす個人の努力の結果である。指導はその団体の連隊とか分隊というようなものに依るにはあらずして、個人が各々指導するのである。前のアーチはロータリーの財政の重荷を背負って力行しているが、著者はよくアーチを知っている。彼の不屈不撓の努力は遂には報いられ、際限もなく独歩しているに及ばないという確信を久しき以前から持っていた。アーチが人生の航路を終えた後には、必ず他の人々が出でて彼の留めた轍跡を踏んでこれに追隨するであろうと思う。かくてその結果としてロータリー財団なるものが、アーチと呼ぶ精励なる一会負の理想と決心とにもとづき、重要な人道主義的事業のために有力なる素地となることは確実である。正しき確信をもってロータリー会員はその将来を卜し前途を眺めている。

ロータリー・クラブがシカゴに設立の初め用いたる徽章は、単純なる車輪の形にすぎざりしが、後更にその輪牙を附したるものに改め、一九二一年の大会に於てこれを決定して細則中に加えたり。この意匠は固より廻転を意味するものなれども、齒車に依つて一層運動の効果を衰致すとなすものなり。ロータリーの名と共に徽章の保護には頗る意を用い、商標の炉に濫用せらるるを遅く。

XVI

睦まじき世界へ

He drew a circle that shut me out -

Heretic, rebel, a thing to flout.

But Love and I had the wit to win:

We drew a circle that took him in!

—Edwin Markham. (註一三)

相場はシカゴにはなお烈しく煮えたつており、国を愛する市民は最後の産物がよるこぼしきものなるを確信し、有益なる成分を今に忙しくここに投げこんでいる。たとえシカゴの名がロータリー発生の地にふさわしからざるにせよ、その実きわめて適当なところであつたということが、アメリカ人特にシカゴ市民の承認する所とならうとしている。その理由はアメリカほど許多相異なる要素を実験し同化するに好条件の国はなく、また湖畔

の風が強いシカゴ、社会学的に言つてもっとも激烈の地たるシカゴほど、多くの深刻なる社会問題解決の迫っている都会が無いからである。

ロータリー運動は数年前迄は、種々の政党や宗派の人々の小団体と僅かに接触するのみで自ら足れりとしたが、今や遂に襁褓を擲りて立派に世に立つに至つた。かく成功した結果はまた将来に大影響を及ぼすであろうという期待も生じてきた。もしロータリーが今後の二十五年間に、物質的にも精神的にも進歩を続けること今日迄の如くであれば、ロータリーはやがて国際親善の上に最も有効なる感化力の一つになるであろうと明言してよからう。

しかれども常に用意すべきは、ロータリーの最高目的と信ぜられるものを実現するの必要にある。多くの運動は自ら満足せるためにその目的を達成しなかつた。ロータリーは容易に自ら満足してはならぬ。現に手近にすこぶる戒心せねばならぬことがある。ロータリーに属する各国の新聞記者、出版者、教育家、講演者、説教家、著作家、脚本作家、興行家、法律家、実業家のすべてがまさに為すべき沢山の事がある。無数の人々が煽いで起した火焰は容易に消えるものでない。赤は現在の世界に於て最も目立つ色

であるが、未だ生れない人々がなおここに生まれんとしていて、しかも彼らは少くとも色盲ではあるまいと思われるからである。

絶滅せねばならない寄生虫は、いわゆる「ジョージにさせろ」主義であつて、一敗に「他人任せ」主義として知られているものである。この悪弊はロータリーにも夙に出現して随所に看取されている。教会では多くの会員が腰掛けより離れず、そこで彼らの熱心な奉仕をしている。牧師に頼つたままで、何らか印象的なまたは極まった文句を聴くまでは腰掛けから離れない。ロータリーでは多くの会員が、食卓に於てその主なる奉仕をなし、プログラムが終るまでは敢えて動こうともしない。才智に富める牧師は、後れてくる人々を悩ます「他人任せ」主義を絶滅せねばならぬと同じく、聡明なるクラブ会長もまた、後から来る人々に害ある寄生虫を絶滅しなくてはならぬ。立派な演説は出席を盛にするためには大切であるが、立派な演説が集会の全部ではない。他に為さねばならぬことがある。必要を見出し臨機これに応ずるのが指導者の任である。

有為な指導者は内に充たすとともに外に引出す方法を見出すべきであろう。最後の分析に徹すると指導者の成功は後者よりも前者にもとづく方が

多いようである。雄弁をもつて人々を辞易させるよりも、これを開發する方が更に大切である。ロータリー・クラブの会長には出来上った雄弁家を選びたがるのは自然の傾向である。著者の信ずる所に拠ると雄弁を揮う力はかならずしも会長に不利ではないが、たまたま弁舌に頼りすぎると不利に陥ることがしばしばある。かりに甲は弁舌は下手であるが眞の活動家であり、人のために奉仕してこれを開發することに努力する。乙は雄弁なる会長で人を感動せしむるに足る演説を為し、会員を動かすことが得意であるとす。その場合著者からみると、一方を選ぶ外はない。即ち甲の活動家を選ぶに限る。

言わねばならぬことは概ね言い尽しても、為さねばならぬことはなお多く残っている。この点を力説していくと、有力なる会長はその資格を有しながらクラブには欠席がちの人であるかもしれない。最も偉大なる会長とは陸軍大将の如く後方に控えて計画し処理し指揮し、大局について責任を負う人であるかもしれない。かかる会長こそ多くの有力なる指導者を出現せしめ、これら指導者は更に輩下の人々を發達せしめ、かくして上の指揮が下に徹底するのである。

ロータリーの運動は一つの実験室にあるもので、著者はかつてこの実験室の中で人々の反応作用を研究する稀有の機会を得たのである。著者は大無辺の教訓を学んだ。人間の心意過程を研究して結論を下しかねたこともしばしばあった。著者の仕方は自説を固持するのではなく、忍耐してむしろその発展する日を待つにあつた。この仕方に従つた結果著者はしばしば誤解を避けることができ、殆んど拭うべからざる疑惑をも忽ちにして一掃し得た。著者の年来の結論が間違つてゐることを知るに至つたことも稀でなかつた。

エミイル・ルドイヒ(註一四)に言わせると、彼はとるに足らぬ人と言うものに出遇つたことなく、他人から厭やと思われたこともない。彼は常に何ものかを学ぶことが出来て今日に及んでゐると。

ロータリアンはその朋友や会員が一国の中にのみ局限してゐないという事実に対して意を強くしている。あらゆる階級あらゆる国々の男女が反覆してロータリー運動を称賛し、その發達の迅速にかつ拡大するのを驚歎している。

前国際ロータリー会長クラブが、世界中の有力者から受けとつた讚辞

を集めている中に次の如きものがある。

セオドル・ルーズベルト(註二一五)曰く、「予は政治上の堅固なる契約や同盟を信じないだけ、いよいよますます国際ロータリーの如き会合が捧持する観念を深く信ずる。国と国との利害が背馳する場合には、いかなる同盟いかなる条約も親善を保つことは出来ない。もし国民同志が互に理解し真に同感を有するに至れば、別段政府と政府との間に同盟を結ぶの要はない。国際ロータリーを結成するような人々の接触は相互の理解に資するところ疑いなきことである」と。

ウッドロー・ウィルソン(註二一六)は曰く、「世界各国をして永久に平和ならしめる唯一の良剤は、各国政府の官憲に頓着せず、国民互に友誼を有する」という結合剤である」と。

シヤム皇帝宜わく「ロータリー運動の達成した迅速なる進歩と獲得せる地歩、その行われる各地における協力とをみて欣快に堪えない。ロータリー会員は、多くの異国及び異宗の人々を互に良く理解せしむるに足る旺盛なる思想観念に相合している。人類一般の幸福を實際に増進させることがロータリー運動の国際的性質である」と。

徳川家達公はその貴族院議長たりし時に曰く、「ロータリーが創立以来人類一般の幸福のために最も優秀なる事業を為したことは甚だ同慶に堪えない。ロータリーは現に世界中から祝意をうけているが、まさにこれを受くるに価している」と。

大英国宰相ラムゼー・マクドナルド(註一七)は、ウイーンに開かれた国際ロータリー大会にメッセージを伝えて曰く、「当今の時代には、ロータリーの如き大会が特に機宜を得ている。軍備縮少会議出席者の悉くが、その代表する国民の後援を信頼し、同会議の表わそうと志す理想に対する一般の熱心を喚起するを得てこそ、初めて軍備縮少会議は成功するであろう。実際に万国の全階級を代表するロータリー国際大会以外に、誰か能く真正なる観念を認別して有益なる仕事を為し得るものであろうか」と。

ベルギー皇帝にしてロータリー会員に在したアルバート陛下は宜わく、「活動的なる公共的精神は良き政府の基礎である。ロータリー主義は国家の良僕を作り、国家及び社会の成員の間に、世界の最も要望する友誼を増さしむるものである」と。

ヘント・ムツソリーニ(註一八)曰く、「ロータリーの企つる所は最も可い。

同会の事業は必ず継続さるべし。予は進んで同会に賛成する者なり」と。
ムツソリーニの言葉は常に卒直で、能く要点を掴んでその熱誠を示していることをみる。イタリー皇帝も、ムツソリーニも、全イタリーを包含する国際ロータリー第四十六区が新たにそのガバナーを選挙する毎に、これに祝辞を送るのが恒例となっている。

オハイオ州選出の上院議員故セオドル・イー・バートンは曰く、「予はロータリーを信ず。諸君はこの最良なる組織を現代世界に普及し、もつて親睦、友誼、理解、好意を發達せしめ、国際間の平和に資せしめてゐる」と。

たまたま一イギリス人が一アメリカ人に向つてロータリー・クラブはアメリカに出来た何れの運動にも優り、イギリスに偉大にして有益なる感化を及ぼしたものであると語つたが、彼イギリス人は相手のアメリカ人がロータリー会員であることを知らなかつた。

ロータリアンならざるイギリス某宗教家は声を大にして曰く、「現代のもつとも顕著なる事象はロータリー・クラブの出現である。シカゴのノース・ウエスタン大学総長は「ロータリーが世界最大の偉業の一つである」と語つた。

ヘンリー・ワイ・ブラッドン卿曰く、「われらはロータリーの感化の下に、花が太陽の光に応じて開くが如くに団結の拡大する有様を見た。ロータリーは新規な精神的形態を作つて、これらの人の中に吹きこんだものではなくして、ロータリーは実に運動不足のため徐々に萎靡せんとしてなお潜在せる良質を起し、これを激励したものである。ロータリーはこの世界人類をして更に明朗な健全な安全な幸福なるものたらしめんがために、その会員の進んで事に従い、労を厭わざらんことを求めているのである」と。

バーミユダのジョン・アッサー知事は著者に語つて、ロータリーは同地方に於ける他の何れの機関にも優つて、相互の好意を盛ならしめたといつた。

リードの教区牧師であり、大ブリテン及びアイルランドのロータリー国際前会長であつたダブリュー・トムソン・エリオットは、ロータリーをもつて多くの崩壊力の中の結成力であると考えた。

ニューヨーク、スケネクタジの会合に対しルーズベルト大統領の挨拶に曰く、「ロータリーについて思うとき予の眼前に、中心を同じくする幾つかの円が浮んでくるのを覚える。これらの円は最小より始つて最大に赴く。

予はこれを称して社会的国家的及び国際的感化という。ロータリーは公共的及び国際的意識を作るすこぶる貴重なる価値を発生せしむる力として王座にあるのをみる。ロータリーの人を癒やす精神、人を向上させる感化は、現代世界において甚だ必要である。ロータリーはその固有の正直、公正なる処置、整然たる理路、個人の権利及び価値、個人の社会に對しまた社会の個人に對する責務に味方するものであるから、ロータリーはこの常に畏縮せる世界にありて、人と人、国と国との間に共通せる理解、平和なる關係を保持する有力な安定的動力であると看るべきで、予は、ロータリーの効果と勢力の絶えず増大せんことを望む」と。

トマス・ジェファソン(註一一九)は、親睦とは人生において最も重要な境遇であろうと言ったが、いかにもロータリアンはこの真理を体得して、自分達が親睦を世界中に広げようとするものであるということを、誠心誠意をもって信じているのである。

友誼と親睦とは自然のもので、機会をささえうれば發育するものであろう。これを成熟させる時機を失うことは、ダイヤモンドを海に投ずるよりも愚なことである。人は皆日々塵世の労苦に疲れているものであるが、夕べに

友人の訪れ来たるあれば、鬱情は忽ち去つて新たなる気持に向うであらう。世界は人をして互に往来せしむるため良い道路を必要とする。しかし隣合の往来は堂々正門によらず、裏木戸よりして可なりである。われら祖先の時代には、人は「立寄つた」ものである。わざとあらたまつて「訪問する」よりも「立寄つた」方がはるかに愉快である。臨時の用意に「余分の皿」を忘れてはならなかつた。それが好意の先駆者であつた。親しき訪問は最高の音調にして、鮮肉、強壯剤、葡萄酒に優るものである。請うこれを試みよ。

シルベスターはロータリーという言葉を最初口にした人であるが、著者の住める、「カムリー・バンク」より彼の家へは一条の道が通じている。樹の森の間を踏みならされた羊腸とした路で、それは春になると数知らぬ花が匂い、秋が来ると赤々とした塩膚木が輝く。森は暖かい日には好音に満ち色々の美しい鳥が常にここを去らない。



カムリーバンクから樹の森を通ってシルベスターの家へ通じる小道

この特別の道は二十余年間シルとハリスの長靴や短靴の痕を印している。綿密なる観察者は定めて鐘のへつた靴跡をも見出したことであろう。シルとハリスが互に走り往復す

る時は着のみ着のままであつて、彼らの訪問は衣服をみせるためではなかつた。

シルベスターの夫人は、人を歓待するため忙殺される場合にも決して些かの疲労の体を見せなかつた。ジェシー夫人は生れながらの立派な人として際立つていた。イリノイ・バプテスト伝道局長、シカゴ教会同盟婦人会長等に就任し、ロータリー婦人会長にも二度選ばれた。彼女はスコットランド系の出にして、著者の妻ジーンは純粹なるスコットランド人である。おかしいことには純スコットランド人を第一位とし、血統の混じつたのは第二位だと考えたがるのであつた。

シルベスターと著者とは、ロータリーのため過去三十八年間しばしば同行各地に演説して廻つた。彼は実に予が多年の親友である。

著者はいわゆる好景氣時代を飾つて生活したある人を知っている。何人もその神聖とせる所に住む彼を妨げることは出来なかつた。彼の家は実に城郭そのものであつた。もし封建時代であつたら彼はこの城をめぐらすに壕をもつてし、吊橋がかかけられ墜格子が下がつていたであらう。何人も事業という神聖な名をもつてせざればここに闖入することを許されなかつた。

たちまち破産の憂目をみると共に城が没落した。彼と事業を共にした人は自殺した。しかるに彼の血管にははげしい血が流れていたので、自殺するとうような愚を為さなかつた。彼の財産目録の無価値となつた多くの物の間に、驚くばかり尊いものがいくつかあつた。いわゆる好景氣時代には看過されほとんど忘れられていたが、それ以前の逆境時代には尊重されていたものであつた。失敗には遭遇したが意志の鞏固であつた彼はそれらのものを掘り出し、今は地上の何ものもふたたびこれに代うることを能わず、またその値踏みの出来ないものとなつた。その目録は親睦、友誼、同情、慈愛すなわちこれであつた。あらゆる貯蔵品、公債証書その他の何たるを問はず取つてこれと比較せよ。この意志鞏固なりし彼はその城を失つたが家庭を見出したのである。

エマーソンの友情を論じた名文の中に曰く、「我々が愛情に浸る刹那世界は変形する。しかる時冬もなく夜もない。倦怠は去り悲惨は消え、すべての義務すら消滅し去る。進行中の永遠を充たすものは愛する人々に輝く形態である」と。

エルパート・フツパードは親しき交際は飲食と同じく必要であると言つ

たが、真に親しき交際がなければこの世界は暗黒である。人は貧を忍び病に耐え、有為転変を我慢することができるとしても、もし朋友を有せざればほとんど生き甲斐がない。

対談は必らずしも親しき交際に必要ではない。カーライルは友と向き合つて沈黙したまま長き冬の夜を過ごすことを好んだ。二人はともに坐して煙草を吸つた。親友と黙坐相對して心に相通う喜悅を味わうことを知らざる人ありや。親友と交わるには鵲のように饒舌するには及ばない。

ロータリーは個人、国家、國際の親睦、親切、友誼、援助という伝統を作らんがため献身する人々と、一致結合することを第一義とする。ロータリーはかつてこれ以上の特権を求めて来たものではない。公共、国家及び國際上の福利のために計らなければならぬ案件は、挙げて数うべからざるものがある。

ケント公はイギリス王の末子にして、イギリス諸領島のロータリーの後援者であるが、フォルクストーンにおいて先きに開かれたロータリーの会合において演説された中に曰く、「われらは皆方今、もつとも困難な時代に生存していることを知っている。たとえ自ら知らずともこれを語るの事実と

人とが夥だしく存在している。世界の危機に面して各国の実業家間の親密と協同との表徴を高く掲ぐるを得ば、われわれは将来かならずこれが価値を發揮し得べきことを信じて可なり。世界が今日要求するものは信頼である。われわれは信頼を博せざるべからざるものである。国際間の理解、好意、平和が増進しているという信頼——これにまさる高尚な情緒、高尚な仕事としては無い」と。

人間の進歩が遅々たるは遺憾千万である。ジェームス・ヘンリー・ブレステッド博士(註二二〇)は、人類がそのいわゆる「人類の擡頭」時代を通じて、野蠻状態から文化に至ったことを説いている。更に「人類の撞頭」時代を細別すれば、唯物論の第一回の失敗、良心の黎明、品性の発見、社会的理想主義の出現にして、少なくともキリスト誕生前二千年間に起つたものである。しかるに社会的理想主義の過程は未だに遂げないでいる。しかしてその発端より現今に至る迄かつて中絶したことがない。急激な突発事変がしばしば文化をおびやかしてこれを崩壊せしめんとしたが、しかし歲月を閲する中にまたその正しき進歩を遂げたことは明白である。甲時代の通則は乙時代には例外となり、また思慮が明らかになり希望が輝くにとも

なつて、乙時代の例外なるものは遂には全く消滅するに至つたのであつた。

And step by step, since time began.

I see the steady gain of man.

—Whittier. (註二二・二二)

シカゴ大学哲学部長エドワード・エス・エイムズ博士は予言して、大学全体が久しからずして世界を大観するを得べき資格を具え、生物学、社会学、人類の研究及ばざるところなきに至るべしと為して曰く、大学の上級生の多数は實際既にこれを成就するの境地に達したりと言ふも可なりと。

交通が速力を早めるため、飛行機その他の機械が未曾有の発達を遂げてきたが、これによりて学芸機関がその見解を拡大することの必要なることは言をまたない所である。しかして現にその行われつつある有様を目撃するのは幸とすべきで、世界は実に判り易くなつてゐる。

ロータリーと称する小集會が始めて開かれて以来三十年を閲した。その間に我が愛する前庭にオルター・ドラモンドの手植の針樅樹は緑に立ち、

遠国よりの親しき訪問客を迎えては、微風に揺られ枝を垂れて優しく会釈していたが、今や丁々として人の目を引くまでに成長した。しかれども一双の榭樹が依然としてすべてのはかなきものを遠慮がちに眺めおろしている有様は、少しも昔日と異なる所はない。

その歳月の間に、近くにある墓地の芝生はしばしば荒らされた。これは亡き人々を記念する塚が殖えて行くからである。

またその間に子供らはいろいろの段階を上つて成長し、幼少時代から成人時代に達した。彼らは実務に経験をつみ、また娘達は嫁いで各々家庭を作るに至つた。しかるにこれを両親より見れば一生涯のもつとも幸福な時代すなわち子供等の咲笑が家中にひびいた日は、なお昨日のように思われることである。三十年は不朽の愛にくらぶれば実に数うるに足りない。

衷心ロータリーに興味を抱く人々は以下の如くに信ずる。曰く、他の奉仕クラブは結局我らの選べる範囲内において、社会的進歩のために寄与するにすぎざるものとみる。曰く、われらは相互の事業関係につき適当なる見解を持すべきである。曰く、われらは決して自己満足に陥ることなかるべし。曰く、われらは逆境にも順境にも、またあるいは戦争にも平和にも

直面するの覚悟なかるべからず。曰く、われらの思想は硬化することをゆるさず。曰く、われらは何時までも成長してやむことなかるべし。以上はこれわれらの信念である。この世界はたえず変化している。しかしてわれらは世界とともに変化することに用意せざるべからず。ロータリーの講和はくりかえさざるを得ない。

歳月人を待たず、しかるに歳月は相対的なもので絶対的に欠くべからざるものではない。意志堅固な人々は時間の前髪をつかんで己が命令に従わせる。過去三十年間において、幾多熱心の人々がロータリーを世界に普及せしめ、これを八十カ国の神経中枢の中におし入れた。

ロータリーの理想は認むべきいかなる効果をあげているか。この問題に關し一時代の精神を眼前に描き出さんとすることはむずかしい。リップ・ヴァン・ウインクルの如く甲時代に睡つて乙時代に醒めるものならば、明らかなる変化をみることもできよう。

何故にロータリーは一九〇五年に現われたのか。思うに社会運動もまた個人と同じく遺伝と環境との法則に従わなければならぬ。ロータリーは寛大という大精神をつたえ ロートリー というシカゴ魂を嗣いだが、二つなが

ら共に多くの人々の間に伝わる無形の世襲財産である。国際ロータリーの会長や役員、ガバナー、クラブ会長は、一人としてその痕跡を世に残さざるものはない。個々の会員は代る代る環境と共に遺産の所産であるから、一九〇五年シカゴにロータリーの起った所以を知らんがためには、さかのぼって歴史を回顧しなければならない。

ロータリーの根は当代文化の中に深く埋没していた。同運動を助けた力は数世紀の間蓄積されていたものであると言つても差し支えない。

アメリカ西部の自由にして友誼に富めることは知れわたつていた。西部には伝来の憎悪心が蔵されていない。傷は深いとしても早く療治する方法がある。南北戦争の終るや、南部連合軍の司令官ロバート・イー・リー將軍(註二二三)が北部同盟軍の司令官グラント將軍(註二二四)の前に降参し、その表徴として帯剣を脱してこれを捧げたときのことであるが、グラントはリーに向つて、貴下は勇将にして余りに善戦したため遂に剣を失うに至つたのであると慰め、剣を返して鞘に収めさせた。今日アメリカの北部では敗けた連合軍の歌「デイキシイ」ほど熱心な喝采を博する音楽はない。これあくまで平和は守護せざるべからずとの精神から発することである。

西部は東部より生じ新世界は旧世界の所産である。ニュー・イングランドはロータリーの生れる久しき以前において、初代の特質なりし偏狭と頑固とを放棄してアメリカの自由を育てる地となった。

プラトン哲学と同じく、ロータリーは現在の場所及び現今の時代とに関心する。一九〇五年二月二十三日は実に心理的な日であった。当時のシカゴでは正義の力が邪悪に向つて激甚なる戦を挑み、社会の大渦巻が白く沸騰していた最中で、ロータリーが生れるのにもつとも適していた。

ロータリーは未だ幼なりといふべきである。三十年は一個人の生涯にとりてはやや長きも、社会運動の経験においては短日月である。われらは未だ全く実験的階段をのぼりつくさざるのみならず、なお新たな海底を測量し新たな境界を開拓しつつある。おそらくわれらはまだわれら自身の大なる好機会を発見してないのである。しかしわれらの意見はかつて銷沈することなからん、われらは倦まず前進すべきである。

一九〇五年ロータリーが生まれる久しき以前、すなわちいわゆる「このロータリー時代」の特徴を見るに至った遠き以前よりロータリーはすでに創設中であつた。数世紀にわたる開明が揮渾の中より宇宙を現わしつつあ

った。蒼々たる暁天は日の出となった。迷信は力を屈して理解の前に降服するにいたった。

万人に対する好意の精神をはじめて胸に宿した彼が、天の故郷に昇つてからすでに久しい。宗教の名のもとに人類の同胞たることを説いた偉人も、すでに遠き昔に最後の場所へと去ってしまった。

That man to the world o' er.

Shall brothers be for a' that. (註一五)

と歌った詩人はその痕跡を時の上に印するのみにして世を果てている。信仰のために闘った峻厳なるピルグリム・ファーズー達が貢献をなしたことは、また後世の人々が寛大なる態度をもって貢献した所のものがあつたのと同様である。

一九〇五年シカゴ市において物質上及び社会上の風紀刷新のため闘える諸勢力は、醜行、泥酔、腐敗に対して断固として勇敢なる抗争をなしていた。実業は階級意識を抱くに至り、また実業が掠奪同然になり得ないこと

を気づきはじめていた。一般の人々も公共のためという自尊心に眼ざめて来たり、この自尊心が社会奉仕の先駆となったのである。

ロータリーは常にその生得権を感謝せざるを得ない。これなくんば成功を期すること能わざりしなるべく、これありてこそ万事は成就した。

ロータリアンはその団体運動に対して社会が同感を表し、正しくロータリーを諒解したことに對して感謝すべきである。しかしてロータリーの団体運動に對する非難は少なく賞讃方が多かつたことである。もし単に一會員の資格においてロータリー精神を把持するをもつて足れりとすれば、これに加わる會員数は現在の千倍にも達したることならん。幸にしてロータリー精神には版權といふべきものがない。本書が印刷所の手から離れる時には、著者と妻とは夏の航海にあるべく、二人は赤道からはるか南へ下り、比較的小さきロータリー団体に向い、またその精神においてはロータリアンたる無数の人々に向つて挨拶の辞を呈するのである。

およそロータリー會員は、身分の高下と貧富の別なく、人種にかかわらず宗教家たるを問わず政治家たるを論ぜず、寛大、忍耐、正義、親切、友誼、親愛をこのわれらの知る最善の小世界の住人に支給している人々に、

好意を伝える使節として終始するものである。

太古にさかのぼり最初に万人への好意の精神を宿した人に、人類を愛するがためにその身を殺せる人に、また人生を達観したアイルの詩人にぞ、エドモンド・ハミルトン・シーアズの以下の言葉がひびきわたることである。

For lo, the daysare hastening on,
By prophets, bards foretold,
When with the ever-circling years,
Comes around the age of gold.
When peace shall over all the earth,
Its ancient splendor fling.
And the whole world send bard to song
Which now the angels sing. (註一三七)

註一三 (大意) 彼は私をしめだす輪を描いた。しかし愛と私はそれに打ち

勝つウィットをもっていた。我々は彼をとじ込める輪をかいたのだ。

— エドウィン・マークム

註一四 エミール・ルドイヒ Emil Ludwig (1881-1948) ドイツの伝記作家。

「ゲーテ」「ヒスマルク」等の伝記を著す。

註一五 セオドル・ルーズベルト Theodore Roosevelt (1858-1919) アメ

リカ合衆国第二十六代大統領。国際平和増進の功労者として、ノーベル

賞を受賞。

註一六 ウッドロー・ウイルソン Thomas Woodrow Wilson (1856-1924) ア

メリカ合衆国第二十八代大統領。パリ講和会議の平和条項、国際連盟の

提唱者。

註一七 ラムゼー・マクドナルド James Ramsey MacDonald (1866-1937)

イギリスの政治家、労働党初期の指導者。

註一八 ベニト・ムッソリーニ Benito Mussolini (1883-1945) イタリア

の政治家、ファシスト党の結成者。

註一九 トーマス・ジェファソン Thomas Jefferson (1743-1826) アメ

リカ合衆国代三代大統領。

註二〇 ジェームス・ヘンリー・プレステッド James Henry Breasted

(1865-1935) アメリカのエジプト学者。著書としては「エジプト史」がある。

註二二 この世の初めから一步一步進んできた人類の着実な成果を見よ——
ホイットテイエアー。

註二二一 Whittier ホイットテイエアー (1807-1892) アメリカの詩人。「奴隷
船」「雪」もりなどの詩作で有名である。

註二二三 ロバート・イー・リー Robert Edward Lee アメリカの軍人。南北
戦争の際、南軍総指揮官となったが北軍に敗れる。戦後ワシントン・カ
レッジの総長に就任。

註二二四 グラント Ulysses Simpson Grant (1822-1885) アメリカの將軍、
政治家。第十八代大統領、南北戦争を終結させ、合衆国最高指揮官(陸軍)
となった。

註二二五 もし全世界の一人一人が お互いに兄弟の如くであったなら

註二二六 (大意) 地上にくまなく平和が訪れた時 古代の香気が、その匂い
を発散し 全世界は詩人の歌を歓迎する いま天使が歌っているその歌
を —— エドモンド・ハミルトン

過ぐる年アメリカに開かれし

国際ロータリー大会にてよめる

奉仕てふ心めでたき純絹に

ひたぎぬ

そめたる国の四十あまりの旗

あとがき

この本は昭和十一年三月米山梅吉氏によって翻訳上梓され、二版は同三
十年十一月文献委員会の手によって普及版として出版された。然しそれ以
来十年。現在では極く一部のロータリアンがその普及版を所蔵しておられ
るだけであつて最近のロータリアンは殆んどその存在すらご存知ない様で
ある。

バストガバナーの神野太郎君は何時もロータリーの真隨を知ろうとする
には先ずこの本を読むべきであるといつておられたが私も全く同感である。
然しポール・ハリスの高い理想と豊富な経験や学識を以て綴られたこの
本を翻訳された米山梅吉氏の麗筆は現在の若い世代の方々にはちと難解で
あると同時に米山氏が真意を娛り伝える事を恐れて原文の儘にしておかれ
た英文の詩や名著の中の一節等も解釈に苦しまれる場合が多いのではない
かと思う。

だがこの格調の高い文章を消化しやすすい文章に砕いてしまふ様な事は到

底私等のやる可き事ではないと考え印刷のミスと思われる箇所のみを訂正して原文の儘印刷した次第である。

然し文中の人名の簡単な説明や英文の詩等の邦訳は註として挿入する事としたし原書にある挿画も今回は載せて見た。これ等の事が多少とも読者のお役に立つなれば幸である。

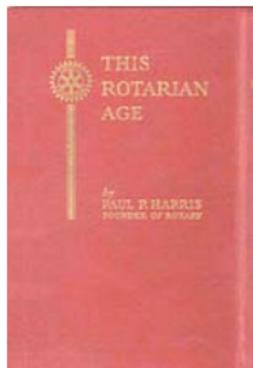
終りにこの本を出版するに当り大部分の仕事をして下さった「ロータリー」の友」の諸君に深い感謝の意を表するものである。

一九六六年十二月一日

ヴェトナムにクリスマス停戦が訪れる
報を開きつつ

安 野 讓 次

電子文庫版 「ロータリーの理想と友愛」について



『This Rotarian Age』は1935年、ポール・ハリスによって書かれR Iから発行されました。このポールの著作を翌年の1936年、米山梅吉氏により「ロータリーの理想と友愛」の邦題で翻訳出版されました。

昭和十一年三月（1936年）に、第一版、二版は同三十年十一月普及版として出版され、そして昭和四十五年六月に三版が発行されています。

「電子文庫版」はこの三版を底本としてデジタル化しています。（ロータリー文庫収録）元本を尊重しながら、PC上で閲覧しやすいように「A6サイズ」で再編集しています。また、三版での挿画、注釈も収録し、画面上の「ノートマーク」にカーソルを持っていくと注釈が表示されます。「詩歌」では英文も表示されます。クリックするとノートが表示されます。

ロータリー文庫では「ロータリーの理想と友愛」について

「ロータリアンとなつて、未だにロータリーから十分な人間性を感じてくれない不満を抱いているロータリアン、あるいは、ロータリー運動に興味を失いかけているロータリアンは、本書を一読することで不満も誤った認識も直ちに是正されるでしょう。

ロータリーの創始者ポール・ハリスが、ロータリーの昨日、今日、そして明日を説いたものです。精読することによつて、ロータリー運動の真髓が把握できます。」

と紹介されています。

ロータリーが第二世紀を迎えた今、いまだ輝きの失なわれていないこの「ロータリーの理想と友愛」、ロータリーが大きく変貌しようとしている今日、あらためて読み返す時ではないかと思えます。

2007年6月

大阪南R C Y. 木村

ロータリーの理想と友愛
米山梅吉 訳

電子文庫版 編集・作成

2007/06 大阪南 RC